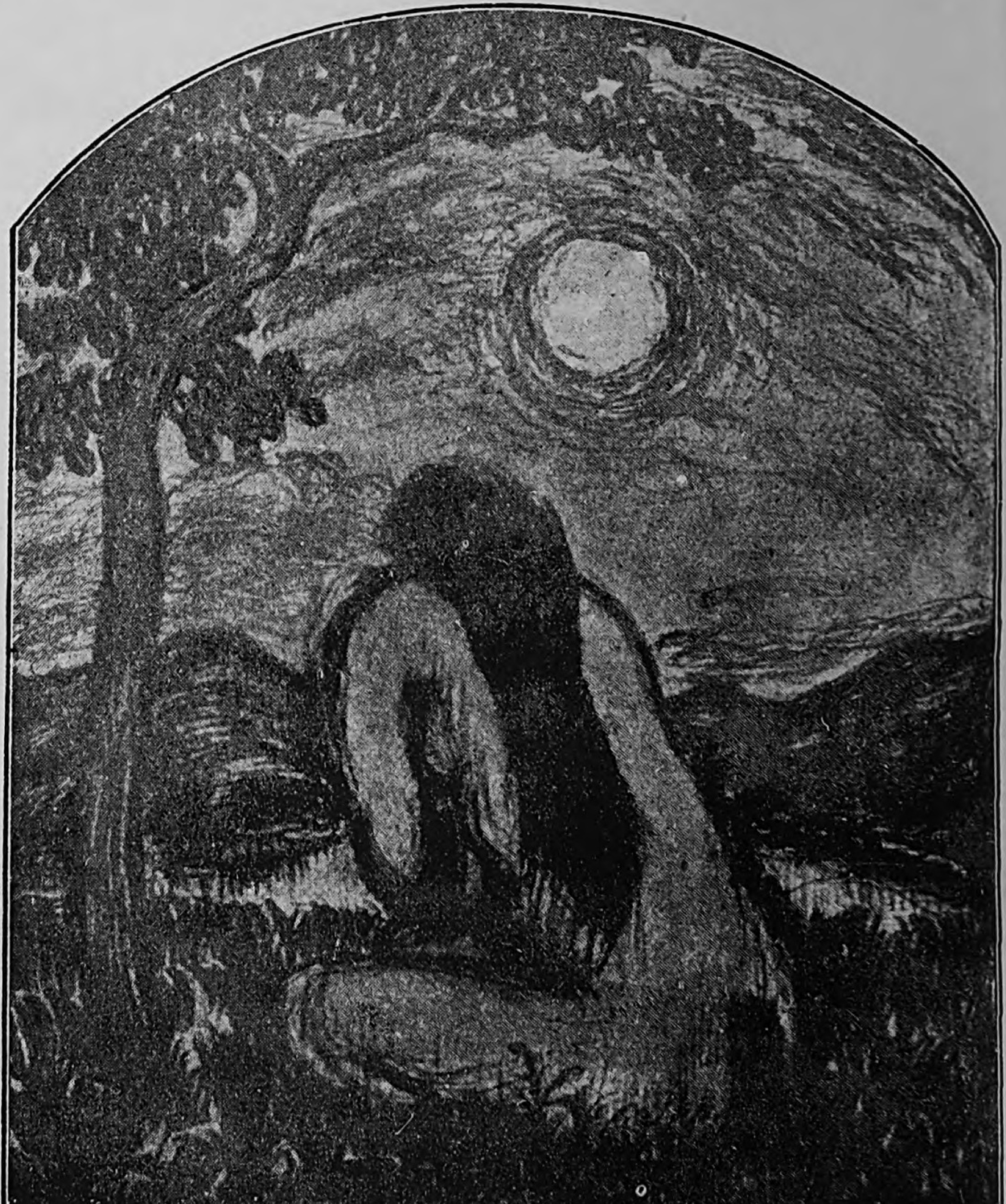
青鞜



特別號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青

鞜

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

五月號目次

不具者の一人（小說）（一）山田邦子

昔の愛人に（小說）（二六）齋賀琴

こゝのつの頃（小說）（三八）濱野ゆき

石のをんな（小說）（五七）奈々子

處女作（小說）（八〇）千原代志

沈丁花（小說）（一三九）五明倭文子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

水神の祟（小說）（一六三）岡田ゆき
神性と人間性と戀愛と（小說）（一八〇）原田皐月
東郷ペン（感想）（一八九）岡田八千代
女性の直覺（飜譯）（二一〇）山田わか譯
苦痛にむかひて（感想）（二一九）生田花世
噓言と云ふことに就ての追想（二二八）伊藤野枝
編輯室より（二四八）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

不具者の一人——山田邦子

昨夕おそく、お暇が出たと言つて、すえはしよんぼりと家へやつて來た。又かとばかり私には聞かない前にもう一切が分つたやうな氣がした。すえは相變らずの調子でくど／＼と其いきさつを話すのであつたが、例の通り一向要領を得ない、たゞどこか知り合ひへ行つて、言ひ付けられた時間に間に合ふやうに歸つて來なかつた爲ひどく叱られてそれがもとでお暇が出たといふ事だけは分つた。それにはいろ／＼辯解があつたけれど、私はそんな事を聞いても「すえ」其ものが分つてゐるし、大澤さんでたゞそれだけの事に暇を出したといふ、聞けば大げさな事だがそれも分つて無理ない事だとそれに付いては思つた、私はともかく大澤さんからの手紙を待つた。

屆いた手紙で見ると、此頃外出ばかり多くなつて困つてゐた處、昨日の朝。洗濯ものを一杯つけておきながら、日頃よく「すえ」と同じ宇都の宮のものだとかいふ人の家に矢張り宇都の宮から知人が來たから一時間ばかり暇をくれろと言つて雪子さんのキルク草履をつ

つかけて出て行つたなり三時になつても四時になつても歸つて來ないので雪子さんが腹を立てゝ向ひに行くとお酒を飮んだかして赤い顔をしながら、くわえ楊子でニコ〳〵して出て來たとかで、あまりの事に家へ連れて來て小言を言つたら一言の詫びもしないで直ぐ此まゝ暇をくれろと言ひ出すので意地にも我慢が出來なくて暇を出した、もうあんなものは貴女のお家でも世話をなさらぬがよいといふやうな文面であつた。

　私はありさうな事だと思つて思はず苦笑してしまつた。すえの事だからきつとこんな事をしたに違ひない、さうして「すえ」はそれをどれ程自分がわるい事、無責任な事、賤しい事をしてそれでお暇が出たといふ事が分つてゐないのである。それであるから先方の腹立ちの深さも分らなければたゞ一通りの角づきあひ流に向ふの言葉ばかりが分つてすえの方ではすえの方で無暗に腹を立てゝゐるのだ、困つた馬鹿者だと思つたけれど自分には矢張りすえが憎めなかつた。大澤さんで腹を立てゝ暇を出したといふ事がちつとも不快ではなく尤もの事だと思ひ、其すえの行爲に對して同じやうにあきれても居るが唯自分にはそれが全部ではない、其一方に限りもなくすえを憐れみ、可哀さうな奴だとしみ〴〵と思ふ心があるのである。

　すえを始めて私の家で雇つたのは、鈴子の生れた年であつた。それまで雇ふたゞの女中

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も形式一片に子供の世話をするものばかりで直ぐに厭になつたり、又止むを得ない事情が出來たりして行つてしまふのであつたが、すゑは生れつきの子供好きと見えて始めて來た日から子供の世話を實に親切にした。

鈴子がだん／＼片言を言ふ頃にはもう鈴子とすゑの間には切つても切れない程深い愛情がつながれてゐた。

鈴子は私の乳が出ないために牛乳で育てゝ居つたので、自然外出がちな私よりも、すゑの方にどれだけ深く親しんでゐたか分らない程であつた。

かんしやく持ちでヒステリーで我儘な私は子供の母といふよりも子供が憎い譯ではないが可愛いくつて仕方ない程可愛い時があつたり、さうかと思ふと自分の心にまかせて讀みたい時によみたい本に讀み更けつたり、何か考へごとが起つて來ると、一途に其考へに心が集中して、子供の事なんかとんと心には止まらないし、又夕方や曇り日などには心が妙にめいりこんで自分の髮さへも重くろしい感じがして堪へられない程になつてしまふ、さうすると自分はもう默りこんで椅子に行つてかけて見たり、椽がはに立つて暗い空をいつまでも見てゐたりするより外どうする事も出來ないのでこんな時鈴子がまつわり付いたりすると、可哀さうだとはつきり分つてゐながら口もきかれないしどうかすると叱り付けた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りなんかしてよく鈴子を泣かせたものであつた。さういふ時すえはよく私をのみこんでゐて鈴子をしつかり自分に結び付けて私に世話をやかせないやうに、鈴子にも淋しがらないやうにしてくれた。之は決してすえにさういふ頭腦があつてしたのではない。すえの自然の性質がかういふやうにしてゆくのであつた。

それで私もすえには今までの女中に持たなかつた眞實の愛情が湧いて來た、それで私は少しばかり古くなつたものや自分の氣に入らない柄の着物など時折出してやつた、すえは其たび相をくづして喜ぶのであつた。さうするとつひ私も嬉しくなるのであつた。

自分はすえをもう自分の家から離す事の出來ない一塊として思ふやうにいつか成つてゐた。自分たち夫婦と鈴子とすえ、これだけ四隅になつて「松岡」といふ家が出來ゐてるやうに、すつかり隔てのとれた、かたく相寄つてゐるものゝやうになつてしまつた。

冬雨の冷く降る晩など自分は例の通り憂鬱な心にとざされてじつと炬燵につつぷしておる、すえが鈴子をおんぶして次ぎの間で「向ふ小山に鳴く鳥は、父様戀しでおなきやるかかゝ様戀しくつておなきやるか……」とうたふのを聞くと其すえの子守うたに自分の可愛いゝ鈴子と自分とすえとがしつかり結び付けられてしまふやうにさへ思はれて私の心は暖い親しみに、ひしとふれるのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私が病氣の時などもう行つてお休みと言つても御主人の御病氣だからと言つていつまでも私の足を揉んでゐた事などまだしみ〲と思はれる、私は淋しい生れつきで、自分に親切をつくしてくれる事がちらりとでも分ると外の事にはどうしても打ちとけてゆかれない心を許さない疑ひ深い性分であるのにかゝはらず親切を一つでもされると丸でほろりともろく散つてしまう生れつきであるのだ、大坂城はお濠を埋められなければどんな事をしたつて落ちこない城だつたと聞いた、自分は其時自分は大坂城のやうな處のあるものだとひそかに思つた程私は人の親切が一も二もなく嬉しくなる生れつきであるから。

すえは情の深い女であつた。それが私にはたまらなくすえを可愛いく思はせてしまつた。けれども可哀さうな事にはすえは感情より外に意志といふものを少しも持つて生れて來なかつた、精神的の不具者であつた。だから所謂いくぢのない點に至つてはどんな人だつてあきれてしまふ、それがすえには分らないのであつた。

家の片付などはちつとも出來なかつたし、洗濯ものなど三日でも四日でも默つて居れば水につけばなしで置く、近處の八百屋や荒物屋に二錢三錢のちよい〱借りが一圓も二圓もたまるといふ有樣であつた、それを私がどんなに言つて聞せてもそんな事は恥しい事だと言つて聞かせても其時は心から感心して聞いてゐるが、それが一月さは續かなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

又子供をおんぶして朝の片付も仕まはないうちに一寸おだましにと言つて出て行つたきり十二時になつてやつと歸つて來る事などもまれではなかつた、其時はさすがに極り惡さうな顔をして歸つて來るので、此次ぎこそ早く歸つて來るだらうと思つても決してさうではないのである、私も始めのうちはあきれかへつて眞から腹が立つて叱つた事もあつた。然し其時は涙を流して詫びるけれどやつぱりそれも一月とは續かない、其たび小言を言へばそれでもなほるかもしれないが、せんたい私は人に小言らしい事を言ふと其あとが自分の心が沈んでしまつて、人の惡をついたと言ふ事が非常にいとはしくなつて來る、私にも家の片付はちつとも出來ないし、興にまかせて約束した時間に歸れない事などよくあるので其心持がむきになつて相手を怒る事が出來なくなつてしまふのである、それは決してさういふ事を强いて考へて胸をおさへるのではない。ほんとに自分には出來ないのである。時には思ひ切つた行爲のとれない自分をはがゆく思ふ時もあるけれど矢張りそれが出來ないのである。それで一度しつかり小言を言ふのもごのやうに厭な思ひをして言ふかしれないのでつひ三度の小言が二度になりそれが一度になるといふやうになるし、又此度こそしつかり言をふと待ちかまへて居る時向ふの方から鉛子と譯もない事を言つて樂しさうに歸つて來るのを聞くと、あんな明るい心で歸つて來るのに今家に來れば直ぐあの心を私の一言

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

で暗くしてしまふと思ふとどうしても小言が言へなくなる、其うちに又どんなに譯けを分けて言つてきかせても、あへて反抗するのでなしに、どうしても其言ひ付けの守れないすえを不思議に思ひ始め、さうしてそれがあはれみに代つてしまつた。

彼の女は精神的不具者であつたと氣が付いたのであつた。それは今が今までどのやうに慣れ親しみ其恩に感じてゐたとしても、一瞬にそれに勝るものが出る時彼の女自分でさへもどうする事も出來ない力に左右されて手の裏をかへすやうに恨む事が出來、怒る事が出來、恩を忘れる事が出來た。然しそれは自分のしてゐる行爲の何んたるを解して圖太くするのではない、それをさう惡い事と考へられないのである、良心の刺戟といふものが殆んどないのである。

すえには性のよくない兄があつた、それが以前の奉公先きへ三日にあげずやつて來ては小使をねだつて歸つてゆくのですえもたちきれずに田舍を兄に無言で逃げて東京に來て間もなく私の家に來るやうになつたといふ事であつた。それが一年目にどう尋ね出したのか、其兄がやつて來て又金をねだるのであつた。私は前々からすえに其兄の話を聞いてゐたし、すえもどんな事をしても兄には隱れてゐなければならない、あの兄と一緒に居ては生涯一文なしの憂目を見なければならないからと涙を流して話したので非常に私も可哀さうに思

つて少し位のお金ならこちらから出してやつてどうか其兄を東京に置きたくないものだと思つた、其時其兄は田舍で失敗して女房と子供を連れてみじめな姿で女房の里にあたる深川邊のどこかに世話になつてゐるとか言ふ事であつた。私は其兄の氣味のわるいすれからしのやうな顏を見ると一層すえをかわいさうに思つていろ〳〵道を考へてやり兎も角兄一家をもとの田舍に返す事にした。すえも非常に喜んでゐたのが、其田舍に歸る日に別れに行つて、どうだまされて來たのか急に暇をくれと言ひ出した。それまですえのいくぢなしにもずゐぶん慣れてゐたのだけれどさすがに腹が立つてたまらなかつたので酷く叱つて見たが又其うちに例の自分を責める心が起つて來たので漸々自分も靜まつて、分けを分けていろ〳〵と其事情を聞いて見ると丸で小供のやうに泣き出して、兄にいろ〳〵田舍の話を聞いたらば急に戀しくて戀しくてたまらなくなつた、すると兄もこれから辛抱して親の代りに（すえには父母がなかつた）なつて世話をするからどこか金の取れる茶屋奉公か何かに一時自分の資本を作るため這入つてくれと言はれて、親もなし一人ばかりの兄だと思ふと切なくなつて其氣になつたと話すのであつた。私は二十四にもなつてゐるくせにあんまり馬鹿々々しいと思ふ心と、さうも譯もなく情でさへだましこめば直ぐにだまされてしまつて、一方にどんな不義理になつたり忘恩になるかと言ふ事がちつとも分らないすえの心

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をあはれまずには居られなくなつて來た。さうして此女はこんな事をして親もないのに親身に少しでも思つてくれる人や家を惜しげもなく投げ出しては目先の見えない一片の感情にばかりのつて行つて、學問があるではなし、さうかと言つて世話女房の資格が有るではなし、こんな姿で此社會をどうして渡つてゆくだらう、此「すゑ」と言ふものゝ生れつきを解して、それなりに道をたてゝやる人がこれから「すゑ」の渡つてゆく社會に幾人あらう、おそらく一人もないと思ふ。馬鹿な女、いくぢのない女、又ずう〳〵しい女として一日は一日と人を失つてゆくに定つてゐる。それは「すゑ」の生れつきの性格が、どうしても社會からさうされるに定つてゐる生れつきなのだから仕方がない、それはどんなにすゑが自分から苦しんで其社會にあてはまらうと一時はげんでも要するに終ひに又投げ出して自棄に落ちてゆくに定つてゐる生れつきだ。それが無教育のために、自己を知らない爲に其自棄が救ふべからざる痛ましい大きなもの、再び自ら起き上らうとしない程どん底まで落ちてゆくものとなつてしまふのがと思はれて、どうも此まゝ見過ごしに出來ないやうな心があつた。一方の心は、まだ此女を惜しんでゐる、思ひ切つてこゝらではなして仕舞はなければ馬鹿の相手になんかなつていつかどんな大馬鹿な目に逢ふかもしれないぞ、とさゝやく心があるにも拘らず自分はいろいろに言葉をつくして漸く田舍行きを思ひ止まらせた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それから半年ばかり又同じやうな日がたつていつた。さうして此度は田舍の叔父が仲人で何處かに嫁入るといふ事になつていよ〳〵ほんとに暇をとる事になつた。私は此女がやつてゆけるかしらと思ひながらも特に羽二重の帶がはを祝つてやつた。

すゑが出てから鈴子は見る目も可愛さうな程淋しい子になつた、けれども又私とのほんとの親子の情が深められ暖められて來るやうになつた。

其後八百屋の娘が「田舍の叔父が仲人だなんて噓の事です奧樣、自分でいゝかげん出來合つた男の家に行つたので曙町の床屋にゐますよ」と言つた、それは私の家から十町とはなれない程の近い處であつた。私の心はそれ見たか、と非常な憎惡を吐き出すやうに感じるのであつたが、それでもまだあれのやりさうな事だあゝしてあの女はだん〳〵滅びてゆくのだ、かわいさうだといふ念を消す事が出來なかつた。よしんばあの女が私をだまし私があの女にだまされたとしてもそれは自分の價値を少しも傷けはしない、だまされたつて、ごまかされたつて、どこまでいつたつてあの女はあの女でどこまでも馬鹿だし自分は自分であの女よりも優つた處のあるものだといふ事がはつきり分つてゐた、苦しまぎれにこぢつけた心の理屈でなしに。

それから一年とたゝないうちに、すゑは案の定離別されて仕舞つたといふ噂を聞いた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼の女がだん／＼其生れつきの定められた淵に落ちこんでゆくのを私はたまらない心持で思はせられるのであつた。

其後の或る晩のこと、しよんぼりとすえはやつて來た

「こちらのしきえがまたげる身ではないけれど」

と消え入るやうな姿で詫びるのであつた。

それは決して私をあやつつてもう一度だまさうとか何んとかさう言ふ心のある詫びではない事は明白であつた。いつもすえの悔いは彼の女の全體であつた、たゞそれが長つゞきしないだけの事である。

すえの話では其嫁入先きさえ兄夫婦は一ヶ月も入りこんでゐたといふ、それを私が言はない事ではなかつた。

それからすえは又方々と奉公してゐたがどうしても其いくぢなしと、其のくせ人の諌めに、むつと腹を立てる性分でつまらない片意地のためには今喰ふに困ればとて直ぐにそこを喧嘩をしては出てしまふので三月と落ち付いては居られなかつた。

私の友達の大澤さんで丁度赤さんが生れて女中のいゝのがなくて困るから、もうどんなにいくぢなしでも子供の世話さへよくして貰へればいゝといふのですえをよこしてもらへ

まいかと言はれた時私は殆んど當惑した。

それは子供の世話に於てあれにまさるものはないだらうけれど、私と異つて物事にきち〳〵と片をつけて行かなければ承知の出來ない、家の片付けなど塵一ぱでも止めない程行き屆いた大澤さんがあのすえに氣を揉まないで居られつこはどうしたつてないと思つたから私はそれを言つてお斷りした。けれども大澤さんでよく〳〵困つて居られたと見えて、それはどんなでもいゝからとたつてのお頼みゆゑすえを呼び寄せて此度こそは辛抱しなければいけないよ、とくれ〴〵も心得させて大澤さんへあげたのであつた。それから私は時につけ思ひ出すたびに、いくら何んでも此度はなほつたかしら、それとも大澤さんで今頃は吃驚してゐはしないかとどちらを思つても心にばかりかゝつてゐた。けれど一ヶ月ばかりたつてから一寸近所まで用事に來たからと言つて寄つた時には「もう下駄を買つて頂くやら、此帶も「ねえや」しめていいと言つて頂くやら、ほんとに此上御座いません」とか言つて丸で目をなくしてほく〳〵ものでゐるので私もやつと安心して「それにつけてもよくお勤めよ」と言つて歸した。それがなんだか他人とは思はれない、自分の身うちのものをよそにやつて其娘がよその家に居ついた時のやうな心持を味はせられるのであつた。

それでもすえは、幼い時から一人引受けて世話をした爲か鈴子が無暗に可愛いと見えて

時々小包でおもちやの犬や桃太郎など送つてよこした、其小包の紐をときながら「又こんな事をして金使ひが荒くて仕方がない」などゝ私は小言を言ひながら開けるのであつたが實際はさう思ふ心の底に、其止めても止まらぬ眞實が見えてさうして心がけてくれるといふ事が無精に嬉しく可愛いくつて、やつぱり來ると何や彼や心がけて取つといてやつたりした。

五六度來るうちに、すゑはそろ〳〵不平を並べだした、其不平は要するに私の家に居た時のやうに勝手に遊びたい方だい遊んで來られない不平であつた。自分のいくぢなしの方はちつとも思つては居ないのであつた。

「お孃様がなか〳〵おねんねをなさらないのであつちこつちと少し餘計に歩いて歸ればこんなにいつまでもおそすぎるじやあないかつてさう言つておつしやるんですよ」

とさも訴へるやうな調子で言ふ、私はふと、すゑが家に來たばかりの日、一寸表でおだまししませうと言つて負ひ出して一時間たつても歸つて來ない、少し先きまで曇つてゐた空から大粒な雨が降り出して來たので私は居ても立つても居られなく丁度鈴子がネルの着物一枚で出て行つた事を思ひ出して、急いでねんねこを脇にかゝへて傘をさして表まで出て見たが姿は見えない、右へ行つたか左へ行つたかちつとも分らない、途方にくれて考へこ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んでゐる、勇づいた雨が傘をはねてかゝへてゐる、おねんねこの黄八丈に冷くしぶいて來る、私は淋しい泣きたいやうな心で夢中で二三歩左の方へ途をとつて歩き出したらば向ふの方から小さい洋傘に雨をよけてすゑが飛んで來るのを見て嬉しさに思はず聲を出して其方へ駈け出して行つた事を思ひ出し、大澤さんもあの時の私の心持に似た心持を先づ味はせられたろうとさう思つた。それで私は表へ出たらさう長く外に居るものではないよ、そんな事は大澤さんへ行きがけによく言つてやつたじやないかと言つておいた。時にすゑは涙など流して話す事もあつた。私は困つたと思つた、すゑの心がかう破れ始めると破らずには置かれない「すえ」の性分を知つてゐたからお互に面白くない事でも起らないうちに一層ひまを取らせやうかとも思つて見た。然し大澤さんの方の心持をよく聞いてみないと向ふでまだ置く氣がおありならすえに大きに意見をしなけりやならないしと思つてゐるうちに或る晩十二時すぎに裏口で「奥樣、奥樣」と誰れか呼んでゐるやうで其聲を夢のやうに聞いて起きて行つて見ると暗いなかにすえがしよんぼり立つてゐるのであつた。

「どうしたの、今頃」

私は何んだか不快だつたので冷淡にかう言つた。

「こんなにおそくどうもすみません、實は質に入れておいたものが流れると言つてよこし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たものですから其方へ利子を入れに夕方お暇を頂いてまゐりましたらば道で知つた人に逢つてこんなに晩くなつてしまひました」と言ふ

「そこに居たつて仕方ない、まあお這入りなさい」

此言葉を言つてゐるうちに私の心の不快は漸々消えていつた。

「今夜はおそくつてもう電車もないだろうから明日の朝は早く起きて歸るんだよ」

私がいつもの調子になつたのですえはほつとしたやうに

「ごやつかい樣で御座います、あちらのお孃樣も御病氣なんですからもう朝ははやあくまゐります」と一生懸命に言ふのであつた。

翌朝は感心に早く起きて

「では之からまゐります」と手をつくので、私は何んだか昨夜少し冷淡にしたのが可哀さうになつた。

「まあ朝飯でも喰べておいで」

「いゝえあちらのお孃樣をお連れして朝早くお醫者樣へまゐりますから、奥樣がきつと付いてゐらつしやいますでせうから直ぐにまゐります、其うちまたお暇を頂いて夕方から遊ばせて頂きにまゐります」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「それじやあさうおし、よく辛抱するんだよ」

「はい」

すゑは人の好ささうな笑顏をしてコト／＼と足駄の音をさせて歸つて行つた、すると其次ぎの日の朝、大澤さんから急の手紙が來て「すゑが昨夜一寸暇をくれと言つて出たなり今夕までまだ歸つて來ない、もしやお宅に居はしまいか」といふやうな意味の手紙であつた。「又始まつた、あんな事を言つて早く出て行きながら途中で又引かゝつてしまつたんだ、仕方のない馬鹿ものだ」から思つて腹が立つたけれど、それは馬鹿を相手に腹を立てゝゐるやうな腹の立ち方で一向に手答のない腹立ちであつた。宅を出る時にはほんとに早く歸ろうと思つて行つたに相違ない、さうして停車場まで行くうちに、ふとあそこの家（どこか知り合ひの）にも此處まで來たついでに一寸顏を出して行かうと言ふ心が浮ぶ、直ぐ歸ろうと其時は思つてゐる、其家へ行く。さうしてぐづ／＼話してゐるうちにそれが無精に面白くなつて「いゝや」といふ氣になつて話こんでしまふ、さうしてそんな頃までも歸らないでゐる、きつとかういふなりゆきだと言ふ事がよく分るのであつた、さうしてもう今頃は歸つて居るに違いない、昨夜おそく歸つたろう、と大體ゆく道は分つてゐたものゝ、又ふと考へると、いつも其手だと言つてそれで萬事は押されない、もしや此度こそ何か大變

な事が出來たのじやあなかろうか、と言ふやうな事が思はれる、それで私は大急ぎで手紙を書いて、宅へ來た事から昨朝早く歸つた事、まだ歸らないやうなら至急に知せてよこして頂きたいと大澤さんへ申送つた。すると其日の晩に大澤さんから返事が來て、昨夜十二時頃歸つて來た事を知せてよこした。私は安心と同時にいつもの事とは言ひながら、ほんとに愛想がつきるといふやうな心持で大澤さんへすまないと思つてお詫びのやうな返事を出した。

それから間もなく此度の事になつたのである、それで私は、まだ私から大澤さんへお詫びを入れゝば或は大澤さんで又使つて下さらぬものでもないし、すえにもよく其不心得をさとせば後悔するだろうとは思つたが、今一時さうして一月なり二月なりもとに納めた處ですえの性分ではいつか又もつと大きくこんな問題が起つて來るに相違ないと言ふ事があまりはつきり分るので私はもうそれを止めた。大澤の雪子さんも矢張りすえの一面には惹きつけられてゐると見えて二度目の手紙には本人が詫びてさへ歸ればいつでも許すから本人に意見をしてくれといふやうな手紙をよこしてさうして「すえ」には不思議に人を惹きつける力があると書いてよこされた、私は一寸迷つたけれど矢つ張りどうも危くつてやる氣にならない、かういふワイルド(?)なものを意見などして歸して後で大きな破たんでも出

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

來てはそれこそ大變だとしつかり思ふ心が根强かつた。それで大澤さんへは今までのお禮の手紙を出して、すえは田舍の叔母の處へ歸す事にしてしまつた。すえも田舍へ歸る氣になつた。

「お孃樣すえの田舍へお遊びにゐらつしやいませ」

「行かうね」

すえと鈴子とはしきりにこんな事を言ひ合つてゐた。

次ぎの日の朝、鈴子を連れてどこかへ出て行つたと思ふと午ごろお湯に這入つたと見えててらてらした顏にお白粉などつけて、鈴子にもきれいにお白粉をつけてやつてニコニコと二人で歸つて來た、鈴子は大きな電車の玩具を持つてゐた。

「お孃樣としてお別れにお湯へ這入つて來た」

誰れに言ふともなく笑ひながら極り惡さうに這入つて來た。

「よかつたわね鈴ちやん、すえとおぶうに這入つて來たの、いゝおもちや、どうしたの？」

「すえに買つて貰つたの」

鈴子は嬉しさうに見えた

「こんな事をしては困るよお金もありもしないくせに」

かう言つたものゝ私はひそかに、どうしても鈴子が可愛いくて他愛もなくこんな事をするすゑの心が嬉しかつた、さうして五十錢も包んでやろうとそれまで思つてゐた金高を一人胸のなかで一圓にした。

其日の夕方とう〳〵すゑは三年の東京生活に全く破れて田舍へ歸つた。すゑの行く六時の汽車の汽笛を聞くと、ほつとして私は炬燵によつた。「それにしても何故私はあんな事を山々する「すゑ」が憎まれないいんだろう腹が立つて憎めないんだろう?」

何んだか勞れたやうにうつ〳〵とこんな事を考た。さうしてすゑの馬鹿な處にどこか私には人事と思へぬ處のある事に氣が付いた。

自分を大して敎育のある女とも思つてはゐないし自分の家を金持な家だと思つては居ない、然しすゑに比しては自分は敎育もあり生活も豐な家に育つたに相違ない、其點から私は今かうしてすゑを批評してゐるけれど自分がもしすゑの境遇に生れて育つたとしたら私の一面はあれによく似た行き方をしなかつたろうか。私は此頃自分には、人間が何の分子をも五匁づゝ十持つて來て始めて圓滿な人間を造りあげるものとすれば、自分は其うち三位しか普通の人並の五匁といふものを持つて居ない、或るものは一匁にも足りない程、殆

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んど持つて生れなかつた程不調和な人間であり精神的不具者であつた事を知るやうになつた。それは圓滿な人は少なかろうけれど自分程不調和なものも少なかろうと思ふて來た。

自分の小悧怜さうして淋しがりとは此社會の健康な人達の仲間に這入つて其人たちと交つてゐる、見渡せば自分の週圍の人たちは多く健康者である、私のやうな精神不具者は居ない、それでそれらの人には不具者の苦痛や惱みを分つて貰ふによしもない、さうかと言つて自分は不具者だからと一人ぽつ〳〵たどつて行く事は私にはほんとに淋しくつて出來なかつた、まだ知りつゝ今でさへ分つてゐても淋　くて出來ない、それで此不具の自分を引さげて健康な人たちのなかに交つてゐる、此不自然が私を社會からいろ〳〵の誤解に落してゐる大きい原因である事に氣がつきだしたのそある。ちんばの人と双足揃つてゐる人と同じ足早に歩かうとする其苦しさは今まで私を無意識に苦しめた苦しさであつた。自分にも分らなかつた苦しさの原因であつた。ちんばならば目に見えるので人も其つもりで見てくれやうし笑ひもしまい（少なくも足並の不揃ひな事は）又自分にもよく分る、然し精神的不具者は自分にさへも十年も苦しんでこゝが平原だとやつと此頃氣付いたのであつた。

私にもほんとに理性といふものは、こゝがそれになるべき處だと形だけそなへてゐる馬

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の親指のやうに少しきりしかない、恩を仇でかへすなどゝいふたくらみはそれこそなくても時々私のする事は全くそれと同じ事が出來てしまふ。それは自分が好きだ、良い、と思つた道へ前後左右をかへり見る事が出來ずに直ぐ其まゝふみこんでしまつた後の始末である。

又かう進まうと思ひたてば、自分でもどうする事も出來ぬ程、人の忠告も理屈も分つてもそれに從ふ事が出來ぬ、自分で自分がどうか人の忠告に從ひたいと苦しむ程其方に心を向けやうとしても、どうしても、譯は分つてもさうは出來ない事などあるのである、さうして其やうな時に無理に其心をおさへ付けて其人の言葉に從つた後はどんなに氣を引たてゝも自分で自分を叱つてもうつ〳〵として樂しまない戀を病む人のやうな心の狀態になつてしまふ生れつきである。さうしてより以上の破たんを生んでしまふのである。其くせ自分はからいくぢがなくてそんな自分だと始めから分つてゐるのに、きつぱり其道を通らないで、自分で自分を叱つては人並の道を步もうとよくするのである、そしていよ〳〵の處に行つて其不自然が自然の結果を生んでしまふ、一切を投げ出して自分にかへつて來る、人を怒らせてしまふ、それは始めからたくんでやつた事ではない、どこまでも其事に從をふと思つて始めた事に相違ないけれど、どうしてもそれになりきれないのである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分が以前或る結婚問題の起つた時であつた。先きは大變立派な申分のない家だつたので親戚など大進みで父母を說いて私さへ承知すれば四方は丸くおさまつた。けれども私は只何んとなく厭であつた、財產家の名門などへ嫁入つていろ〳〵氣むづかしい家風に從ふ事は自分にはどうしても出來ないと思つた、田舍の所謂嫁といふものゝみじめさが私にはどうしても堪へられなかつた、それで私はいやだと言ひ張つた、此たゞ「いやだ」の譯が皆にはどうしても分らなかつた、それでいろいろな想像をしたらしかつた。親類會議が私の爲に何編も開かれた、仲に立つたものがよく言ふ仲人口的の考で先方へ行つて正直な事を言はないと見えて向ふではそろ〳〵用意にかゝつてゐるといふ樣な事が知れて來たので騷ぎが一層大きくなつた。「何んと言ふ不孝ものだ、親も親類もいゝと認めてゐる處へ何の不足が有つていやだと言ひ張るのだ」と言つて皆は私を責めた。私もほんとに私は不孝者であると思つて悲しくて泣いてばかり居た、けれどもどうしても其家に嫁入る氣が出ない、それが私にはどうする事も出來ない、然しそれならそれで其道を通りつくせばいゝのに私はとう〳〵力まけがしてしまつた、理屈から說かれて見ると成る程と思ふ事ばかりでよく譯が分る、孝行をしたい心は私にだつて山々あるのであつたから、「唯其根もないやうな「いやだ」といふ心さへおさへれば四方八方丸くおさまるのだ」と言ふ事にうなづけたので

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其心を殺さうと決心して「ではいゝやうに」と言つてしまつた。皆の喜びは非常なものであつた、丸で大出來だと言はぬばかりに急に皆は私を大切にしだした、私は其一日は非常にけなげになつて自分も嬉しかつた。然し其日の夕方になると、私はじつと向ふ山をみつめてしまつた。それはどうしても其家に嫁入る事はいやだといふ心が一度引いた汐が又さして來るやうに自分でどんなに理性のせきでせき止めやうとしても止めても止まらずはては大波となつて自分を打つて來る、私は向ふの山脈を見つめたまゝ眞蒼になつてしまつた。

「弓子、どうしました！」

母が吃驚したやうな顔をして立つてゐた。

「私はいやです、どうしてもいやです、どうぞかにして下さい」と言つて私は泣きたほれてしまつた。其時私はもうどんなに皆に憎まれても殺されても仕方ないと思つた。

皆の怒りはもとよりの事、父の怒りは非常なものであつた、父は昔風の正しき人で親類の年長者の言葉をどこまでも立てるといふ人だつたから「弓子はもう世の中へは出しません、此まゝ尼寺へやります」と言ふのであつた、私はほんとに皆に對してすまなくつて〳〵たまらないからまことに尼寺へ行かうと決心した。さうして其原因はと言へばたゞ其家へ嫁ぐのがいやだからと言ふのかと思ふと自分で自分にあきれてしまつた。まして外の人の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あきれるのは無理はないと思つた、然しそれでも私には其家へ行く氣は出なかつた。金がほしくないと言ふのではないが、さうした財産家の嫁になつてはとても自分はたまらないだろうと言ふ事が何故かはつきり分つてゐた。それで私は其一度承知したといふ自分がほんとに憎く恨めしくて仕方がなかつた。

けれども私はやつぱりそこまで行かないと、はつきり自分で自分の道に立ちあがる事が出來ない弱いいくぢのない性質なのである。

これは一例にすぎないけれど、こんな大きな出來ごとでなくて、日常、人との交際にも目に見えない程かすかな事にも私は幾度もこんなやうな失敗をして人を苦しめ自分も苦しめ自分も苦しみ人に憎まれたり誤解されたりする事がよくある、さうして自分で自分を責めて來たのであつた。

私はたしかに不具者である、すえとは少し異つてもゐるし又私の方がもつと複雜であるけれど其精神的不具な點に於て同病者である、これが私のすえを憎めぬ原因の一つであろう。さうしてすえの心理がよく分り、其親切を嬉しく思ふ原因であらう、すえも非常な淋しがりで何にもあれすがろうとする心が人事ならず私には分るし、情でさへせめればもろくほろりとしてしまふ心のうごきが手にとるやうだ、凡べて私はすえにかぎらず、まへか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら、馬鹿ものと人に笑はれてゐる人と話をして其心持が人事と思はれない處があつて自分で己れも馬鹿なのかしらとひそかに恥しく思つたりした事があつたが、大きな男が所かまわず大聲で泣いたりする事を人と一緒にどうしても笑はれない事を自分からいとはしく思つたが今になつて私もたしかにさういふものゝ一人である、少なくもさういふものと同じ一面を持つてゐるといふのを知る事が出來た。それをこたつでくりかへして思つてゐた。

田舍へ歸つてすえは間もなく嫁入つたと言ふ、此度はどうなるかしら？

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昔の愛人に——齋賀琴

あなたと別れてから丁度三年經過てしまひました、あなたの愛に離れてから私の寂しい靈魂は三度の春秋を送りました。

愛に離れた空虚な心は三年の雨風をどんなに凌いで來たのでせう、更にこれからの年月を如何して送らうとするでせう。

一寸でも顏を見ずに居られなかつたあなたを三百里の遠地に送つてからこのかた浮世の嵐に虐げられ、吹き曝されながらなほ僅かに過去の思ひ出に慰められて暮した三年間、その年月の私は何と云ふ憐れなものでしたでせうか、共に死なうとまで思ひつめたあの頃の事を考へると私は今でも涙が出ます。あなたに與へた私の愛が熱烈に純潔にあればあつた程、別離の後の私の苦悶寂寥は一しほ堪へがたいものでした。必然の運命としてあきらめてはゐながらも私の若い燃え立つ心は、唯一の愛の對象だつたあなたと別れる事を悲しむあまり、幾度か死を思ひつめた程でした、悶えの裡に過した三年の間には無意識にやつた

過失も多く、それは更にまた新らしい心勢を生んだのでした。

一反別れたあなた、最早昔の樂しい夢は消え失せた、再び合ふ事もないあなたに何のため私は筆をとるのでせう、樂しい過去の想ひ出にあなたの涙を誘はふためか、否々暗い絶望の深淵に伏して光明もなく希望もなく呻吟してゐた私が今新らしく見出した人生の喜びと私の再生の恩人の事をあなたにお話したいのでした、そして喜びを分ちたいのでした。それにはまづみじめな三年間の生活をお話しなければなりません。

あなたと別れた當時、私はよくも氣が違はなかつたと思ひます、狂はなかつただけそれだけ一層苦しんだのかもしれません。美しい過去の幻しは消えて暗憺たる行手には一つの希望の星もなく、人生の怒濤の中に明日知れず漂よつてゐた私は世にもあはれな者でした。かつてはあんなに强かつた書物に對する興味も今は全く去てしまひ、自然に親しむ眞卒な感情は滅却し、空虚な心に何物を充すべきか靜かに慮る余裕もなく、何事に接してみても堪へきれぬ不滿足を覺えるばかりでした。餓鬼道に陷ちた人が食を求めて火に惱むやうに、私はたえず何ものかを求め乍ら、何事についても苦しみもがくのでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「何でもいゝ、どんな事でもいゝ、自分の一切をあげて努力する對象を得たい、一つの對象に己れのすべてを沒頭したい」と日も夜も焦慮して居ました。

私の周圍の人々は私に關する何事も了解しませんでした、あなたと二人幸福に暮した一年間の秘密は夢にも知りませんのでした、私が味つた愛に醉ふ快樂にも愛を失ふ悲哀にも、すべて沒交渉なのでした。そして人の子としての私、女性としての私に種々の難題を云ひかけて來ました、その第一は實に結婚と云ふ形式をとつて表はれたのでした、長者は權利を以て私の兩親や叔父叔母は私に結婚を强ひました、全く未知の男子をば義務として愛せよと命じました。

私はそれを拒みました、かつてあなたに與へた貴いこの心を何物とも知れぬ他人に與へる事は、絶對に出來なかつたのでした。養育の大恩ある兩親が泣いて懇願しやうとても私は心を僞はつて貴い生命を賣る事に忍び得ませんでした。私の感情は兩親に對して温かでした、併し當時の私はもはや孝道を以て德の大本とし、人間最善の行爲はその親を安ずる事にあるとは金輪際承知されませんでした、私は親を愛したとは云へなほそれ以上に異なるものを愛してゐました、そして私の眼に映つた兩親、あの兩親はいかに虚僞に富んで居ましたでせうか。あの人達の尊重するものは生命のない脱殼でした、すでにすでに無用とな

つた習慣的な形式でした。兩親が私を愛してくれのは明らかでした、と同時に私の意志を殺そうとしたのも事實でした、私は人として、家庭の一員として、廣く公衆の一人として、最も私に適した方面から働きたいと思ひました、それを親は喜ばぬばかりか長者の權利を楯にして妨害したのでした。兩親は如何にかして私の知識慾をおさへつけて、人生の物質上の快樂にひきいれやうと苦慮してゐました、兩親の私に對する愛が深ければ深いだけ、その妨害は強かつたのです。

概括的に推定してみた私の兩親がどんな人物であるか私はそんな事についてとやかく云ひたくありません、云ふ必要もないのです。只私は私の結婚問題について兩親との間に起つた事――恐らく免れ難い葛籐についいお話したいと思ひます。

改めて兩親から結婚の事を話された時實際私は驚きました、呑氣と云はうか、不用意と云はうかかつて私はそんな事について考へても居なかつたのです、私は不可則な運命の斷崖の上に一瞬間立ち止まつて、そして自分のとるべき態度を究めるため、まづ過去の生活を心に思ひ浮べました、そして深い記憶の底に今なほ消す事を得ないあなたを――あなたとの交情を思ひ返しました。最も尊い、最も神聖だと信じたあの二人の愛が果して結婚と云ふ形式に依て永久に成就し得るものであつたか――それは私にとつて難問でした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

これまでと云ふもの私は結婚と云ふ事をハッキリ考へてみませんでした、周圍の人達の間に殆どしつきりなく起る事柄の一つとして、何の不思議もない事だと承認すると同時にその意味については却て頗る漠然としてゐたのです。今嚴然として眼前に控え解決を促してゐるこの問題、最も重大な、しかも最もありふれたこの事件について私は何の深い知識も持ちませんでした。もし私が兩親を天と思ひ我家を全世界と信じた、あの十歲前の私でしたならば一も二もなく親の言葉に服從し得たかもしれません、無論左樣であつたでせう。併し今一切の敬意を失ひ、輕蔑と共に深い憐憫、痛切な悲哀を感じる私が何で絕對の服從が出來ましやうか。一面識もないどんな氣質かもしらぬ人と突然結婚してそして所謂貞操を守る、その人の生命を自分の生命とする、そんな事があり得ませうか。私は本當に一生懸命になつて、生れて始めて一生懸命になつて、考へられるだけ考へました。

私はどうしても人間を物質的に――他の動物の多くと等しく單に一個の生物體としてのみ見る事が出來ませんでした。そして結婚と云ふ形式に依て秩序づけられる人間の生殖事業はその事實はその事實以外の高遠な意義に伴ふものだと思はれました、即ちそれは「永遠を慕ふ憧憬の念」「理想を愛する感情」を源にした種族保存の方法なのだと考へました。云つて見れば私は愛情を基礎にした結婚こそ正當の結婚で、之れに反する一切の――家と

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

家との具體的な關係や、何かの計略を主眼とした所謂、方法としての結婚は、最も卑劣な、恥かしい事だと信じ得たのでした。そして私は強硬な態度で兩親の命を拒みました。

無論私の云ひ分を了解して貰ふ事は不可能でした、兩親は一言の下に斯樣云ひました。

「親のきめた事に否應はない」と。

私は本當に困りました。人の子がその親に發していだく本能的な感情と、それと正反を敎へる理知と二つの間に迷ひました。私の心はこの二つが激しい闘爭を戰ふ戰場となつたのでした。

つひに信仰を棄てる事は私に不可能でした。私は自殺を嫌ひます。無意味な自殺を憎みます。假令兩親に背いても主張を貫徹する事が自分の義務であると左樣信じました。

兩親に背く、止むを得ずして背く、けれどそれにしても準備が要ります、熟慮の必要が起ります。何人のたすけをもからずこの煩雜な社會に處しく行く力が自分にあるかどうか、まづそれを確かめねばならぬのでした。

あなたも御存知のやうに私は正則な敎育を受けなかつた人間です。幼ない時から極めて放縱に野蠻に育てられた田舍者なのです、そしてまた一面から見れば兩親の盲目な愛に依て殆ど溫室の花のやうに、籠の中の小鳥のやうに撫愛された大きな子供にすぎません。廣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い世間と云ふものをちつとも知つては居ないのでした。

私は自分の學力について何の自信もありません。勉强したいと云ふ熱い志は持つて居ますがけれどそれには時と費用の余裕が必要になつて來ます、そして私は余裕ある境遇に居れば勉强する自由を奪はれ、自由な生活にはいるためにはその余裕を打棄てねばならぬのでした。

廣い世間へ出て大勢の人に揉まれ乍ら自活して勉强する、一寸考へてみても困難らしいことです、併しその困難に向つて私は眞直に進みました、痛切な感情を自ら制えて父母の家を去りました。

私の結婚問題はつひに私が家を去る機會を齎らしたのです、十餘年間の苦しい妥協が(たとひ自覺しなかつたにせよ)この事件に依てとう〳〵爆發したのでした。

其後の私は果して幸福だつたでせうか、あつたともなかつたとも私には云ひかねます、併し今かうしてふり返る過去は何れにしろ懷かしいものです、私にとつて眞實なものです、外面上の生活がよそ目には何と見えやうともあの頃の苦しい經驗は私にとつて愉快でした。流に逆つて楫をやる痛快な思ひがありました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

両親の保護を離れた私は早速生活に困りました、自分の腕一つを頼りに稼がねばなりませんでした。生活のために私は馴れぬ勞働も致しました、今まで夢にもしらなかつた儉約の方法も覺えました、人情と云ふものも味はひました。これまでライフの水面に浮んでゐた私は追々その水底深く沈んで行くのでした。

物質上にはひどいやりくりをし乍らも獨りで生きると云ふ事の興味に一切を慰められて私は幸福に暮しました。

ところがそれがものゝ一年と續かぬ思ひもよらぬ災ひが私の身に起りました、激しい病氣に襲はれて私は起てなくなつたのです、その日のパンの代までも得る事が出來なくなつたのです、何と云ふみじめでせう。何と云ふ殘念な事でせう。がいくらもがいてみても病ひには勝てません、今までが普通より强い身體だつただけに反動としてか病勢は一層激烈なのでした。

他人に情を乞ふ事は私に忍び得ない事です、またかつてそんな經驗のない私に思ひもつかぬ事でした、併し幸か不幸か一週間ばかりは殆ど意識を失つて生死の境を放浪つた私は何事も分りませんでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はじめて意識の廻復した時に私はあたりを見まわして室内の光景に驚きました、「あゝ病院に居るのだ！」と思ふと何故か戰慄を覺えました、一切を了解する事が出來ませんのでした。

事の事情を聞いた時私は何とも云ひ難い異樣な感じに打たれました、まさに死なうとした私はある人のために救はれたのです、かつて私はその人を知らずその人も私を知りませんでした、その人が私の命の親であつたと聞いては世に運命の存在する事をはじめて了解した如くに私は驚きかつ怖れました。

私が再生の恩人と云つたのは、無論この人の事です、永年日本に住つて居られる德の高い外國傳道師でした。

再び健康になつた私は最早以前の私ではありませんでした。知らぬ間に透明の世界へ拉れ去られたやうに私の心はまぶしさに戶まごひして、暫らくはぼんやりしてゐました、全然不可知であつた事が曙の光のごとく次第に明らかに眼前に開展かれたやうにも覺えまし

た。そしてこれまで自分の周圍のものに對して懷いてゐた反抗の憤激が實に些末な、下らぬ事のやうに考へられて來ました。見ず知らずの他人に助けられたと云ふ強い感銘は今まで心底に澱んでゐた不能なものを掃ひました。どちかと云へば傲慢な性質の私に全く頭を下げさせたその大きな努力、それは腕力ではありません、反抗ではありません、やさしい、暖かい人の情でした、愛情でした。

世の中に始めて自分を動かす力のある事を知つた時、私はそれに從はねばなりませんでした、自ら僞はる事は出來ない、正直に大膽にあくまで進まなければならない、潔よい態度をとらなければならない、私は左樣信じました。

あくまで深切なその方は私の將來について、種々案じてくれました、今まで何人をも白い眼で見返した私は不思議にもこの人に向つてそれが出來ませんでした、信仰深い人の熱烈な愛情は一刹那に私を變化させてしまひました、驚きと怖れの心が追々鎮まるにつれて私は改めて前途を、自分の行く道をのぞみたのでした。そしていつの間にか自分がその方にあらゆる尊崇と渇仰の念を以て師事してゐる事を悟りました、私は最早、孤獨ではありませんのでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

過去の私が「宗教」と云ふものを毛嫌ひしてゐた事はあなたも御承知の通りです、殊に基督教の儀式や信仰箇條について強い反感を持つてゐる事も事實です、そして無宗教を標榜する事が强者となる條件ででもあるかのやうに思ひ込んでゐたのでした、併し今度の機會に依てそれは皮相な外見に過ぎなかつた事を私は充分確かめました、寧私の魂は眞の宗教を、信仰を要求してやまなかつたのです。

併しこれからの私が宗教へはいるか否かと云ふ事は、まだ分りません、否非常に疑はしい事です、基督教と云ふものについても私は確實に理解して居ません、只現在の私に信じ得られるのは私がどんなにあの恩人をインスパイヤするか、そしてどんなに人格の感化と云ふ事を重んじて來たかと云ふ事です。人間を感じさせるもの、人間の社會を動かすもの、それは偉大な人格の力に外ありません、ミゼラブルの中に表はれたミリエル僧正を何人が敬慕しないでせう。

「人間が眞の勝利者となるためにはまづ武器を棄てなければならぬ、眞に自我を生かそうとなれば第一に自我を滅さねばならぬ、」私は今それを信じます。犧牲と云ふ事の對絶價値も

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

認めます。事實私はその恩人のために身命も惜しまぬ熱烈な心を懷ひてゐるのです、そしてそれはやがて萬物と合一する大きな愛の中へ導いてゆく事と思ひます。

何のためにあなたに向てこんなくど〲しい事を書いたか私は知りません、一種の衝動に驅られてと云へばそれまでの事です。とにかく私の幸福を喜んで下さい。

四、四、十一

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こゝのつの頃——濱野雪

お祖母さんと、叔母さんと、姉さんと、わたしと、斯う四人女ばかりの住居は、賑かなやうでゐてさびしかつた。

曲り角と角とのたゞ二ツのがす燈が、夜な夜なうす黄ろくとぼる頃からは、めつたに跫音もきかれぬ位しんとした、二町余りのしもたや町の中程の家で、庭にはひよろ〳〵したいすらと、螢木と、枇杷と、そして乙女椿が三本と、これだけ植わつてゐた。

——わたしのこのきれ〴〵な幼いおもひでは、あの乙女椿のもゝいろの花びらの陰にしづかにそつとねむつてゐる——

お祖母さんは大分腰が屈つてゐた。大きな眼鏡の夢は青い細い絹紐だつた。圓く猫脊になつて日當りのいゝ緣側で、ゆつくり〳〵糸車をまわしてゐた。きれいな白髪を切下げに

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して、逆上る性分なので耳からうしろはすつぺりと剃つてあつた。どつさりの友染だの、板締めだの、さうした華かな小切衣を集めてこさへたちやん〳〵こが、いつもふく〳〵と温かさうに見えた。

「うちのお祖母さんは、年よりでもほんとにきれいがいゝ」

斯う思つて、わたしはそれを自慢にしてゐた。

叔母さんは無口なひとだつた。

一握りに余るほどたつぷりある髪を、きちんと惣髪の銀杏返しに自分で結つて、白い大きいハンカチを咽喉にまきつけて、お乳の上で羽織の紐をぴんと結んでゐた。朝からじつと裁板の前に座つて、何かしら考へてゐた。夜などちひさい時に火傷をしたといふ、左の眉尻から頬へかけてのぼんやりしたしみを、油燈の籠つたやうな釣ランプの火影に浮立たせながら、二尺ざしで肩をたゝいてうつとりしてゐた。

わたしはこの叔母さんには、叱られたおぼえもない。ほめられたおぼえもない。

姉さんに就ては、自分ながらほんとうに不思議だと思ふ位、なんの記憶も殘つてゐない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たゞ始終にこ〳〵してた事と、何かの時に淺黄の角絞りをきもの襟にかけてきた事だけうつすらとおぼえてる。わたしとは五つ違だつて、ほんのそれだけのこと。

わたしは五つで學校へ上つた。

それでも呑氣な皆の事とて、奈何にか落ちもせずについていつた。だから九つでもう高等の一年生だつた。それをみんなが可笑しがつて笑ふ位、年に合せても小柄なわたしは、ほんとにオシヤベリで、オハネで、そして臆面なしだつた。それが却つて可愛いといつてそれはみんなに可愛いがられた。――いゝオモチヤにされてたのかも知れないが、とにかくわたしは得意だつた。黒の毛襦子か縞小倉の襠のないだけが男と違ふ、やつぱり堅い腰板のついてる袴をはいて、てつぺんに引詰めて結つた桃割れで通ふ中にゐて、たつた一人紫襦子のすべ〳〵した、西洋のこどものスカートみたいに仕立てた袴で、お稚子髷にいつてるのがほんとうに得意だつた。『田舍ッぺぢやない』これが大きな誇だつた。

その稚子髷の張紙も、巾廣の銀たけながも、みんなこの夏こゝへ來る前に、池の端のたしからやで買つたものだつた。しつとりと光る厚い紙を筒にして、簪の笘や何かと一緒に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

抱へて廣小路へ出ると、日盛りの白い路の上を、編笠冠つた鐵道馬車の馬がよた〳〵驅けてゐた道ばたの桐の葉が青いまゝによぢれてゐた…………

わたしはほゝゑみながら、父さんや母さんのゐる家へ歸つて行つた。――

やがて姉さんとわたしとは、このお祖母さんの家へ預けられて了つた。父さんも母さんも、弟も妹も、みんな遠い〳〵臺灣へ行つてしまつたのだつた。生れて初めて『父母の家』から離れたこどもは、便りなさと悲しさにおびえながら泣く筈である。だのに何故かわたしは、あんまり泣いたやうな氣もせぬ。それほど切なくなかつたのだらうとも思ふのは、迎へに出てくれたお祖母さんなどまで、恥かしいほど泣いたといふステーションの別離が、あとになつて奈何想起して見ても、やつぱり印象に殘つてゐないからの事である。新橋でそのまゝ別れたものか、それともこの町のあの暗い驛で別れたものか、それすらわからないのだもの。

たゞ臺灣といふ所は、十日も二十日も船に搖られていくんださうだとだけ、ひとりでぼんやり考へてゐた。ほんとにひとりで――

三本の乙女椿のうち、いちばん小さいのがいちばん早く蕾をつけた。まつ靑な萼の中から、ぽつちり面だした淡赤いのを見つけるとわたしは聲を上げてよろこんだ。

その時分は毎日〳〵曇つた空が續いた。けふは大丈夫だらうと無精をして、傘持たずに行つて歸る頃に、霧のやうな小雨に降り出されて、羽織を頭からかぶつてせい〳〵息を切り乍ら、驅け込む事も度々あつた。鞄の中の筆入れと、毛糸で編んで肩へかけるやうにしたお辨當箱とが、かちや〳〵とやかましい音を立てた。濡れるのはあんまり氣にならなかつたけれど、乙女椿の散りさうなのが心配でしようがなかつた。

わたしは早速緣側に出て、首を延ばして花を見た。

咲きゝらぬ花は散りもせずに、やつぱり淡赤く雨の中に匂ふてゐた。

『東京のうちにはなかつた花』といふのが、ひどくわたしの心を惹いた。

いちばん先きへ咲いたのは、色もあはかつたし、八重の花びらの數も少なかつた。二本目のは、ちとあくどいほど濃い色の、わたしの掌いつぱいの美事な花だつた。

それが二つ三つ開き初めた頃から、めつきり霜が白くなつた。低い軒端へ夕靄が濃く冷くたゝよふたそがれを、折々もみぢ賣りのしやがれた呼聲が掠めて過ぎた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もみぢといふは鹿の肉の事であつた。血を温めるとか言つて、お祖母さんは能く叔母さんの様にその赤ぐろい肉を煮た。ぷんと微かな臭氣のするのを、わたしは氣味わるく箸に引掛けて、そつと舌へよせて見た。

なんだか山椒の味ばかりわかつた。

お隣りの庭にも乙女椿が咲いた。けれど、もうかなり老木のその花は、數は多くあつても何處か艶が無く、寒さうな色にいぢけてゐた。わたしは自分の花と比べて見て少しうれしい氣がした。ある日、わたしは斯う言つた

『——これさあたしんとこのとは隨分ちがふわねえ』

するとおきぬさんは、白い眼で一寸わたしを見て、何とも返辭をしなかつた。

『そりやさうさ、この椿はもうおばあさんだもの』

笑ひながら兄さんの秀雄さんが斯う言つたそして、『——この接木したやつは素的なんだよ、今に咲いたらお鈴ちやんなんか大騒ぎするだろう』とつけ加へて、亦大きな聲で笑だした。

わたしは何だか妙な氣がした。どんな花ださ〻たかつたけれど、そのま〻默つてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

地べたから三寸ばかりのところから、斜に五六寸ひよろ〳〵と延びて、數へられる位いつやつやした葉をつけた枝を、妙な氣で眺めてゐた

おきぬさんとわたしは緣側から足をぶらさげてゐた。秀雄さんは庭下駄をはいて、ぶらぶらとそこらを歩いてゐた。腰へ廻して組んだ手の邊りで、黑モスのへコ帶がちよきんと結んであつた。

羽織のきらびな人だつた。やせがたで。男の癖に淺いゑくぼがあつた。それがわたしには美ましかつた。――

『今夜もトランプしようか』

伸びといつしよにかう言つた。

秀雄さんの部屋は六疊だつた。まんなかに行火がいつも置いて在つた。上から空氣ランプが明々と釣るしてあつて、まわりの机や本箱や、漆の光る塗箪笥などを照らしてゐた。中學を卒業する時の紀念寫眞が、ごや〳〵と黑く固つたがらくたを上せた棚の下に、廣い額椽にはめられて、緋ぢりめん三角のふとんの上に載つてゐた。

トランプの時には、をばさんもをぢさんも小さい男の子も交つてした。みんなが知つてる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のは『後家送り』ばかりなので、それを毎晩倦きずにくり返した。男の子はをばさんに抱かれて。おきぬさんはをぢさんに凭りかゝつて。わたしは秀雄さんの腕の肉にゐて。そしてみんなでこつそり覗きあつては、大騒ぎして札をかくした。

ほんとに陽氣な家だつた。晝間三味線の音などの洩れるのも、この町内で此家一軒ぎりであつた。

机の据ゑてある右手のれんじ窓をあけると手の届くあたりに乙女椿が咲いてゐた。珍らしく清んだ月夜で、花の色がほの白く見えてゐた。

いつものやうに『後家送り』をすましたあとで、みんなは洗湯へでかけて行つて、秀雄さんとわたしと二人だけ取殘された。

その夜もわたしはお稚子髷に結つてゐた。鳶八丈の綿入れと羽織を着てゐた。少し風邪氣で紅い眞綿を頭にまいてゐた。

たしか弓張月のお話をきいてたとおもふ。そのうちにだん／＼睡くなつて、見詰めてたランプの笠がぼやけて、ほか／＼と體ぢうが擽られるやうな氣持になつて、瞼の裏でさま

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ざまな細い和い絹糸がもつれたやうな、美しいあやがこんぐらかり渦まいた。

――

びくりとしてわたしは眼を覺ました。

何に驚いたのか知らないけれど、とにかくびくりとして、まだ半分夢ごゝちで眼を覺ました。

秀雄さんのきれいな眼が、じつとわたしを見据ゑてゐる。灼きつくやうにわたしを見据ゑてゐる。『なんだかこわいやうな眼だ』と思つた。『何故あんな眼をしてるのだらう』と亦おもつた。思ひながらはつきりと眼を覺まさうとしたけれど、やつぱり睡くてたまらなかつた。

わたしがしぶい眸を開かうとしてるのに氣がつくと、秀雄さんは平常の優しい面にかへつた。そして枕させてゐた左の腕を曲げて、わたしの頬をより近く自分の唇に近づけた。唇がそうとわたしの頬を吸つた時――まるで火のやうに熱かつた。

『――ねむさうだね』と、その唇が言ふ。

『こんやはお鈴ちやん、たいへん可愛くつてそしてきれいだよ』と、その唇が言ふ。

わたしは無邪氣な微笑をうかべて、またうとうとと夢路に入つた。あの火のやうな唇が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分の唇の上にあるといふ事を、夢のやうにも想ひ、現のやうにもおぼえながら――

…………………………………………………………

ほんとうにはつきりと眼が覺めた時、わたしはしつとりと汗ばんでゐた。體も少しだるかつた。そして、行火があんまり熱すぎると考へながら、ぽつかりと眼をあける、とこんどは秀雄さんの眼が優しく笑つてた。その肩へをりかぶさるやうにして、おきぬさんの大きな眞黑い眼も笑つてた。

その刹那

何の故とも知らずわたしの頰が、熱く熱く燃えてきた。息がつまるほどに胸がどき〳〵してきた。

ちつとも譯はわからなかつたけれど。

わたしはふつと睫が熱くなるのを覺えた。默つて立つて窓をあけると――

乙女椿が仄白く月光に匂ふてゐた。

翌日にはもうすつかり忘れてゐた。相變らず遊びに行つて、相變らず騷いでゐた。秀雄さんもやつぱり好きな秀雄さんだつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

學校だけのお正月が來た。

松飾りもなんにもない門で、おきぬさんと羽子をついてゐた。寳舟の帆が縮緬でこさへてあつて、柄は錦袋でまいてあつた。柄の上のとこへ三ツ並んだ小さな穴が明いてゐて、羽子をつくたんびにそらに釣るした鈴がちりんちりんと鳴つた。

追羽子が十と續かぬのに肝癪を起して、二人とも眞赤な面をしてゐた。そこへ秀雄さんが自轉車に乘つたお友達を引張つてきた。

普通の大人の肩位も脊のある、がら〳〵ッとおそろしい音のする自轉車で、乘つてる人の面が少く赤く光つてゐた。髮をなめたやうに撫附けて、眼鏡を鼻の上にのせてゐるのを見つけると、二人は手を打ちながらはやし立てた。何と言つて囃したか忘れてしまつたけれど、とにかくまだハイカラといふ言葉の出來ぬ頃であつた。

間もなくわたしはその自轉車に乘せて貰つて、ぐるつと其邊をひと廻りした。一生懸命ハンドルにしがみついて、角を出つて怖々面を上げると、遠くで秀雄さんが笑つてゐた。わたしも笑つて見せた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秀雄さんの學校へ歸る日が來た。それと同時にお隣の家ぢうが京都へ引越す事になつた。秀雄さんは金澤の高等學校にゐたのだつた。をぢさんはお役所に勤めてゐるのだつた。學校は休むではいけない。自分も學校へ上つてる爲に、父さん達と別れて暮してゐる。お勤めなら何處へでも行かなければならぬ。父さん達もお勤の爲に、遠い遠い臺灣までいつてらつしやる――

これがわたしの『あきらめ』だつた。

別れるといふ事は、どんな悲しかつたらう。どんなにやるせなかつたらう。幾度かわたしは涙ぐむのを覺えたけれど、つまりはやつぱり『あきらめ』に行きついた。そしてはしみじみと吐息した。

いよ／＼『明日』となつたその日に、秀雄さんと、自轉車の主と、おきぬさんと、わたしと四人で紀念の寫眞をうつしに行つた。

丁度わたしがしもやけで足を痛めてゐたので、二人づゝ俥にのつて出掛けた。わたしは秀雄さんに抱かれてゐた。曇つた底冷いいやあな日で、がた／＼俥の搖れる度に、振落されるやうな心細いおもひがした。通る町も、通る町も、暗く煤けた、山國の冬のつれなさ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にかゞけてるやうな家ばかり並んでゐた。そして、兩側にいつぱい柳が植ゑてあつた。

秀雄さんも默つてゐた。

わたしも默つてゐた。

長いあひだたつてから、秀雄さんがふつとこんな事を言つた。

『もうこれつきり一生逢へぬやうな氣がしていけない。そしてお鈴ちやんは、僕のことなんかぢき忘れてしまふんだらう』

その時何と返辭をしたか忘れてしまつた。默つてゐたのかも知れぬ。たゞ何かが胸先きへこみあげてくるやうな氣がして、やたらに苦しかつた事だけは忘れない。

それからきつかけもないのに、わたしはあの接木の椿をおもひだしてゐた。とう〳〵どんな花が咲くかをきいてみた。

『お鈴ちやんみたいな花だ』

斯う答へた時の眼は、あの晩のやうに燃えてゐた。わたしはまた頬の火照るを覺えた。

うちの椿は三本ともまつ盛りであつた。

あくる日わたしはわざと學校でぐづ〳〵してゐた。二ツ年上で同じ級だつたおきぬさん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の、埃にまみれて机を眺めて、いつまでもボールドに墨を塗つてゐた。

校門を出ると氷雨が暗く降つて來た。濃紫のメリンスのお高祖頭巾に包んでゐても、頬がぴりぴりと痛かつた。今までぐづぐづしてた癖にこんどはせつせと歩き出した。お隣はもうまつくらに黄昏れてゐた。貸家札が生白く濡れてゐた。わたしは暫く立止つて見た。

家へ上るとお祖母さんは、早速温めてをいた紐つきのネルの足袋を穿きかへさせた。安火へも入れといたはつてくれたけれど、わたしはじつとしてゐられなかつた。そつと緣側から脊延びをして見ると、いくつもいくつも根元に花がこぼれてゐた。崩れぬまゝにぽとりと落ちてゐた。それがほんとうに悲しかつた。

寫眞が出來てきた。

珍らしく對の飛日の羽織をきた秀雄さんが、いちばんよくとれてゐる。椅子に掛けたわたしの友染の袂の下からは匹田絞りのしごきが覗いてる。足の繃帶がひどく眼立つて冷い面をしてゐ。手をつないだおきぬさんは、動いたかして少しぼうつと霞んでゐる。

わたしは京都と金澤へ直ぐ送つた。秀雄さんへは返事も添へて出した。なかへ、『接木の椿はまだ咲きません』と書いてやつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この頃になつて、夜になると小提灯を片手に持つて、片手に東京で稱ふよつだけを鳴らして、辻占を賣る小娘がくるやうになつた。いゝ聲で流してくる。格子のあひから覗いてみると、包みを背にしよつてゐる。わたしは秀雄さんが好きでよく食べた、つくばねといふおせんの中の辻占をおもひだした。そして妙に戀ひしくなつた。折々にあの夜のことがおもひだされた。だん〳〵繁く思出された。

秀雄さんからは、きれいなエハガキだの何だのが始終來た、――飽かず氷雨が降つた。

落ちた花の甘酸い匂ひが家の裡まで流れこむゆふべ、臺灣から久しぶりでの便りがあつた。それは長い〳〵、そして悲しい〳〵便りであつた。

父さんが一月余の大病で、毎日四十度以上の熱に昏々として睡りつゞけてゐるどいふ。二人の小さい者を他人に預けて、母さんは帶解く暇もなく看護してるといふ。峠を越したら――といふ醫師の覺束ない氣休めにせめてもの希望をつないで、今は唯『明日』をのみ待ち焦れてゐるといふ。うわことのひま〳〵には、はつきりとした聲でこどもの名を呼ぶといふ。とりわけて……

（母さんの字がひどく震へて、ところどころ墨もにじむでゐた）

——とりわけて鈴の名が多く呼ばれ候。きのふも少し氣分たしかなりし時、『鈴にあつて死にたい』としみじみと申され候——こゝまで讀んできて、お祖母さんも、叔母さんも姉さんも、みんな一緒に泣いてしまつた。わたしも熱い涙がぼろぼろと落ちた。けれど、その涙はすぐ乾いてしまつて、奈何してもみんなのやうに泣きつゞける事は出來なんだ。なんだか夢のやうな、嘘のやうな、お芝居じみたやうな、本氣になれない氣がして、そんなに聲立てゝまで泣くといふ事が、少し氣はづかしい氣さへしてきた。

『父さんは死にやしない。決して死ぬもんか。死ぬはずはない。死ぬはずはない』

何處かで斯う力強く叫んでゐるのが、はつきりとわたしの胸に響いた。そして、それが眞實の事だとしかおもへなんだ。奈何しても死ぬなんて嘘の事だと、嘘にしてしまはなければ承知ができなかつた。

『うそ。うそ。父さんは死んだりなんかしやしないわ。ほんとうに死にやしないわ。あたしにはちやんとわかつてる』

斯う大きな聲で言放つて、そして大人のくせに泣いたりするのを、あざけるやうな冷つこい笑顏さへ見せた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三人は呆れたやうにじつと、じつと、いつまでもわたしの顔を見詰めてた。わたしは少し眩しい氣がした。お祖母さんのそんな冷酷な表情を見るのもはじめてだつた。

暫くしてお祖母さんは、無言のまゝ立上つた。口の中で念佛を稱へてるのがよく知れた。いつよりも佛檀のみあかしを明くした、長い間額づいてゐた。やがて叔母さんと姉さんも同じやうに、疊にひれ伏すやうにして祈念をこらし初めた。いつかとつぷり暮れた暗い家の、ちら／＼またゝくみあかしの灯影に、三つの黑い影が固つたまゝさゆらぎもしなかつた。

わたしは遠くからただ眺めてゐた。

低い空に、見詰むるに從つてだん／＼と星が殖ゑてきた。鈍い光をにじませながら——

おちつかぬ一夜があけた。

わたしは顏も洗はずに庭へ下りた。吹いたとも知らなんだつたが、よつぽど風が吹いたのらしい。三本とも大抵花は落ちてしまつた。黃ろい蕋ばかりほつり／＼と殘つてるのもあつた。もゝ色のきれいなふつくりしてゐた花びらも、みんな赤茶けてぐちや／＼に腐れてしまつた。

わたしは佗しい心地にきれいさうなのばかり拾つてみた。十、二十、と數へてる中に、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふと或る記憶が甦つてきた。

夜明けに間もない頃だつたらう。寝苦しさにうと〳〵してる耳へ、ひそ〳〵と語る囁きが洩れてきこえた。お祖母さんと叔母さんのもつれた聲である。――

『あの子は薄情なのだ』

『憎いほどあきらめがよすぎる』

『あんまり怜悧すぎるのだ』

『たよりない子だ』

これだけの事だつたけれど、おびやかすやうに、執念深く心にこびりついてて離れぬ。

わたしはそろ〳〵と歩みながら、その言葉をくりかへし〳〵した。

『あの子は薄情なのだ』

『憎いほどあきらめがよすぎる』

『あんまり怜悧すぎるのだろ』

『たよりない子だ』

するうちになんだかこの通りの言葉を、以前にも何處かできかされたやうな氣がしてきた。思出さう、思出さうとあせると、よけいこんぐらかつて頭がふらついてきた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

父さん達と別れたステーションできいたやうな氣もする。秀雄さんと寫眞とりにゆく俥の中で咡かれたやうな氣もする。それから…………。それから…………。

わたしはめまひがしさうになつた。

いつの間にかお隣の庭へはいつてきてゐたあれからまだ住む人のない家は、じめ〳〵と青苔でも生へさうにしとつてゐた。そつと縁側へ腰かけて、じつとそこいらを眺めまわすと。

あゝ、接木の椿が唯一輪咲いてゐた。大きな大きな紅しぼりで、目覺むるやうなあざやかさだつた。わたしは何も彼も忘れていきなり傍へ驅けよると、殆ど夢中でその枝を折つてしまつた。折つてしまつてからはつと思つた。

わたしは紅しぼりの花を抱くやうにして、荒れた庭のまんなかに突立つた。

さうすると、ひとりでに涙が湧いてきた。そして、ほんとうに其時はじめて、わつと聲をあげて泣いてしまつた――。

――大正四、四、六――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

石のをんな―奈々子

この小拾年ほど、手紙らしい書信をしたことのない人に、どういふ心持ちからこんなことを書いてやらうと思ひたつたのか、自分でもそれがわからなかつた。眞面目でゐながら何處ともなくくすぐつたい。友達に書かうとしてゐるのではなくつて、自分の心を自分に説明するやうにも思はれた。

それでも奈々子は心の底でかう思つた。今書きかけようとしてゐる手紙を、友達に見せなくつてもよいし、それよりかも書きかけてゐて馬鹿々々しくなつたら、止めてしまつてもよい。何がなんでも友達に見せなくつてはならないものではない。自分にしてもどうしても書かなくつてはならないほどの用事でもない。

用事といふ語の響きををかしいと思つた。決して此處へあてはめる語ではない。これが用事ならば、天下に用事でないものはない、無用といふ言葉がなくなつてしまふと、約らないことを考へても見た。今朝目がさめた時には、南向きの室に暖かい日影が長閑にさし

こんでゐた。お正月も七草をすぎた日の雪が、庭にはまだらに殘つてゐる。殘雪の上には黑く、枯芝の上には鼠ぽく見える雀の群が、小松の脚もとに澤山に遊んでゐた。三才になる男の子が、夜の明けるのを待ちかねてゐて、鳩の餌をふりまいてやると、飼つてある土鳩や、白い貴公子風な朝鮮鳩のあさる餌のこぼれを、雀が一生懸命に拾つてゐる。空からも三四羽連立つて何處からか鳩がをりてきた、

奈々子は珍らしく元氣よく飛起て、すぐ机の前にいつて筆をとつたのであつた。けれど、この手紙のようなものを書かうと思ひたつたのは、前の晩の思ひたちであつたのである。そして、あの女は怒るかしらと思つても見た。吃度怒らない、あの女の事ゆゑ、くすりと笑つた儘で、讀みすてた文殼を丁寧にまいて、何年何月何日としるしをつけて手箱へしまつてしまうだらう。そうして火鉢へよつてから靜かに考へなをして、またくすりとして、何となく擽ぼつたい顏を掌で撫で廻すことであらう。白い梅の咲いてゐる家であつた。牡丹に霜よけのしてある前栽を前にして、家の人達と咄しをする時には濟ました顏をしてゐて、一人になると吃度二三日の間は其事ばかりを思つてゐるに違ひない。自分と違つた氣質で、何事にも綿密で、投げやりにしておけない友達のことゆゑ、何かしらん其の中から人生を探くり出さうとするに違ひない。――沈香が入れてあるかしら。それとも奢つて眞

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

那伽でも灶くかしら――奈々は、まだ出しもしなければ書きもしない手紙について、受取る方の人の心持ちや四邊の樣子を想像して見たりした。そして空想好きな自分の癖に醉つてしまつて、肝心の書かうとしたことなどは次の問題にしてしまつた。

今朝目がさめると、此頃にない引締つた心持ちで、どうしても書いてしまはなければならない氣がした。顏を洗ひにいつてしまうと、其儘火鉢に取ついて新聞に引きつけられてしまう。すると午前中は髮を結つたり、子供と一所になつて日向ぼつこをしたりして暮してしまふのが、冬になつてからの仕きたりになつてゐる。さうしてしまうと、何も書かなくつたつてすむことだ。手紙でもなんでも、貰つて讀んでゐる方が、氣樂で好い。自分から世話しい面倒くさいことをこしらへるには及ばないといふ、いつものなまけ癖が出てしまう。日向ぼつこの子供のお友達にごく相當した、呑氣な心持ちになつてしまふに相違ない。すると自分の心持ちも平らかな代りに、友達と私の仲は至極平和かも知れないが、こんな事をお互の身の上について考へて見たといふことが消てしまふことになる。どうせ自分なんぞの考へゆゑ、今朝の空に時雨雲の薄い影も目にとまらないように、社會の人の爲になることでも、婦人問題とかなんとかいふような有益なことでもないのは知れてゐる。ぢいやが庭の隅で焚いてゐる落葉の煙りが、庭境いの椎の木の梢を潜つて逃げてゆくよう

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なものだとも思つた。もつと〳〵それよりもたいしたものでなくつて、雀の羽擊きが、暗い影をほんの小さな丸さに、人間が瞬きをする間に土の上に落したようなものに過ぎなからう。けれども、自分と友達とは、それがため妙に思ひあふことがあるまいものではないが、奈々子の心の底には、こんな影のさす時があるといふことを友達が知つてくれて、そして、友達のくすりが、怒つた笑ひか、輕蔑した笑ひか、同じような心持ちでの笑ひかが、奈々子の心の底へ響くのを聞くのは無益でもないように思へた。それで、今朝も平日のように、新聞を讀んで日向ぼつこのお仲間になつて、この心持ちを反さしてしまふのを恐れた。

　三十を越したばかりの友達は、いきなり十ばかりになる女の子の母親になつた。それとかれこれ同じ頃に、奈々子も自分の子供同様な男の子が出來た。それはやつと明けて三才になつたばかりで、漸く青成が見えて可愛らしくなつてきた盛りである。二人とも子持ちになつたことは偶然なのであつた。友達は奈々子が何もかも子供のためには犧牲にしてしまつて、このごろは育兒といふことばかりに沒入しきつてゐるのを、笑ふことの出來ないほど眞面目なことに見てゐたが、奈々子には友達の子供を貰つたのが、何の爲だか分りかねるところがあつた。それが日が經つまゝにすこしづゝ分つてきて、友達の心持ちが鮮か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に見えるような氣がしだした、で、自分の見持ちになつたのはこんなに幸福に思ひながら、友達のためには薄らがなしい思ひがおこらないでもなかつた。

それで手紙にはのつけに「石のをんな」といふことを知つてゐますか、と書かうとした。何だか落し噺じみてゐる。もしそんなおどけたものに最初つから感じられてしまつては殘念だとも思つた。「石のをんな」とは石女とかいてうまず女と讀むでせう、貴女と私とのことです。生ず女の雛かしづくぞあはれなる、とかいふような句も讀んだことがあります。そんなことよりも何よりかも、石女なんていふ字を見ると、石の人といふ冷めたい淋しい感じはしても、どこか寂しい中に靜美な氣が動いてゐるではありませんか、石人石馬とかいつて、支那の古い陵に立並んでゐるところがあるさうですが、私には別に自分達を石女と書いてもちつとも嫌な氣が起りません。けれど、この頃の二人の上には、丁度苔の生へかゝつた石の上に、薄くれなゐの花の蕊がこぼれて來たようには思ひませんか。薄くれなゐの花といへば、お宅のしいちやんは海棠の蕊、うちの大事な坊やは紅梅の蕊。——頭の中の白紙には、かういつたやうな文字がずん／＼並べられたが、其處までくると、家の坊やの紅梅はほんとによい、うまく譬へたと滿足する下から、しいちやんの海棠は、あんまり文字に囚はれすぎて、きれいな文章に見せようとする虚飾のような氣がした。そして他

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人の持つものならば、おや〳〵と思ふような俗惡なものにも、結構なのですねえといふ空世辭がついて廻る、女の癖の賤しさを思つて、私は友達にまでこんな見えすいた虚をいふのかしらと嫌な氣がした。

海棠の莟――どうも具合が惡い。いつぞや友達と二人きりになつた時に、こんなことを云つたのを奈々子自身でも覺てゐる。「大變な子を貰つたのね。もちつと美しい子がなかつたの、まるで無花果のようだ。」あの時、うまい事を云つたといつて、笑つてゐた友達は吃度覺てゐるに違ひない、頭のよい女で、何年何月にはどういふ事があつたといふことを、とんでもない時に思出していふことがある。その上素帳面で其日のことは、寢る前にちやんと日記につけておく女である。奈々子は時折妹にむかつて、あの女は頭の中がきちんと片づけてあつて、何番目の何側の引出しにはさういふ口の考へがしまつてある。奥の方の鍵をまはせば、大事な時の智惠が疊みこんであるといつたような女だ。たいがい日半のことは、口許の小出しにしてあるので、あんなふうに無口で、まじめで、をかしくもない顔をして、何にも趣味のないようなふうに見られてゐて、どうして〳〵とても凡人ではないよといつてゐたほどである。奈々子のづぼらなのとは反對に、いつも机の上はきちんとしてゐる。手廻りの品もさうである。することは時間内にしてしまつて、澤山の余裕をつく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つては、自分の仕事のことを考へつゞけてゐる。奈々子の頭の中はいつも亂れがちで、雑草が鬱然と處を得顔に根をはつてゐる。それで何事かをしようとする時には、まづ雑草の刈取りに無益な時間をとられがちて、それだけの仕事に精根を勞れさせてしまつて肝心なことにかゝらないさきに討死をしてしまふ事が多かつた。そんな時にはいつも、友達の名をよんで、あの女の頭のように、日本銀行の穴藏のようにしておけばよかつたと云つたりした。

友達は理屈つぽさうに見える女だ。なんとなく角ばつてゐるところがある様に見える。字がさうだ、活字を並べたような、假名まじりならば版下にするようにきちんとかく、着物も四角に着る。紙入もこつちの方が十圓札、こつちの方へは一圓札といふようにわけてあつて、それも一枚づゝ素帳面に新らしいのが疊んで揃へてある。田舎者のはくような不意氣な恰好の下駄に太い鼻緒をすげて、濟して町を確かりと四角に歩いてゐる。好きになると葡萄を半年の間缺さずに、毎日食べつづけてゐた。ある時の病後には晝食にビフテキの一皿を進められてから、一年あまりつづけてゐたことがある。御飯をたべるのにも長い時間の入用の女であつた。何事もよく咀嚼する氣質が、それとはまるで違つて、一生の半分以上を無益づかひにしてしまつてゐる奈々子とは、面白いほどに反對であつた。それでゐなが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら江戸つ子は宵越しのお金をもたないといふ、其時勝負の奈々子を、人一倍に信じ、奈々子の心持ちを尊重してくれ、物質の心配なんぞをさせたくない、奈々子には出來るだけの駄々をさせてやりたいと云つてゐた。奈々子が子供の世話を引受けるようになつたときには、また癖の物好きがはじまつたと思つてゐるらしかつた。それにばかり溺れてしまつては困るといふような様子も見せた。それが妙なことに、すこしばかりたつと、八歳になる女の兒の母親になつてしまつた。奈々子はその事について、別段相談もされなかつたが、ある日友達が自作の曲を譜にとつてゐながら、鉛筆をはさんだ次の指で、輕く膝のところを打ちながら、「さう／＼咄すことがあつた。」といつて、眼鏡の下からちよいと覗いておきながら、語ふことはそつちのけで譜をしるしてゐた。

「話しつて何なの。」と急つつくと、引連の手つきをして、それをちやんと譜にしてしまつてから、「子供が出來るかも知れない。」と眞面目くさつて云つた。

その時の譜は、手ほどきからすこし進んだ、小學位な程度のもので、ごく大間な古曲と近代的の心持ちとを組合せて、むらのないものを幾つか作曲しておきたいといふので、奈々子は丁度讀んでゐた雜誌に載せてあつた、晶子女史の小曲の幾つかの中から、節をつけてよいと思ふのを拔いて見せた。その中の「蟬」といふのに手をつけてゐたのであつた。海

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に近い江のほとりの、奈々子の家には明るすぎるほどに、初夏の光りがさしこんで、青空の下と天井のある室の中と、たいした違ひのないほど晴々したところに、障子をすつかりあけきつて、二人は心ゆくばかりに其日のあたりと親しみあつてゐた。折々若葉の青い匂ひや、強い花の香を誘つてくる風に、梢の新緑が幽にもめて、ほどのよい曇りを二人の膝の上におとした。さし潮の夕暮にはまだ間があつたので、爽やかな風に濕りけもなかつた。友達が膝の上へ引きのせて、指で輕くあたつて見る樂器から、丸つこい、すこし重味のある音色が、十三の絃とは思はれないほどに、かなり復雑して響いた。曲は歌詞のどこいらまで進んでゐたのかわからなかつたが、奈々子は却て爪をかけてゐないので、若い蟬が土からはいだして樹へ登つて、やつと柔らかい羽根が出たので、そつと音をたてて見た最初のをど／＼した調子や、風は目に爽やかに吹いても、眞夏から秋にかけてのように、木の葉が強くなつてゐて、輕く吹かれる音でない、柔かい葉の重なりあつて濕つぽいほどしつとりしてゐる上を、若い娘が花見衣をぬいて、初袷になつた素足のいなせを、自分で心持ちがよくつてたまらないように吹いてくる風が、勢いあまつて上すべりをさせられる、といつたような調子が出てるのを面白く思つて聽いてゐた。そして此女は稀に見る名人だと思つてゐた。手法ばかりが冴えてゐるのではない、作曲でも現今で一二の人だと、いつも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

感心することを繰かへしてゐた。

「何處から貰はうといふの。」そんな話きいたこともなかつた。」奈々子が思ひだしたように貰ひ兒のことを聽きだすと、友達も思出したように「何ね、貴女も知らないところのちやない、鎌倉にゐた女の遺していつた中の一人なの。なんだか引取らなければ、私の心持ちが濟まないような氣がするから。」そんなことを云ひながらも、矢つ張り色々の音を出してゐた。

今まで聞かせなかつたのは、よく惱んでゐたのだなと、奈々子はお腹の底の方でくすりとした。それをすぐに顏へ出してしまうのを、友達は無關係なように顏も振りむけないでゐた。

鎌倉にゐた女といふのは肺病で死んだ女友達のことで、その女の夫は狂人であつた。夫の實家は資産家であつたが、どういふ譯か今では兄弟が跡目になつてゐて、狂人の方はあつてもなくつてもよい人になつてゐるらしかつた。肺でなくなつた女と、奈々子はつい一度も落合つたことはなかつたけれど、かなり古くから名に懇意な女で、その女は奈々子に眼つきがよく似てゐたといふことは、口のおもい友達からも度々聞かされた。時折は懷かしさうに見つめてゐることなどあつた。

「七人からあるのだから、誰か一人世話をしたいと思つてゐる」といつてゐたが、其中の、たつた一人の女の子を貰つたのであつた。

「貴女のことだから、吃度よく考へたうへのことに違ひない。」奈々子は狂人や肺病を、其子の上にまで考へたくないと思つてゐた。奈々子自身も、ついその前まで、父親に氣違ひをもつた娘を預かつて、可愛がつてゐたことがあるので、却てさういふ兩親をもつた子に同情してゐた。貰へばどうせ家督にしなくつてはならない家なのに、そんな小むづかしい事をちつとも云はないところは、流石に此女だからこそと忝けないような氣もした。鎌倉にゐた女が、臨終のをりに實の親子も賴まない事を、此友達だけに云殘していつたといふのも頷づかれた。此薄命な女も自分達におつつかつつの年齡で、よい家に生れて、資産のある家に嫁きながら、あんまり若くて多くの子持ちになりすぎて、死ぬまへには年端のゆかぬ子供達に取りまかれて、何にも云はずに涙ばかりぽたりぽたりと流してゐたのであつた。友達は病む女が、そんな心細そうにしてゐる折に行きあはせて、もしもの時には吃度一人は引きうけると、言はず語らずに約束してきてゐたに違ひない。そして其女の死後に、ちよう〳〵しく世話をやきたてずに、遠くから子供達のなりゆきを見守つてゐて、此度愈々引取ることにしたのであらう。ビフテキを一年も食べつづけ、葡萄を半年も食べてゐたとい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふと、石の上にも三年流の、いかにも落附きすぎて、味覺も、趣味も何にもない女のようにきこえるが、今日の肉は火が通りすぎてゐた。昨日のは小牛にしては彈力があつたといふふうに、ソースや辛子にごまかさない調理の味をこまかに吟味するほど、鋭敏でありながら、それも聞かれなければ別段口にも出さないといふ、一事が萬事であつた。野暮に見える底に意氣をすつかり包んでしまつてゐるのが此女の流技だと思つてゐた。奈々子が水の細い流れなら友達は岸の石のようだ、いつも苔の衣は代りないように見えてる、春はこまかい青白い花が咲いて、白つぽく粧はれるし、夏は淺綠から濃い凉しげなのにいつか代つてゐる。眺めても眺めても四季同じようでゐながら、趣のある、どうしても退けられないもののような氣がする。裾を廻る水の流れは氣持ちがむりで、濁つたり澄んだり、痩せたり枯れかけたり急に水量をましたりしても、根もゆるがせずにゆつたりとしてゐる。とても眞似の出來ない女だ、自分の學ぶべき女だと、いつも感心を深くしながら、村田屋でこしらへさせる着物を、あんな風に着ころしてしまつて、あんな太い緒をすげた、あんまさんの穿くような下駄は、自分自身で阿波屋へ誂らへにゆくのかと思ふと、をかしくもなりたがるのをさうでない、流行だの粹だのと、廣告の字や他人の見る裝飾のためにでなく、自分自身のためにしつくり似合ふのを知つてゐるのは、友達なればこそである、自分をほ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んとによく知つて、他人の物でなく生てゐるのは、行ひに出してゐる他の誰彼より、よつほど勝れてゐると又更に感じたこともあつた。

遠くの花の香を嗅ぐような目附きをして、奈々子がそんな思出をたどつてゐようと知らぬ友達は、ふと何か云ひかけようとして振りかへると、奈々子が自分を見詰めてゐるので、そんなに感激してゐるとは知らずに、例の通り何か書くものについて想を集中してゐると思つたのか、云ひかけたのを中止して雲もない空の方を見た。奈々子もそのあとを追つかけて見やると、其處には鳶が一羽、遠くからくる飛行機のやうに斜に翼をのして、水の方へだん〳〵にさがつてゆくところであつた。友達の輕るさうに結つてゐる丸髷の中からも――友達は自分の好みの、竹の筒のように向ふが見える髷入れを用ひてゐる――淺黄の手柄の色が消てしまうように、青い空が透いて見えた。

七人の中の女一人、吃度引取つて貰ふのには、美しい人好きのする兒をよこさうといふのであらうと思つてゐた、奈々子の考へは違つた。

「貴女は其子を見ると、吃度當がはづれるに違ひない。」と友達は笑つた。

忘れるともなく、貰子のはなしを聞いたままで幾日か過ぎてしまつた。秋になつてからある日妹が琴の稽古ながら二三日宿りにいつてきて、しいちやんのお廣めに、昨日は親類廻

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りをしてゐたので、お稽古をして貰はなかつたといつた。奈々子はそれを聞くと、おやおやそんなに遊んでゐたのかと呆れた。別段形式だつて祝つたりするには及ぶまいと思つた。友達の親類は富豪のよりあいであつた。格式につれて、やつたりとつたりする祝事に忙殺されて、さぞ苦い顔をしてゐるだろう。外出をしては風をひいて、アンチピリンを飲むと口のはたを紫色にしてゐる、惱ましさうな顏を見るように思ひうかべた。ある日奈々子は樂劇の作曲のことについて、友達をたづねる必用が出來た。友達の家は汽車へ乘つても、旅へ出たといふ心の起らないうちについてしまふほどのところで、小高い岡の上に品のよい住心のよい家居をしてゐた。

「おばさま、はじめまして。」友達は例の通り眞面目くさつて、貰ひ兒の初對面の挨拶を代つて述べた。そして自分が今述べた二重の挨拶が、いかにも奈々子と自分の間には、滑稽に聞えるのを辯むわかけにはゆかないように、底の底の方で自分の矛盾を笑つてゐるようにも思へた。奈々子が其時に祝辭にかへた言葉は、驚膽した意味も籠つて、「無花果のような。」といふ、とんでもない御挨拶であつた。

それをいかに無意識にかいたとしても、字面の飾りに筆がさう運んでいつたとしても、「海棠の花の莟」では、褒られて却て蔑られるよりも心持ちの惡い、擽はゆいものに違ひな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い。といつて、石の上に無花果でもあるまい。そんなこんなから、別段書かなくつてはならないといふ、纏つたこともないので、石のをんなの謎は取消しになりさうになつた。と、妹が苦いお茶を入れてきてくれた。手をひかれて奈々子の大事な寶の、紅梅の莟もちよこちよこと歩いてきた。

『ぼん、ぼんといふからお盆をだしてやつたらば、貴女のお湯呑みをのせて、こんどはぶうだといふんですつて。坊やがお茶を入れさせたのだから召上れ。』と妹は云つた。

子供は奈々子の膝の上を戀しがつて、妹がさう云つてゐる間に上つてしまつた。そして奈々子の襟と頬とへ片手づつかけて、近々と顔をよせてしきりに片言を云つてゐた。黒水晶のように澄んで光つてゐて曖昧のこもつてゐるうるおひと丸味のある瞳が、奈々子の眼の中に融けこんでくる。何か云つてしまふと小首を傾けてゐるさまが、小鳥が興ありさうに囀つてから、きよとりと首をかしげるにも似て、その可愛さは目にはいつても痛くないといふ、古い諺が全く事實であつた。

奈々子は甥を抱きしめながら石の女に母親の情は分らないかも知れないが、此子と自分との友愛の情の深さとたつときは、決して母親にも見られないものだと慢じてゐた。全く奈々子が甥に對するには、母親の注意も父親の注意もすつかり整へてゐた。子供は天地の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何物よりも、奈々子一人を目にも頭にも止めてゐる。奈々子には生んだから育てる、自分から生れたから自分の子だといふやうな、打算的な感念や、親だからといふ概念の下に、知らず〳〵に愛しながら壓制になつてゆく、親といふものの歩く道とは違つたこの子一人に對しての獻身的なあるものがあつた。二人にも三人にも分けられる親の愛ではなかつた。奈々子と甥との間はどこまでも二人を二人で、他に分る余裕は極めてすくないといつてもよいほどである。

石の女の手紙の感想をつゞめていへば、まあそんなものであつた。私にはこの子が天と地で、此兒には私が天と地でせう。私においてはそれが永遠にさう思はれることで、此子にしても、すけなくも十年や十五年はさういふ天地に生るでせう。親といふ、いかつめらしい名に敎育することは私には丁度幸に不用です、此子の友達として、此子の相談合手、遊び合手になりながら、此子の持つてゐるなる丈美質を出させることに勤めて、敎育してゆけばよいのです。私は此子と同じ年になつて——此子と向ひあつてゐる間は——よく遊んで、よく寢むつて、二人の間に毛一筋のへだたりもないやうにすればよいと思ひます。私は此子を育てたといふ事について、すこしも恩にきせるいはれはないと考へてゐます。却て私は面倒くさい人生に離れて、三ツ子の昔にかへつて、眞から清新（ふれつしゆ）に自然に生き、自

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然に樂しむ悦びをわけ與へられてゐます。私の狂人ぢみた混線した頭の中は、此子の新らしい美しい、ほんのりとした紅梅色の血潮で洗はれて涼しいほどです。私は此子を見る眼の欲の愛よりも、もつと尊いものを精心の上に貰つてゐます。私は此子を寢かしつけるときに、私のお寶さんやと云ひますと、子供は無心で「ええ、え」と返事をします。そしてすぐに眠い聲で「ばあば」と私をよびます。それはさんと「私のお寶さんや」といふのに答へて感謝してゐるのにちがひありません。私はそれを子供の聲と調子に知ることが出來ます。私が此子を育てる心持ちを、氣の毒ながら子を生んだ女には知ることが出來ないから うと思ひます。其處で貴女は如何か、といふような意味なのであつた。

その返事を友達から聞くことが出來たら、天から授かつたと思つて、お寶さんやといつて育てゝゐる石の女と、一つは義俠から、一つは貰はなければならない家庭の淋しさから、急に八才になる女の子を貰つた、天才的の石の女との考へが、何處まで似よつてゐるか、まるで違つてゐるかが分るのも興味がある。それが二人とも世間的な、世話女房でないのも面白いと思つた。

お寶さんは奈々子の懷をさがしながら、ぽつぽ、ぽつぽと、庭へ下りてゐる鳩の方を見て、奈々子にも見逃すなと敎へてゐたが、日あたりの心よさと、膝の上へのつたあまへと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にうつとりさしてきて、やがて奈々子の細い腕の上へ安心した眠りをのせてしまつた。妹は紙の白いのを見詰めてゐた奈々子の顔を見て、例のがはじまつたといふように、

「折角お仕事をしはじめたのに、邪魔をしてしまつて。」とくやんでゐた。今日氣がそれてしまふと、また半年位其儘にしておくのであらう、呑氣な人が甥の面倒を見るようになつてから、大きな赤ん坊のようになつてしまつたと思つてゐた。時折には「家では二人赤ん坊が出來たのですよ。」といふこともあつた。

「手紙を書かうと思つたの、横濱へ。」といふと、それは珍らしいといふような眼つきをして、「何の用で」と云つた。

「用なんぞありやあしない、石の女つて書くの。それは私と二人のことで、それから坊やが紅梅の蕾で、しいちやんが海棠の蕾。」

「あはははは。」聲をだして妹が笑ひだした。

「だからさ、そこのところで行きどまつちやつたの。無花果とも書けないし。」

「叔母さんが大騒ぎやつて、赤い着物をきせたりしてゐるのよ。だけれども可愛がられてゐるから仕合せね。」妹は叔母さんが、友達のちいさい時分に着たものやなにかを、そつくりとつておいたのを、とつかへ引きかへ着せてよろこんでゐるといつた。友達はそんな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ここはすつかり母親まかせにしておいて、その子の教育のことだけを、だまつてゐるようで嚴敷してゐると云つた。そして自分の關係しないですむ時には、室に籠つてゐて、箏についてしきりに著述をしてゐるとも云つた。それをきくと、奈々子には片つぽの石の女の心持ちが、すこしは分つたような氣がした。さうではないかと思はないでもなかつたが、母親になつた友達はほんの中次ぎで、つまりおばあさんの養女が出來たのであつた。

「それではあの子は、家庭的な子だらう。」をかしな言葉ではあつたが、奈々子はさういつて妹にたづねて見た。

「ええ、どうもお臺所のことや、奥の方のことに氣があいそうだつて悦んでゐましたよ。をかしいでせう、おばさんが悦ぶのはわかつてゐるけれど。」

「さうでない。あの女の方が悦ぶ筈よ。」といふと、「何故」と妹は解せない顔をした。

「名人が二代續くものでないといふでせう。質のわからないのを仕込んで焦々するよりも、家の方へ自分の代理をこしらへておいて、自分がゆつくり研究する方がよつぽど經財だから。」

「貴女が經財なんていふのもをかしい。ほんとにをかしな人達だ。」何がをかしいのか妹はさう云ひながら、白い紙の上へ樂書をしてゐたのをやめて、暖かさうなところへ甥の書

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

寢のしつらひをした。

友達の母は、蜀山人が小唄にまでうたひこんだ、山谷の有名な割烹店に生れて、日本橋の大商人に嫁入りをした女であつた。友達はたつた一つぶだねの娘で、四才の時に踊の稽古にあげられたのを、どうしても嫌だといつてゆかなかつた。その時分から子供にしてはかなり異つた性質だつたといふことである。箏は生來好んでゐたので、母親が自分が習ひたかつたのを、つい折がなくて嫁入りをしてしまつたから、どうかして女の子を生んで早く箏が習はしたいと、それをたつた一つの願望のようにしてゐたといふことを、子心にも頭にとめてゐたと見えて、十才ばかりの時中の島檢校と手合せをして、此子はと舌を卷かしたほどであつた。伊達好きな父親は、脆弱い一人娘をいとしがつて、なる丈氣の晴れるようにしたいと、充分な小遣ひをもたせては山谷の家へあづけた。山谷の方では家業柄なので、出入の者から店のものまでが、五ッ六ッのお嬢樣を御本尊のように祭りあげて、時候のよい時分には毎晩のように吉原まで遊びにつれていつたりした。そんな風に育てられても友達はどつか水に染まない氣質があつた、何處までも自分の素一本なところが磨きだされてゐた。母親や父親の慈愛と物好きとから、飾りたてられてゐても、石で彫つた人形のように——木で彫つたと云ひたいが——超然としてゐるところがあつた。書籍なども男

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

性の好みさうなものにまで目を通してゐた。それかといつてむづかしい理屈を並べようとするのでもなかつた。歴史ものや物語りなどを讀むにも專門家のように、細かいところまで自分の會得するまで研究して讀みふけつてゐた。

奈々子はよく和歌の會や、琴曲の會で、いつも時間に遅れずに來てゐる友達の姿後を眺めてゐたことがあつた。あんまり大きくない體に、紫の矢がすりに大和錦の立派な帶を脊負つて、文金の高髷に結つたのを見ると、どうも不調和のように思つた。ある時などは特色のある昔のお大名の奥方のいふ吹輪のような丸髷に、赤い鹿の子の手柄で、鼈甲の花の挿こみの後ざしをさして、派手な鼠つぽい色の模様ものをきて、强度の近眼鏡を光らせてゐるのを見かけた時には、今日はまるで花嫁さんのおつくりだのに、持ものから扮裝まで表面はそつくりおばさんのお好みで、着てゐる御本體はちつとも つくりけのない友達だと笑ひ出したことがあつた。其時も友達は白いものをちつともつかずに、まつ黑な顔をしてすましかへつてゐた。

男にも女にも、奈々子の知つてゐる限りの人の中で、あの女ぐらひ芝居氣のない人はないと思つたことがある。近眼と、めんどくさいとが手傳つてゐるとしても、友達の髮は髮結ひまかせであつた。結手が違つて前髮が角ばらうと丸からうとそんな事は氣にしなかつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。それでゐておしやれな事は非常なものであつた。奈々子が友達のことをおしやれといふと、友達も見當違ひのような顔をした。聞く人達も希有な顔をした。けれど奈々子は、虛飾のためにするのでない。本當の意味のおしやれで贅澤屋は友ゞだといひはつてゐた。世間の大概の人のおしやれはと贅澤は、多く見得が手傳つて、見るものがあつて滿足するものだと奈々子はいつてゐた。

石のそんな二人の、子供についての考へは、まるで別のものだといふことが奈々子に感じられた。友達は貰ひ兒を、奈々子が甥に對するように、自分の若い新らしい生命だと考へてゐるのでない。あの脱俗的な女は、自分の代りのものをお母さんへ差上げようとしてゐるのであつた。家柄だけの社交といふような方面にも、母親がなくなつてから自分がわづらはせられないように、道をつけておかうとしてゐるのかも知れない。それには勿論逝つた友達との默契を果すといふことが、一番重なことだつたには相違ないが。

あの女は何にも云はずに、自分自身がどこまでも生ようとする女であつたと、友達のためにも研究してゐる道のためにも、奈々子は、何ともいへぬ悦ばしさをおぼえた。そして奈々子自身も幸福であると思つた。考へようが違つてゐたからといつて、どつちが幸福でないといふことは出來ない。異つた道を歩いていつても、落るところは安心立命の地であ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るから。

「なるほど、海棠の蕾でなくつて好い筈だ。おもちやや慰みに貰つたのではいから。」

と奈々子は一人言をいつた。そして手紙を書くことも中止にした。

「今日もおやめですか、ぢやお茶菓子でも持つてきませう。」

妹は甥の寝顔をながめて、たわいもなく嬉しがつてゐる奈々子の様子に、今日も仕事はお留守になつたのだらうと思つてゐるらしかつた。

「今日に限つたことぢやありません。貴女の魂は此頃はすつかりお留守になつてゐるのですもの。」と云ひながら妹は立つていつた。

奈々子には其言葉がをかしかつた。この小さいものの魂は、今夢で何處に飛んでいつてゐるであらう。さうすると其後から自分の魂も追つかけてゆく。これが暗い夜中だつたら、うつすりでも影が見えようも知れないが、こんな糸遊でもたちさうな、ほか〳〵した冬日和で、何處もかも黄ばんでゐては、煙のような魂なんぞ見える筈がないと、駄じやれをお腹の虫にきかせてゐた。

さうして其日も日向ぼつこで、短かい日を暮してしまひさうであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

處女作――千原代志

（四）

『近頃の評論界つてばまるで喧嘩見たいでございますのね、さうじやございませんか、什も私共には皆さんがお互に勝手な理屈を捏ねて啀み合つてるとより外思えない場合がございます。評論界など申して勿論文藝上乃至思想上の而も極々僅かな範圍の事より知りませんけれど。それはね、ともすると揶揄とか反語とかを用つて大人氣もなく相手の氣を惡くさす樣な皮肉の言ひつこに奔つたり、人心攻擊に迄及ぶのでございますもの。』

『那麼傾きのあるのも免れない事ですね、而し信實を語つて居る人――少なくも自分でさうと信じてゐる人が其人から見て他人が誤つた考を抱いて居る、或は進んで自分の所信の領分を侵して來た場合、彼等の我慢が爲切れなくなるのは無理もない事ではありませんか。畢竟自己に忠實な心からこそ、さうも憤發氣(やつき)になつて言爭ひもせねばならぬ事となるのです。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

社界のあらゆる方面に於て妥協と爭鬪と抱擁とでも言ふべき三つの階梯があつて、抱擁と迄の時代に到達するには容易な修養ではないでせう。其處で比較的眞面目な正直な、人々が憤發氣となるのです。』

『ほんとにね。泡鳴氏なんか隨分多方面の人に向つてやつきでいらつしやいますわね、あの方の事を文藝評論界の荒武者と言ひたくなりますの、でも眞向に自分の確信を言ひまくる事の出來るのはどんなにいゝ事でせう。いゝ加減に妥協して胡麻化してすまし込んでる人が一番卑劣ですわね、ところが惰廢無自覺な妥協と、超越した抱擁との差別が一寸難しいものでございます。今日の狀態では抱擁等と云ふ事は考へ得らるゝ程度に過ぎないで、實際有り得べからざる事で又强ひてしなくてもいゝ事だと思はれます。』更に語を續いで、『無智から來る盲從無自覺から來る屈從と、卑劣な妥協との堺目も亦一寸瞭然しない場合がございますけれど、前者は寧ろ愍むべきもので後者は寧ろより以上唾棄すべきものなのは明かでございます。』

『イヤ全くです。御說の通りです。』

牧師の表情には少しも眞面目さを欠くものは認められなかつた。

『誰かの言に惰廢のがございましてよ。「吾々の信賴する單純な論理は、畢竟與へられた

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る場合に於て全社界によりて感せられた印象の共通な要素、從つて非人格的な殘滓のみの組み立てゝある不動な狀態の並置を以て之に置き代へたものに過ぎない。外見的論理の下に根本的背理の存するのは自明の理である。」つて樣なこと。

個人の價値や自由をあらはすに足るだけの、人格的な潑溂たる論理を見出さねば嘘ですわ。』

彼女は一寸小首をかしげて其色を讀む樣に牧師の顏を視たが、

『妙なもので社界の多數は恁う云ふ眞面目な思想をもち、最も自己を僞らない者を捕へて不眞面目視し、異端者視し、恁う云ふ最も自然な眞摯な要求に對し、不自然な危險な浮薄な名を與へます。

ま、とんだ氣焔をあげましてね、御氣に適ひませんでしたらごめん下さいまし。』

『いえ、如何致しまして、僕も至極同感です。宗教界に於ても略々其れと同樣な問題に於て解決を求めて居ります。』

とこの年若な女性に向つて暗に自己の立場を辯護する如く。夫れは彼の尙語つた次の語でも明かである。

『現今の知識的階級の人、早き例が科學的知識を與へられた青年達が、從來の宗敎的信念

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に滿足し得られなくなつた事は當然の事と云はねばなりません。その點に到つては今日の敎會特に我々の聖公會は大いに鑑みるべき餘地があります。吾々牧師の職にあるものなどは貴女方には如何にも不徹底なものと見えませう。否總てが全く不徹底です。』

恁麼比較的眞面目な會話の中にもYさんの牧師に對する觀察は進められた。彼女が抑々の日に彼から受けた輕い一種侮蔑的な感じ、殊にその刹那的に不快を感せしめられた其眼をも今の彼の何處にも見出されないのが寧ろ不思議な位に感ぜられた。しかも同時に彼等は今互に何等かの無形の力を及ぼし及ぼされんとしつゝある事をすら朧げながらも意識したのである。

牧師は只管彼の心臟の悸きを沈めて何氣なく語つた。

Yさんは心中で斯う言つた。

『此の人も矢張何かの魂膽を持つて私に近づいて來る樣よ、そして妾もちと變だわね。けれども對手に魂膽があれば這方も其の心算で甘く係蹄に係つてやるだけの事だわ。妾は妾に近づいて來るすべての運命に對して如何しても一度は手にとつて見なければ承知出來ない性なのだもの、妾は那麼に大膽なんですからね。』

一瞬間二人の間に白けたこだはりが見えたのでYさんから口を利いた。

『先生小説お好きでいらつしやいませう？　そしてたんとお讀みになりましてせう？』
『えゝ讀むだつて言ふ程は讀みませんが、好きにや好きですよ。』
『アラ隨分お讀みになつてるくせにして、でも反譯物などには全くたまらなくされるのがございましてね。私なんかが小説に讀まれちまふ人なんですわ。これが著者に對する讀者の態度であると思つて居りますから。』
　彼女は歐洲の名作篇を直接讀みこなすだけの語學の力のないのを嘆息した。牧師は其に對して、
『私も一時そんな事を考へて語學に沒頭したこともありましたが『今では必ずしも原著に賴らなくともその一貫する思想に觸れる事が出來ると思ひます。偉大な思想感情の大潮流はあらゆる物質は勿論、不完全な言語や時間空間を超越して必ずや交流するもので誰しもが之に逢着し把捉し得られると思ひます。けれどもその文章の形式の方面に就ては或は自他國語の相違から如何とも仕難い點が多くありますでせう。玆に於てか語學の力も必要なものとなつてまゐります。』
『私はその事を申上たんでございますの、原著によつて其作家から受ける直接の感動、一句一句にも選練せられた形を知る上に矢張語學を研究することの必要を感じます。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

暫時二人の話は杜切れたがふと佇止つた牧師は突然に、

『あの向ふの山のアウトラインを御らんなさい、何て緩漫な美い線ではありませんか。』

拭つた樣な、永遠の神秘を忍ばせる樣な澄み切つた空に浮き出した彼方の山の線は、彼女にもよい感じを與へた。

『でも一體の景色に物足りない感じがされて仕方がありませんね。潤ひのない深みのない。私は始め見ない間は――眞帆片帆靑繆相映ずるインランドシーなどゝ憧れてゐたものでございますよ。でも宮島はいゝと思ひました。』

『左樣、宮島の山だけは此邊では一寸變つた趣をもつてゐます。貴女のお國はどこやらと仰有いましたねえ。』

Yさんは中仙道の山國が故郷だつた。現實とはあまりに懸離れた、別の國を想はせる樣な水明の幽境に產湯を浴つた。彼女の小女期の大部分はこの幽境とその土地での文明の中心たる小都會で暮された。

けれどもこゝも華胥の國でない限り現實の爭鬪は彼女の周圍に起伏した。村のたれそれのロマンチツクな戀物語り、鼻つたれ小僧が都に出て今では何々中將に出世した話などは幼ない彼女の耳にも種々の刺戟を與へた。父の放蕩、一家の混亂紛料零落にも幼な心にや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る瀬ない悲哀と恐怖が印せられた。母が泣いてゐるのを見ると其袖にしがみついて泣いて泣いて慰めたものだ。

恍然考へ込んでると、

『あちらの山はいゝでせうね。』

『えゝ、もう、それや眞箇に忘られませんのよ、恁う二抱へも三抱もある杉が森々と立ちならんで——あの何でございましたつけ、祈願の蠋燭の樣にね。』

先を言はうとするのを引き取つて、

『山はどうしても杉山でないと奥ぶかくありませんね、それで、時々お國へお歸りになりますか。』

『いゝえ、それ以來ちつとも、もう國を出てからまる六年も足踏み一つ致しませんわ、家族はみんな名古屋の方へ出ちやつたんでございますからね、一夏往きたい〳〵と思ひながらつひ。夏は實によろしいんでございますよ、溫泉もございますね、場所が場所ですから費用はかゝらないし。』

『それは一つ是非とも往つて見たいものですね、あちらの方面はちつとも知りません。どう行くんですか。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「岐阜迄かそれとも近頃は中央線で大分近くへ行かれる事になつた樣子ですが、でも二十里の山道を歩かなくちやなりませんよ。是非一度はいらつしやいまし。」

一年振りの暑中休暇に女學校の寄宿舍から、二十六里の變化ある道をある時は峠の坂道を徒歩で、俥に搖られながら二日路を費して歸つた時分の思出が、染々と彼女の腦中に蘇つて來た。

左は巍々たる山石は紺碧に物凄く淀んだ淵にのぞむ道の急激なカーヴで、下り坂に勢のついた俥の上に絕え入る樣なシォックを味ひながら魂は家に奔つた。そこらの谿谷には山鶯がおどけた聲で谷渡りをした。車夫が採つて吳れる山桃の實を食べながら齒にしみる樣な清水を掬つて飲んだ。

もつと何か懷かしい記憶が喚び起せさうな氣がして、その大きく開いた眼を上に向けてぱち／＼繁瞬いた。

ふと途の下から二人の婦人を連れた紳士の一行が登つて來た。素人とも思へたい束髮と銀杏返しの二人の女は無遠慮に眤々とこちらの二人を見た。

インバネスと帽子を脫いで左の手にかなぐり持つた、黒羽重紋付の羽織にセルの袴を着た男、オリーブの袴なんかつけて土地には不似合な大きな書生らしい女、恁麼對照が彼等

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の眼に如何映つたらう。

二人はそんなことには超然たるものだつた。少くも表面だけは。

『九洲の山もつまりませんわね。』

牧師の故郷は九州だつた。

『貴女九洲をご存じですか。そして九洲ほどの邊を?』

『門司から佐世保迄。』

『それぢやあなたは九州の平原を見ていらつしやるのだ。九州の山を見やうてのならもつと東南方でなくちや。』

彼女は自らの輕卒を愧ぢた。打消す樣に手を振つて、

『ごめんなさい〳〵、全くさうでございましたね、阿蘇五ケ莊なんて聞いてゐたくせに。』

『今の先貴女の仰有つた通りで實際よござんすよ。僕の實家なんか全く別世界にあるんですからなあ、少年期を暮したあの家が懷しい、そしてあの時代がなつかしい。かうなつちやもうだめですなあ。』

『まあ先生のお若いこと、お若いんだか年よりじみてらつしやるのか。』おなじ山國に育つたYさんには牧師のこの心持を惻するに容易だつた。

又一組の新夫婦らしい一行にも行き會つた。新妻の華美な紫矢飛白の着物、眞白に塗りたてた顔と艶々した心持赤毛の大丸髷にかけた緋鹿の子の手柄、是等のものが總てYさんの一寸眼につよい印象をおしつけた。かういふのを見る時彼女は一寸妬ましい感じが起ることがある。摺れ違ひに何とも知れぬ强烈な香水の匂が肌の溫氣と一しよになつてむつと顔へ來た。九洲產であるといふ牧師の言葉の中には、何處にもそのひどい――彼女は敢てひどいと言ふ――國訛りが見えなかつた。Yさんもその言語や聲の調子には可成注意する方だつた。そして彼の少年時代の生活などを思ひ遣るにつけても彼女自身の幼年期の追憶に塡つて行つた。

彼女の幼年時代のいたづらは格別だつた。殊にしばらく母の里に暮した年月は天にも地にも自由な山童女だつた。學校から歸ると本と石板の包を玄關から投げ込むと一目散に山に驅け登つて日暮迄は歸らなかつた。男の子に窘められもした。男の子と一しよになつて弱い子を窘めもした。木登りもした。

『ね先生、小さい時私のことを皆んなが男女房々々つて言ひましたの、あんまり亂暴だもんですから、えゝあの故里では女のことを女房つて言ひますの。それやねまだいろんな噴

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

き出しさうな方言がたくさんありますわ、けれどよくよく考へて見れば隨分典雅なのがございましてよ。「母様(かあさま)わしや女房じやもの、そのいなことようしませんわいな」つてな調子なの。』

『そいつあ面白いですね、すべてがその調子なんですか、餘程古典的(クラシック)じやありませんか。』

『さうでございますとも、大方お國言葉も忘れちまひましたけど、「兄様(あんさま)いなあ、早うござらんかいなあ。』などゝ言つてゐたものです。』

方言を一つ専門に研究したら隨分興味があらうと存じますね、私がかつて九州へ行つた時もやさしい平家の君達でも言ひさうなのを渚で釣する小河童から聞きましてよ。』

『へえそれはまた什麼んですか。』

『それはね。』と咳ばらひを一つして、

『……それはねつさ……きのふは海の靜やかにして、ほんによか釣れましたとでござりましたばつてん、にや！げふは波の荒うして一ちよ釣れませんとなまい。』辿々しい抑揚をつけて言つた。

『ハ、、、、うまい。實にうまいものですが一體それは九州の何處ですか。』

『佐世保から海上三十哩の一孤島。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『そして又何しにそんな處へいらしたんです？』

『悒々してたまりませんでしたから知人の家を訪ねて遊びにまゐりましたの』

『知人と仰つしやるのはその島に何かしてゐるんですか。』

『炭坑に勤めてたんでございます。その島には炭坑の外何もありません。周圍二里足らず、でも山家に育つた私などは島と申せば渺々たる海上に唯た一つぽつつり浮き出してゐる樣な氣がしてゐましたが實際の上では地圖に書いてない島が一ぱい見えてるんでございますのね。しかし惜しい事致しました、折角九洲くんだりまで渡りながら外をちつとも見ないでしまひました。』

と言つて一寸微笑したが有繋にK――前に一寸した挿話(エピソオド)に出た男――の勤め先を訪ねて行つたとは言はなかつた。』

『つひお話しが傍道へ反れましたけど』と云つて彼女は語りつゞけた。

『私共の訓陶せられた村の小學校の受持の先生はその山間の小都會の中學を三年で退校處分を受けた男で、お父さんから勘當のため僻村の小學校に助教として奉職させられたわけなんでございます。校長樣――私たちは始終校長樣々々つていつてました――は非常な好人物でしたので、安達先生――その先生の名なんですよ――は何時も授業なんかそつち

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のけで兒童を連れて山を荒し廻つたものでございます。安達先生は兒童をお山につれてつたら急に自由解放を宣言して、男の子には勝手に枝を拂はして刀や弓をつくらせる、土をならして土表をこしらへ相撲をとるのもある、木に登つて山梨や柹の實をゆすぶり落すと下では女の兒と先生がうけ役にたつたのでございます。』

田舍ではそんな點には寛大だつた。或時などは皆で山ふところの西瓜畑のを失敬してしまつた事もあつた。

安達先生は之をスパルタ式と呼んでゐた。Yさん達はスパルタ式とは山でおいしいものを食べて遊ぶことだと思つてゐた『先生スパルタ式に行こまいか』と言つたものだ。Yさんが始めて國を出た時平氣で此式をやつて誤解された事もあつた。

『非道い先生もあつたものですなあ、あなた方の時代でもそんなだつたんですかねえ、今でもお國はそうなんですか。』

『まさかねえ。今じや町から郡視學とか云ふ人が廻つて行くさうですからあんなこともしてられませんでせう。あの頃と見れば今は小學校の兒童でも何でも意久地が無くなつて勉强ばかりしたがりますのね。』

『それは未だしも或時は惩廢事もございましてよ。先生が草つ原に火をつけたのが折から

の風に吹き捲くられて漸々廣まつて行くばかり、皆が燒津ヶ原を氣取つて例の木劔で薙ぎ消さうとしたんですが、仕舞にはどうする事も出來なくなつて、先生が一張羅の黑木綿の紋付羽織を脫いではたき消しにかゝると、さあ日頃先生の德に懷いてる男女兒童十四五名はすは此時こそ一旦緩急ある場合と、我も／＼で袖無や羽織を脫いでやつとの事で消し止めました。此時の先生の御感は實に斜ならずで優渥なる感辭をさへ賜はりました。私達の光榮つたらありませんでしたわ。私なんか眞先に意氣揚々と家に歸つて大笑ひされちまひましたの、でも以ての外の御目玉を頂戴した子もあつたさうでござひます。彼麼先生に大切な小供を預けては置かれないと云つて村の父兄から苦情が持ち上りさうな時でも、肝腎な小供達がいやだ／＼あの先生が居なくなれば學校へ行かないと駄々つては揉み消したものでございます。』

Yさんは一寸間を惜いて小供らしく打燥いで語り續ける。

『その先生はね、夏なんか私達が居眠りしたり算術が出來なかつたりすると、靈を入れ代へてやると云つて大きな硝子瓶に水を一杯入れて來て頰ぺたに押しつけ／＼しましたの私なんか何度靈を入れ代へたかしれませんけど矢つ張りこんなにいけませんのよ。』

『その先生、安達先生とか言ひましたね、きつとクリスチヤンだつたでせうよ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『なあせ?』
『だつて水で靈魂を入れ代へるなんて。』
『あらさうですわねオホヽヽヽ。』
『アハヽヽヽ。』
恁麽他愛もない話にもYさんの身振や表情を一つも逃すまいと樣にして聞いて居た彼は時々揶揄ふ樣に彼女の顏をまともに見ては大きく搖りあげる樣に笑つた。

(五)

何時か二人は知らぬ間に山を降りてゐた。
牧師は一寸時計を出して見て、向ふの山麓から街へ出て歸りませうと言はるゝまゝに、Yさんは彼の後に從つた。
『Yさん、あなたこの先の蘆の浦へ行きましたか。』
『いゝえ、未あだ一度も。』
『海の趣がまるでちがひますよ。僕はこの邊ではあすこの海が一番好きです。よく半日がゝりて午後からなど遊びに行つて歸りは滊車で來ます。それからまだ音頭の瀨戶といふのもそんなに遠くはありません。「船頭可愛やおんごの瀨戶で二丈四尺の艪が撓ふ」と歌ふ

ではありませんか。』

『三十四反とかいくらとかの帆が唸る』とも申しませんの？』

二人は話しをしい〳〵可成廻り道をして畠の畦道を歩いて向ふの山麓の小逕に出た。

心持日が陰つてうすら寒い微風に青い麥の芽が震へた。道わきの枯草の間から遠い記憶に殘つてる樣な一種物懷かしい匂ひが騰つた。

Yさんは上目遣ひに半眼に開いて、默つてもつと懷しひ身震ひする程な何かの記憶を喚び生けやうとあせつた。

牧師は先に立つて輕い調子で口笛に小唄を吹いた。矢つ張り默つてYさんを振り向いて莞爾したその眼は、「何を那麽に考へ込んでるの？」と言つて居た。

『貴女、お疲れになりましたね。』

Yさんは寂しく笑み返した。

『いゝえ。』

『でも隨分休みつこなしに歩きましたから。僕も少し疲れて來ました。すぐ其處に休み場があります。一息ですから行つて憩みませう加勢しませうか。』と云つて手を差し延べる眞似をした。Yさんはふと嚴つい顏をした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山裾に沿ふ細い道に、これも細いがたつぷりと清らかな水の流れがつゞいた。ちよろちよろとかすかに唄ふ樣な甘いせゝらぎを立てた。

二人の間には又無言が續いた。

Yさんは牧師の後をぽと〳〵足音をさせながら、すい〳〵と丈高く枯れた草の穗を拔いて口に咬へてつみ切つては捨てた。

牧師は立止つた。

其處に二坪ばかりの、乾いた芝草の中に三つ四つの平べつたい石があつた。

『少し休みませう、あゝ憊れた。失敬。』

と云つて右の一つに腰を下した。

女は依然だまつて彼から指された石をよけて、彼から斜後ろの石に腰を下した。もそつと彼の橫顏を見る心算だつたが計畫が逸れた。牧師はくるりと向を變へて斜に女と對座した。』

『先程は何をしきりに考へて居らしたんですか。』

『あら先生こそ頻りに何かを考へになつてらしたじやございませんか。』

日は再び赫と照り出した、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此處は日當りがいゝので枯草の間から柔い草の芽が萠え出してゐた。

Yさんは男から眞正面に顏を見られてる樣な氣がして半ばてれ氣味に、まぶしく面に照りつける日光に手を翳して、片手を白い華奢な手袋を嵌めた儘、萠え出たばかりの蓬を摘みあげて、

『だつて、ほら可愛いゝじやございませんか、振分髮の故郷の野邊を想ひ出してたところなんでございます。』

牧師は了解したと樣に莞然幾度も肯頭いた。

じりじり照りつける春日に血の氣の多い彼女の全身は熱つて來た。兩肱を膝の上に立てゝ頸の下につつ支つてぽつと上氣した顏を心持俯向け加減にすると、眼を芝草の上に落して、身動きもしないでじつとして居た。

顏の半分だけが前髮の陰影でかつきりと暈取られた。ふくよかな耳朶の血が紅く透けて見えるのが此上なく美しいものの樣に男の眼に映つた。

成熟した女、血の氣の多い女、肉つきのいゝ女、恁うした强健な生々しい肉體を持つ若い女に對する羨しさ、寧ろ一種の妬ましさに近い感情をさへ交へて眤と眺めた。

艶々と張りのある頭髮を、思ひきつて盛りあげた樣な前髮の上から頸窩にかけて、ぐる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

〳〵と頭中一ぱいに髷が蜷局巻いて、無造作に澤山の護模ピンでとめられた。大きな角ピンが二三本突挿されてある外何の裝飾もなかつた。

油氣もなささうな揉上の毛を耳に狹かつて、一つまみほどの後れ毛がぞろりと頸筋にかゝつた、剃りつけもせぬ襟足の白さ。

女がかすかに呻いて身動ぎすると、その滑らかな肌の全面からぽつ〳〵と薔薇色の蒸氣が發散する樣だつた。袴を穿いた兩足を重ね合して依然頰杖をついたまゝ大きな掌で顏中を掩つた。』

『あ、、、。』牧師は半ば呻く樣に欠伸をすると、草原の熱氣に蒸されて眩々した。

彼は遂々其感情を爆露した。

『あなたは眞箇に潑剌としていらつしやる、我々は氣おされる樣だ。けれどもあなたとおはなしてるのは樂しい、實際强健な肉體美といふものは……。』

Yさんは慌てゝ手で彼の唇を掩ふ樣な身振をして遮つた。

『何卒々々それだけは御免なさい、私は那麼こと言はれるのが一番いやでございます。』

牧師は一寸まごついた。

『皆さんお人がいゝから、仰有り樣がないもんだから、よく御立派な御體格ですこと、な

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んておつしやられると私もう眞箇に悚とさせられちまひます。』

『貴女は那麼風におとりになるのですか、少くも私は眞面目で言つてるのです。』

『あらごめん遊ばせ。私……だつて……。』

一寸した齟齬で互につぎはが無くて異な沈默の裡に快い當惑を味はつた。が、

『健康な人は實際羨しいんですね。』

『あの先生はお弱くつてらつしやいますの?』

『えゝ、胃が……わるい。』

『オホヽヽヽ、胃がおわるい。アハヽヽ胃のわるい位何でもないじやございませんか。』

胃病などゝ聞くと彼女は先入的に、寧ろ何等の理由なしに滑稽を感ずるのであつた。

彼女が何氣なく一笑に附し去つた態度に幾分氣を惡くしたらしい牧師の表情を竊視ながら、

北氣で見れば一見彼は蒲柳の質らしかつた。何事にも落着いた寧ろ故意とらしい程落着いたその擧動、美しく分けた眞黑な頭髮、濃い眉と、短かくかり込んだ髯とは蒼みを帶びた彼の白面を引き立てた。その取りすました態度には或懷疑的な憂悶を語るものがあつた。

Yさんは殊によると恁麼人が基督を賣る反逆者なのかも知れないなどゝ思つて見た。けれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ども彼のことを僞善者とは言ひたく無かつた。又彼を惡む氣にも厭はしく感ずる氣にもなれなかつた。寧ろ或殘忍に近い好氣的な興味に驅られて、解し難い此の人の内部を突きつめて赤裸々にしないでは措かないと云ふ樣な欲求をさへ覺えた。そして益々横暴に所謂彼女の神に對する不信仰的態度を振舞つて突つかゝつて行つた。

牧師はさう云ふ問題に觸れることを避けて巧に話題を轉じた。

『深川さんも同情すべき人ですね。』

『え、あの、私の方の敎會のでございますか。』

『さうです、前途に屬望されて居た人ですがねえ、非常な理想家でしてね。』

『眞箇に彼の方お氣毒に存じます、此頃も暮からずつとおわるくつて寢んでらつしやるんでございますよ。』

『え、又ですか。いよ〳〵不可ませんね、惜しいことだ。』

『學校でだつて一番お若くつて非凡な御成績だつたんでございますつてね、彼の方のお說敎は青年達に隨分もてるんでございますよ、現代に觸れてるとか何とかつてね、そして隨分廣くいろんなものを御讀みになつてらつしやる御樣子ね。』

『學校に居る間は讀書家ではあつたが範圍の狹いものでした、其後病床の徒然に種々な多

面に讀むのでせう。』

深川を知る程の人は誰もが彼の溫厚な性質とその秀才とを愛しその病弱を悼み惜まぬものは無かつた。

大阪の神學校に學んだ彼は年若くして拔群の成績を以て榮譽ある卒業をすると間もなくこの天才をして天晴心靈界に、活躍せしめんため歐州に留學せしめる內定もあつた、しかるに世の諺に洩れず彼の宿痾は彼をして、廿八才の今日を空しく英才を懷いて一傳道師として甘んじしめなければならなかつた。

Yさんは彼の上にいつも美しいローマンスを書いた。彼の病は肺だつた每年の大部分を房州、茅ヶ崎と寂しく暮す人だつた。

牧師は更に今一つのローマンスを彼女に齎らした。

それは、前此の軍港に飯山といふ一人の靑年士官があつた、兵學校時代からの理想家で思索家で成績も拔群だつた。日露の役が開始されるや○○艦乘組となつて旅順封鎖に向つたが、一日彼はふと極端なトルストイズムに罹つて仕舞つた。戰爭は罪惡であるといふ最後の斷案に達すると、卽座にボートを下して艦を脫走した。

戰時脫走者は勿論死刑に當つて居るのである、彼は軍法會議に附せられた結果、思ひが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なくも死一等と言はせず、殆んど特別の恩典を以て、軍港に歸り兵站部の方面に轉ぜられた。

もと〳〵主義のためにこそ脱艦はしたれ氣慨ある軍人なので功績著しく平和後は海軍大尉に迄昇進したが遂に彼はこれにすら慊らなくなつて辭表を提出した。司令官は嗤つて相手にならなかつた。彼は辭表を司令官の前に投げ出すと家に歸り家妻を離別して飄然上京した。

暫くの間宮崎虎之助氏に寄寓したが、矢張思ふことあつて再び此地に舞戻つた。

今では兵學校所在地のとある門長屋に何するこしもなく、以前の同僚などの家を廻りあるいて詫しい日を送つて居る。

Yさんの好奇心は除ろに動いた。

『飯山さんは今後何かしだすかも知れませんわね。』

『さう、あの男なら何かやるかも知れませんよ、まだ若いんですからね。』

『何故又奥さんを離別なんかする必要があつたんでせう。』

『妻君といふのが少しも彼に對する解釋の無い女だつたんださうです。そして愛情の醒めた夫婦關係は之も罪惡だと云ふのです。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『此頃はよくそんな御都合のいゝ主義が流行りますのね。』

『まだ〳〵辭表提出當時父子會見の場が振つてるんですよ。武士道一徹の彼が父はその子息に割腹を迫つた、肯じなければ父が切腹するぞよと威嚇した。思想を異にする子息の答は恁うであつた。「貴父が自殺なさらうと云ふのは、貴父の御自由で私から何とも申し上げる譯にはまゐりません。が私は未だ自殺したくありませんから。」こんな調子で徹宵談判が交換されたが遂に双方自由意志を浸害しないと云ふ事に結着して引揚げる事になつた。

Yさんは、

『什麽人でせう。』などゝ言つて中肉中脊の毬栗頭を書いて居た。

『この縣下にはさういふ毛色の變つた主義の人があるんぢやございませんか。東京で眞人道とかいふ御宗旨を開いてる人もこゝの縣人だと聞いて居ります。』

『姫路あたりにも飯山君一派の人が居て、各地で互に連絡はつけてる樣ですね。』

此話題はこれで終つたが、四邊は何時の間にか黄昏近かつた。熱の弱くなつた太陽は淨土さやらん未だ見ぬ世を思はせる樣な黃金色に四圍の物皆を照し出した。

うすら寒い風に枯草の穗が淋しげにさわやいた。

Yさんの顏は心持蒼ざめて倦怠の色を表した。小首を傾げてひょろ〳〵長い枯草の陰影に眤

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と瞳を据えて耳をすましたほつと息をついてひよいゝと顔を上げると牧師の眼と出會した。互に寂しく微笑んだ。

次の瞬間に二人は言ひ合した樣に無言で起つて歸り路に就いた。折柄沖の方から絹を裂く樣な瀛笛の音が聞えた。工廠からは幾千人の職工等を一日の勞役から解放する樣な鈍な瀛笛の響を傳へた。市街の人家の空には淡い炊煙が漂ふた。牧師は其灰色の空を指していゝと言つた。其處には塒に歸る黑い小鳥が二つ三つ見えた。

Yさんは何處がいゝのだらうと思つた。そして振返つて後方の空を睇めた。それは淨化された神秘的な或月夜を想はせる樣な色だつた。先程牧師が美いと言つた山のアウトラインが依然くつきりと浮いて居た。

二人は細い道から町外れの養鷄所の前に出た。二人の間には種々な斷片的な話が交換された。蜜蜂研究者としてのマーテルリンクなども話題に上つた。

牧師が可成近頃の作に眼を通して居るらしい事をYさんは知つた。彼女は北方ロシアあたりのジメ〳〵した感じのする深酷な人情描寫も心を索くけれど、より以上南歐作家の官能的な芳烈な香のする筆致を好きだつた。主義とか理想とか言ふものにとらはれないでたゞ放膽に、百花爛熳の中に人を陶醉せしめるダヌンチオ其人を憧憬した。その傑作死の勝

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

利に言ひ及ぶと、夢中になつて「好きですわ、好きですわ」を繰り返した。

たそがれの河岸をよりそふて歩きながら牧師は言つた。

『Yさん、寂しき人々をお讀みになりましてすか。』

『いゝえ、まだでございます、劇でございましたね、著者は誰でございましたつけ。』

『ハウプトマン。非常に面白いと思ひました。』

『一度讀むで見たいとは思つて居りますが、筋は什麽でございますの？』

『各自別々の世界を持つて寂しく暮して行く人々を書いたものです。劇の主人公ヨハンネスといふ男がふと都から來た女學生にプラトニッククラブをするといふ筋なんです、其所へ此男の親友で書をかく男などが居て彼のために何かと好意を持つて奔走したりなんかするんですが、結局別々の世界の人なんだから、本當の理解のない好意で駄目なんです。ヨハンネスの妻君といふのが又平凡な女で、良人の思想や煩悶を解釋する事が出來ないのです。

其迄寂しくつてつまらなくつて、さん〴〵煩悶してゐた矢先自分を解釋して呉れる彼の女學生に會つてすつかり魂を打込んでしまふ。急に女學生と別れなくちやならないことになつて停車場迄見送つて行くのですか、別れられないで連れて歸つて來る。これぢや不可ないと言ふので、母親や例の書家がやつきとなつて引きはなして女學生を旅立たせてしま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふ。ヨハンネスは家の庭から見える靜かな月夜の湖に舟を浮べて永久に漕ぎ去つて了ふといふのです。

牧師は語り了つて寂しく笑つた。Yさんはその笑に或意味を直覺した。

『たいそうおもしろく承りました。ヨハンネスとやらはあまりセンチメンタルな男です事ね。まさかそんなのが代表的現代男ではございますまいでせうにね。』

『これは恐れ入りました。思ひ切つた行動をとればとられるものを、かと云つて斷然あきらめも出來ないで、所謂センチメンタリックな死に方をする。』

『夫れが眞かも知れませんわね。』

『解し樣によつては、つまり近頃は小説でも劇でも問題的のものばかりで、各自の解釋に任せるところが面白いのです。』

夕餉の仕度に忙しい場末の町は何となく騷しかつた。工廠からはき出された職工達は蜘蛛の子の樣に散ばつて、夕暮の市街を急いだ、薄ぎたない家の中に暗い電燈がついて、煮物の匂ひが疲れと空腹に過敏になつた嗅覺をはげしく唆つた。

西の空は歡樂に充ちたけふ一日を祝する樣に赫々と明日の日和を豫告した。

活動寫眞のフイルム中の人物の樣にあちこち往き來する人々は決してこの二人連れの男

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女を看遁さなかつた。露骨な冷評を試みるのもあつた。が最早二人はこんな事に頓着する程でなかつた。

××町のとある四角街まで來ると牧師は帽子をとつた。懷から先の「智慧と運命」を取り出して女に渡すと、「じや、また後刻。」と言つて會釋した。

Yさんは無言で受取つてお辭儀して二人は別れた。彼女は此處から直ぐボイドさんの家の方に向つて一目散に坂を驅け登つた。

六

此處で一言Yさんの宗敎的信仰の如何なるものであるかを述べて置かねばならぬ。

彼女とても或時代には可成本氣らしく神をもとめた事もあつた。けれどもそれは根據ある心からの要求ではなくて、人々は宗敎心がなければだめだなどゝ聞きかぢつたものだから、敎會へでも出入して比較的ハイカラなアーメンでも唱へて居るのが最もらしいといふ樣な幼稚な考からであつた。そしてクリスチャンは正直で親切で眞面目でいゝとも思つた。端なくもローリングさんの家に來てからは、全然信仰らしい心持さへ失くなつてしまつた。それは基督者が不正直で不眞面目で不親切だつたからではない。彼等は何處迄も正直で親切で眞面目らしかつた。それなら又何故彼女は信仰から脫し去つたか、外でもない幾分な

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りとも宗教的空氣の中に浸つて聖書を研究したり說敎を聽いたりした結果であつた。
『自分に信仰があると思つて慰安を得てる人はそれで結構なわけだわ、さうだ眞箇におめでたい事だわ。
聖書の中に雜然と織り込まれた月並道德や人情喜悲劇や眉唾物語りに他愛もない理屈を揑ねつけて眞面目腐つて振り廻してゐる邪氣無さ、
エホバの神樣つて人は皆から全能だの大能だのと無暗に擔ぎ上げられて、いゝ氣になつてその癖何一つ取柄のない、癇癪持で御機嫌上戸で、善男善女を唆せかす烟の樣なおぢさんなのよ。ナザレのイエスは御自分で烟の息子だと言ふんだからたまつたもんぢやないわ。でもこの人だけは親に似ぬ賢こい人だつた事は疑はない。人間の弱身にうまくつけこんで一足飛びに救世主になりすましちやつたお手際は。
私生兒といふものは馬鹿に出來ないもので天才偉人はよく其中から出るといふじやありませんか。
それはともかく、空に向つておとなりの小父さんとでも話しする樣にお祈りをしたり、讃美の頌だの讃美歌だのと、さんぐ〵齒の浮く樣な阿諂を並べてお救けを得やうとする乞食根性、懺悔などゝ言つて自分のことを出來るつたけ見窄らしく、一寸した事でも罪だ罪

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だと大袈裟なことを言つて――そのくせ惡いことをするくせに――殊勝らしく見せかける奴隷根性。」

又彼女には次の半面があることをも承知して置かなくちやならない。

それは彼女の小女時代は家庭の紛糾などから可成捻くれた性質があつたそれが近頃のYさんには大分其趣が異つて來た。これは彼女が始めて戀愛といふもの――勿論それは不健全なものであつたにもせよ――を經驗した時以來除々に進むで來つゝあるのだ「人間は笑つて暮せ、恨むな妬くな、誰れをでも可愛がつてやれ」處でトルストイの一句に隨喜したものだ「世界は愛――それは如何なる種類の又如何なる不完全な性質の愛でも――によつて淨化される。』

* * * * * * * * *

Yさんが歸り着くと湯に入る暇もなしに夕の食卓に着いた。

皿の上できい〳〵言はせて洋刀で雉子を切りながらボイドさんが言つた。

『Yさんが甲山へ行らしやると、直ぐ後からセニオさんが追つかけました。けれども見當りませんと言つて歸りました。』

『あら、何て惜しい事だつたんでせう、ご一所に行つて頂けると分つてゐたら、お待ちす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るのでございましたのに。』とは言つたが今日だけはセニオさんが一しよでなくて、いゝ仕合せだつたと思つた。

『でもね、M先生――牧師の名――が偶然いらしてましてね、隨分面白いお話しを承りましたの。』

食後は七時半の晩禱會までTの部屋で話し込んだ。

『M先生は讀書家で、思索家ですわね。』

『さうですとも。M先生は牧師などには稀な方ですよ。何にでも理解があつて、さらはれなくて。』これはNが言つた言葉だ。

ボイドさんがノックもしないで襖を開けて這入つて來た。この人は時々こんな失敬な事をする。主の安息日でもおかまひなしにせつせと手紙も書いて出した。大阪で日本語を勉强して居る時分、グッちやんと呼ばれて日本の處女達から餘り氣受がよくなかつたさうな。

丈高い彼女のスタイルは日本人であるYさん達の眼から見れば申分ないが、此人をどう見ても美人と言ふことは拒まなければならない。ごぎつい顏の輪廓、右の額に大きな赤痣があつて、うすい眉の眞與に白みがちの大きな眼がぎよろりと光つて居た。二三時間も日向に出しさいた玉蜀黍の毛の樣な赤毛を、妙に前の方へせり出してその上に赤坊の劵程な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

髷がちよこなんと載かつてゐた。

セニオさんは美しいと云ふよりも寧ろ愛くるしい方だつた。何處かまだ無邪氣なところがあつて、丸ぽちやの色白で、たつた去年の暮に始めて日本へ來たといふのに、なかく解りが早かつた。

あまり怜悧で解りが早すぎて、時々思ひきつたミステークをしては皆のお腹の皮を縒らした。

新聞などを拾ひ讀みして、「獨乙軍のがんやく(彈藥)が足れりません。」だの無暗に「お結構です」を連發した。

二ケ月ばかり以前に、ローリングさんや皆で宮島に遊びに行つた時など宿屋を立ちがけにけぶり出し(洋傘)が見えないと言つて女中達をまごつかせ、終ひには顎をはづさした。

NとTとはプール女學校の同窓生だつた。

Yさんは廿歳過ぎて女學校の同窓生とめぐりあふ事などは珍らしく、ことに同窓生が一つ釜の御飯を食べることなどは奇跡の樣にさへ思つて、全國に世間の廣いプール女學校出身者を羨しがつた。TとNの二人は實の姉妹も及ばぬ程親密だつた。

Nはプールを卒業すると直ぐ、更に三ケ年神戸のミッションスクールに學んだ。耶蘇敎

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の中でも至つてかたつくるしいＣＭＳの融通の利かぬ空氣の中に養成されて來たものとしてはＮなどは餘程開けた方だつた。何時も莞爾と愛嬌がよくて親切だつた。彼女の笑ひ顔を見るとＹさんは、鬼ケ島軍記の桃太郎のお媼さんを聯想させられた。

Ｔは美しくて愛らしかつたそして謙譲だつた。

從つて二人の間には何時も春風が吹いて、笑ひ暮した。

そこへ時々コックの小母さんがのぞいては賑やかした。そうして鰯と手料理のコロッケーだのプディングだのを皿に入れては持つて來て呉れるやさしさがあつた。でもどうかすると土佐者の本性を爆露して、おとなしいボーイ役の小松さんを盛に壓制した。

小母さんの顔はその性質の通り滑稽に出來てゐた。色が黒くつて口が大きくつて、まるで昔の鳥羽繪を見る樣だつた。

その晩ボイドさんの家からは六人揃つて教會の夜の禮拜に列席した。二人の西洋婦人と、二人の傳道婦と、小母さんＹと。

小松さんは午前の禮拜に出席したので晩は留守番だつた。

禮拜堂には既に人々が大分集まつて居た。青年達が眞面目な顔をして並んでゐた。牧師も異うどりすましてゐた。此處は工廠があるので晩の會には職工である青年達で賑かだつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

八時になつて總てあつまる迄Nさんが伴奏してセニオさんがタクトをとつて讃美歌の練習があつた。

Nさんは玉の樣な美い聲の所有者であつた。

軈て式は始められた。讃美歌を唱へて、日課を讀んで祈禱書といふ一定の型によつて牧師がいつも讀みなれた祈禱の文句をすら〳〵と誦し終つた。

此の晩の牧師の說敎をYさんは聞きはぐらして仕舞つた。何でも約翰傳何章かの一節を引照して話した樣だつた位しか覺えて居ない。

式が濟むとNはYさんに牧師夫人を紹介した。

Yさんと牧師夫人は雙方とも互に如才なく初對面の挨拶を取り交した。

暫くして夫人は心地がすぐれないと云つて先に歸つた。前の水曜日も今朝の禮拜にもそのため出席しなかつたのである。

牧師はYさんの前へ來て、

『先刻は失禮しました。』などゝ挨拶して居た。

『いえ私こそ、その節は又御本を有難うございました。』

『どう致しまして、先刻あなたのお話しの祉は何とか申しましたつけね。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『え、私の申し上げました社とは?』
『つひ飯山君――と聲を抵くして――の話から出た、縣下の人で東京に居る……。』
『あ、解りました。眞人道社と申します。』
『しんじん道! しんは眞ですね。じんは神ですか。』
『いゝえ、人でございます。』
『社長は何といふ人ですか。』
『あそこでは主唱とか言つてる樣でございます。たしか井伏太郎さんとか言ひましたつけ。よくは存じませんが自力修養を力説してるんじやないかと思ひます。新聞體の機關雜誌を發刊して無代配布するそうでございます。東京市内にも三十とか六十何ケ所の掲示板に貼付いたします。何とか子爵だの代議士夫人だのに歸依者が多いさうでございます。』
『東京はどの邊ですか。』などゝ言つて手帳に記したりなんかしてゐた。そこへ、一人の青年が來てYさんに向つて。
『一向存じあげませんで失禮致しました。私は土肥と申します、何分どうぞよろしく。』と切口上で述べた。
此青年はいつも日課の聖書を棒讀する役だつた。何處となく特徴のある目立つ人で、漆

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の様な髪を長くして生張面に分けて、蠟細工の様に蒼白く透きとほつた皮膚、紺飛白の綿入に對の書生羽織小倉の袴といふいでたちで青い血管の見える美しい足に寒中でも足袋をはかない。小供の時見た田舍芝居の壯士といふ見えだ。

その外に秋山さんといふ可愛らしい青年や、他に二三人の人とも新しく知遇になつた。Yさんは愛嬌たつぷりに夫々挨拶した。

そこでYさんは思つた。

『此の教會はどうもローリングさん達の教會とは趣が異ふ樣だ。男も女も天眞で和氣藹々たるものだ。本當のクリスチヤンは恁うなくちやならない。』

ローリングさんも隨分石部金吉流だか、若い傳道婦のHがお話にならない堅物で「私共未婚の女子は未婚の男子などゝ滅多に口を利くものではありません」といふ風な調子だつた。

「未婚の女子が未婚の男子と口を利いていけないのだつたら、既婚の男子と口を利くのは尙いけないといふ論理が成立たなくつて?」などゝ茶化したことなど思ひ出して、輕いイロニックを味つた。牧師は、

『Yさん明後日お歸りですか。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『いゝえ、明日でございます。奥様にどうぞよろしく。』

などゝ言つて皆にさよならをした。

歸りにはYさん達六人連に秋山さんと今一人の青年も一しよだつた。秋山さんは矢張り工廠につとめる青年で英語が稽古したい人で道々ボイドさんと辿々しい會話をした。セニオさんが又辿々しい日本語でYさんに、

『釜井さんが昨日迄にいらしやる筈でしたが、まだおたよりありません。あなた明日お歸りになりませんことが願ひます。も少し教へて下さい。ローリングさんに私からもお願ひすること、よろしいと思ひます。それならばお結構でございます。』

釜井さんといふのは、此度正式にセニオさんを助けるために大阪から來る筈の婦人だつた。

家に歸るとYさんはその旨葉書に書いてローリングさん宛で投函した。

Yさんは今暫く逗留することとなつた。

翌くる月曜日は傳道に從事してる人々の自由安息日だつた。とは言ふのゝTやNは一週間中の洗濯物やら其他何くれと多忙で、安息するどころではなかつた、それに此の日をあてこんで、娘達がNのところへ遊びに來ていつ迄も話し込んで歸らなかつたりした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Yさんは午前中に襦袢や足袋を洗濯屋に出したり、ハンカチを洗濯したりした。午後からはセニオさんと連れ立つて山に登つた。セニオさんはYさんのために大なもみぢの木のステツキを借して呉れた。

『山登りをする時のために、ボイドさんとおくり合ひました、お互に、お互樣に、Is that light?』

などゝ言つた

Yさんが駒下駄を突かけてどんなとこでも巧に登り下りするのをセニオさんが感心がつた。

山の頂に佇立して軍港を瞰下した時、いつもながら船をかぞへたりボイドさんの家をさがしたりした。

『セニオさんは日光や箱根、まだいらつしやらないでせう？　輕井澤もね、恁麼可厭な山でなくてもつといゝ景色のところが澤山にありますよ。でも今年の夏は何處へでもいらつしやられますわね。』

セニオさんは物好きに小さな苔や羊歯だの蔓草の枯れたのなんかを手當り次第しよ引いて歸つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Yさんもお交際に二つ三つ摘んだか途中でくちや〳〵にして捨てちまつた。

其日も過ぎて火曜日の晩YさんはTの手料理で三人親しく食卓を圍んだ時、NがTさんに、

『明日こそは午後から島の水曜學校に行きますから、ご一しよにいらつしやいませんか。』

『是非どうぞ、恰度午後からでしたら私も暇でよございます。』

水曜學校といふのは海軍兵學校の敎官である信者の官舍内で開かれるので、其人に賴めば校内をも觀られるのだと此頃からNに聞いてゐたのだ。Yさんは突然思ひ出した樣に、

『あの島に飯山さんといふ人があるさうですわね。』

『えゝ、誰からおきゝになつて？』

『M先生からうかゞひましたの。隨分興味を有たされちまひましたのさ、行つたら見る事は出來ないかしら。』

『あんな方なんかへは行きませんですよ。』

『さりやさうでせうとも、けれど偶然見る事が出來るかも知れないじやありませんか。M先生も近々中に是非訪ねるんだつて仰有つてましてよ。』

『じやあ先生を御誘ひしていらつしやいな、私が學校をしてるうちにお二人で飯山さんを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

御訪ねなすつたらいゝでせう。』

『それもさうですね、ではNさんあなた明日午前に先生に御會ひになつたら、御言傳して下さいな。』

『明日はTさんも私も相にくちと遠い方面へ出かけますから、先生にお目にかゝられませんでせう。御自分でおさそひにいらつしやいな、近いんですよ、町を敎へてあげますから。』

『それほどにするにもあたりませんわ、それに午前中は何處へも出られませんもの。』

Yさんは其晩十時頃次の樣な葉書を投函した。明日の日附で。

前畧ご免下さいまし。

昨日〇〇へ歸るつもりでございましたが、釜井さんが見えませんので今少し停まる事になりました。

今日午後からNさんと御一しよに××島へまゐります、先生も例の飯山さんを御訪ねになりませんか、奥様の御加減がおよろし樣でしたら。

水曜日の朝食の後Nが

『Yさん折角御たのしみのところ、S先生——水曜學校に借す家の主人——からお葉書で奥さんが御病氣なさうで今日のお斷りがまゐりました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

恁麼事はよくあるものでYさんは早呑込みして、S先生といふのをM先生ととりちがへてしまつた。

『M先生奴奥樣の御病氣でお許しが出ないんだな。それとも先生急に怖け出したのかも知れないわ。あれだから基督者はお話しにならない。』

朝の家族祈禱會の後でボイドさんが「今日はM先生の奥さんも手傳に來るから恤兵部の仕事を片附けちまひませう。」と言つてゐた。Yさんは出しぬかれた氣がしていやだつた。

『御病氣で旦那樣の手のはなせない奥樣が仕事の手傳に出かけて來る。』

それでYさんはNと二人で出かけるつもりで仕度してゐた。

牧師の奥さんは漸う晝頃來た、そしてNさんに小言を言つて居た。

『お誘ひ下すつたもんですから、良人は早晝を食べてもう出かけましたよ。やめになつたんならさうと一寸知らせて下さればいゝじやありませんか。』

Yさんは始めて今朝の感違ひに氣附いて、自分で自分のおど／＼しさを嗤つた。

Nさんはそんな事とは知らず、Yさんの出した葉書の事も知らないので頓珍漢な顔をした。

『先生はいらつしやる／＼と言ひながら、つひぞいらしつた事がありませんから、別にお

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斷りなぞにあがる必要はないと思ひました。』

Yさんは一寸當惑した。

奥さんは意地惡くNを責めた。Yさんは憤として、でも表面は穩和に、

『私がおさそひの葉書を出しといて、御斷りに行けなかつたからわるかつたんでございます。セニオさんのお稽古で手が引けなかつたものでございますから。』

奥さんは急に、

『いゝえどういたしまして、どうせ行かねばならぬとは以前から申して居たのでございますから』などゝ反さぬ樣に、「Yさん是非ちとお遊びにいらつしやいまし」奥さんは標準語を用つてゐたけれどYさんはその可成ひどひ發音によつて北陸の產だなど見當をつけた。

その晩Yさんも皆と一所に祈禱會に出席した。會が濟むでから牧師の傍へ行つて逡巡しながら。

『今朝程はとんだ失禮いたしました。お誘ひの葉書を出すと間もなくS氏から斷り狀がまゐりましたが、御承知の通り午前中は手がひけないものでございますから』

『いゝえどう致しまして。』とYさんの顏を覗く樣に、

『あれから私は手紙を書きました。多分今晩か明朝お手に入りませう。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

七

翌朝の第一便でローリングさんからの手紙と一しよに牧師の手紙が達いた。

Yさんは快い悸きを心臓に感じながら、先づ牧師の手紙を開封した。それは次の様に書いてあつた。

滊車が停車場ですれ違つて、呀と思ふ間に十年の知己に邂り逅つて直ぐに通り過ぎてしまつた様な、何となく物足りなく、しかも力の充實した緊張した半日を、去る廿四日の午後に送つた事を感謝して居ります。

人間が全く自己を解して呉れる、自己と殆んど同一世界に捿んでゐる人に遭遇するといふ事は寧望み難い事ではないでせうか。私は私の生活に何等の理解も同情もない周圍の妻や職業上の知己に圍まれてゐたら貴重の時を過ごして行く事がたまらなくたえられなくなつちまひました。

恁麼生活の裡にも自然を仲保者として、ふと自己を解して呉れる人が忽然現はれ出でゝ、驚異の中に牽引せしめる人生は意味あるものと云はなければなりますまい。自然を熱愛する點、思想に親しむ點、而して出世間的色採を帶びて居る點と云ひ、君は私の生活中に最も親密に感せしめられました。

私の希望は今少しく深く貴女を知り、又私をも知つて戴きたいといふ處にあります。自然はお互の上に愛と同情とを濺いで呉れませうが、悲しい哉社界は、二人の性を異にするといふ理由の下に迫害するに定つてゐます。

今朝はおさそひを受けて大よろこびで船場へ行つて二船ばかり待ちましたが、お見えになりませんので失望して歸りました。さぞや××島の自然が怨むで待つて居るでせう。××島はほんとに景色のいゝところでございますよ、何時かご一しよに彼の、半聖半俗の飯山君を訪ねやうではありませんか。

お歸りにならなかつたと承つてよろこんで居ります、是非お遊びにいらつしやいまし。

Yさんは讀み終つて微笑した。

『到頭解釋が出來たわ、どうも此間のヨハンネスが可怪しいと思つてた。』

一人で行つたのかと思つてたのに、二船も待つて空しく引返したといふ事には今迄氣がつかなかつた、彼としてはありさうな事で氣の毒な、すまない氣がした。

午後から市中の軍人ホームといふに基督主義の婦人矯風會があつたのでYさんも出席した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

軍人ホームといふ面白い名の此家は獨身軍人のための基督教主義な家庭的寄宿舍だつた此家を切つてまわしてて居るのは時田さんといふ中年増の女傑だ。

Yさんははじめに彼女を女中かしらと思つた。

頭が小ちやくて、おまけに髮の毛のある部分が少なくて團栗がしやつぽ冠つてる樣だ。惡くてきぱきしてる處は何處までも低級なハウスキーパーだ。

會は月並でこれといふべき程の事はなかつた。

新年第一回の會なので十五六人の奥さんたちが集まつてゐた。Nさんが賴まれてマルタとマリア姉妹の例を引いて至極御最もなお說敎をした。

時田さんは例のきび〳〵した調子で最後の總括をした。

此席上で後がけながら次の事が時田さんの口から言渡された。

（一）是迄は一時半開會といふのに何時もずる〳〵になつたから、今度からは正味懸値なしの二時開會としますから、そのおつもりで。

（二）家事の都合では遲刻せねばならぬ場合もあるから、その時は邪魔にならぬ樣適宜の席に着く事、この意味で開會中お辭儀の交換などは禁物のこと。

會の歸途Tは牧師の宅に用事があつて立寄つた、YさんはTに言傳を賴むだ、簡單に、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『今朝ほどはお手紙を有難う、私からも書きます』

Yさんは歸つて湯からあがると、次の手紙を書いた。

今朝程の御手紙たしかに拜見いたしましたお約束を違へました事は昨晩申上たやうな次第で、つひ誠に申譯のない事を致しました、惡しからず御容し下さまし、そのかはりよい折がございましたらご一緒に××島へ參りませう、飯山さんにも少からず興味を持たされて居ります、午後からならば前以てお知らせ下されば、何時だつて都合がつきませうとおもひます。

しかし其れ迄に一つ先生にお考へ置を願ひたい事がございます。それは追々これから私の申上る事でおわかりになれませう。

仰せの通り此間は偶然お互に少くも或程度迄、相識るの機會を得て、寧ろ私の方がより多く豫想だもしなかつた多くのものを得ましたことを、深く感謝して居る次第でございます。

只今の先生の御手紙を讀んで又いろ／＼な事を考へさゝれました、私自身にとつても私が此の土地にまゐつた事は多方面に可成意味深いものでした、偶然に得たあの半日から、もしも先生がご自分で仰有るだけの程度迄お感じになつたものとすれば、先日伺つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たお話の事など思ひ合して、餘程深く考へて見なくちやならないことだとおもひます。

偶然な機會！　しかし機會ほど恐るべき力を以て人を支配するものはありますまい。あの時先生のおはなし下すつた話、私の感じそして其後只今頂いた御手紙などゝ綜合して來れば、其處に押迫つて來る何等か運命の不可抗力を感じずには居られません。

拜借した『智慧と運命』三分の一ばかり、しかも素讀しただけですが著者の思想殊に運命に關する見解の餘りに偉大なのに殆んど驚嘆し辟易いたして居ります。あれで見れば運命なんて高をくくつてれば超越出來るわけなんですけれどね、あれ一冊讀み終つたら私も可成賢くなれませうと思ひます。

お言の如く物見高い世間にかゝつたら、とても逃れつこはありません、殊に性を超越してなどゝ何時まで白をきつてゐられるものでもありません、少くも私自身はそうだと思ひます、大膽に社界に反抗するか、潔く斷念するか、なまじひ社界などに色眼鏡をかけられるつてことは、お互の見識に關はりますからね、恁麼ものでございませう私の考は間違つて居りますか。

ま、も一度私もよく考へて見ませう、「智慧と運命」でも讀むで、

先生もよくお考へ置下さひまし、

此迄私は可成大膽にやつて退けて來ました、と申すのは私といふものに對し全く理解のない、從つて眞の同情をもとめる事の出來ない家庭の骨肉から、又周圍の羈絆から脱して來た事でございます、私の此の外面上に表れた行爲だけを見てすべてを律する人があるならばそれはお轉婆の危險思想でせう、本當に周圍の情實や何かに眩まされないで眞面目に自分の道を行く事が、不眞面で浮薄なんでございますからね、勿論危險なことではございます。でも意味が異ひます。

先生は大分私を買ひかぶつて下すつた樣ですけど、たゝいて見れば案外空虚なのに失望遊ばすでせう。

極端に屈從を迫る舊道德家庭に閉塞されてゐて、やつと自由の身となつてから一年未滿、それも自活の困難などのために望みの萬分の一も充されません、少くも私の讀書をはじめたのはこの一年間でございます、永年堰かれ〳〵た反動として欝結して居た水が堤を破ぶつたと同じことで、以來の私の讀書欲乃至、すべて何物をも知らんとする欲望は可成盛なものでございます。

比較的平和な生活の保證ある家庭から急に見も知らぬ社界へ我れと我身を放り出した私は、直ちに私目がけて群り起つて來るあらゆる事件に對し、殆んど驚異を以て、しか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も好奇的な眼に一々印象されました、勝氣な反抗心の強い私は嘗て失望する事などは知りません。

けれども東京の生活はいまだ幼く、且つあまりに純な私には不安と危險の伴ふのを感じさせました、私は私自身を健全に育てゝ行く上には、暫くこの不純な都會の困難と誘惑からはなれて、靜かな時と所をたもつべく只今の境遇を撰ばねばなりませんでした、おはづかしいことですが信仰の見地などはありません、惡く言ばへ享樂的な方で、自身では可成徹底してるつもりで、自らの前途にも多少の期待を有しないわけでもありません、最後の日に結局それが虛無で自惚にすぎなかつたと解れば、それで滿足なのでございます、やる處まではやつて見なければね、こんな點から、智慧と運命にはある共鳴點を期待して毎晩時間を割いて讀むのをたのみにいたして居りますどうぞもうしばらく拜借させといて下さいまし。

理解のない周圍からの壓迫は成程隨分苦しいものでございます、先生の樣な超達してあるべき職にいらしても矢つ張り、その樣な煩ひがおありなさいますのね、けれども那麼こと仰有るのは不可いでせう、殊に永年苦樂——たとへそれが外面的に過ぎないにもせよ——を共にした奥樣を假にも今更那麼態度でごらんになつてはいけません。弱年輩

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がこんな事申して小癪なと思召したら、どうか勘辨遊ばしまし、つひ摑みどころのない事を申上ましたが、これが私の只今の心持なんでございますから。

自分でも何だか不決斷なやうな或矛盾を感じて居ります。

末筆ながらどうぞ奥様によろしく

廿七日夜　　Y

M先生

翌朝は教會で臨時幼兒洗禮式があつた。

Yさんは昨夜書いて抽出へ入れて置いた手紙を懐にして出席した。

○○からスコットさんといふ宣教師が來て居た。幼兒はみな滿一歳にならぬものばかり女兒二人に男兒二人、一人、女兒は若い技師夫婦の初兒だつた。母に似た愛くるしいその子は上から下迄色彩々の縮緬にくるまつて皆からチヤホヤされた。

今一人の女の子は小松さんのだつた。木綿物ぞろひのこの子は拳ほどしかない頭に、毛がうすくて見るからに可憐らしかつた。

男の兒の一人はこれも羽二重にくるまつて乳母膝にすや／＼と眠つてゐた。技師の女兒

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とこの子はちやほやされるのに、小松さんのと今一人の男の子は見向かれもしなかつた。

Yさんは恁麽場合にもはしたなき世の人々の情なさに反感が起きた、彼女は小松さん達に肩身のせまい思ひをさせたくない樣な氣がして、隅の方に抱かれて居る憐れな小さいものを賑かにあやした。

式は始まつた。幼兒の洗禮の前に鐵道院に勤めてゐるといふ美少年の洗禮志願式があつた。

牧師夫人ボイドさんセニオさんTさんNさんは夫々、幼兒達の名親に立つた。

例の牧師の眞面目に殊勝らしくごりすました顏を見るとYさんは暴戾な快さを覺えた。まだ年若で獨身のスコツトさんは隨分な羞恥家で、よく若い傳道達のうはさにのぼつた。

泣きさうな、眞赤に顏を熱らして機械的に何やらぶつ〳〵唱へながら、手に水を掬つては幼兒の額に振りかけたり十字を書いたりした。何も知らない未だ植物的生活を出ない是等の小さいものに、親の慈悲なればこそ此の樣にして、始めつから神に捧げられてしまふのだ。Yさんは輕い侮辱を感じた。

式の後でYさんは用意した手紙を牧師に手渡した。彼がわざとらしく何氣なくおちつき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を裝つて受取つたのが、Yさんには見えいすておかしかつた。

彼女はNに從いて奥さんと一緒に始めて牧師の家に立寄つた。Nの用事は小松さんの寄留屆の事に就いて牧師に相談するにあつた。

『敎會で伺はうとおもひましたが、妾が何と申上ても先生は今日に限つて何かしら妙にそは〳〵してらして、ちつとも身を容れてお聞きになりませんでした。』

と何氣なく言つたNの言葉にYさんは何も彼もが餘りに能く解釋せられて、彼女の異性に對する惡戯氣が愈々成功しつゝあるのを竊によろこんだ。

書齋兼體の小淸洒した八疊の座敷に通されると、

最初にYさんの眼にとまつたのは机の傍に美しい近代文學書のぎつしりつまつた硝子張りの書棚だつた違棚の上の書架には金文字入りの大きな何とかいふ宗敎の本が可成並んで居た。『先生は美しい御本をたくさん集めてゐらつしやいますね』などゝ言つてYさんは座り込んだ。

床の間に可長大きな景色の油畫がかゝつて、龜の置物の傍に鉢物の白い枝垂梅が咲いてゐた。違棚の下段の亂れ箱の上に大板の大きさの老人の寫眞が立てられた。此外に二三の額面と、机の上に可愛らしい靑磁の花瓶に水仙が挿してあるのと、孔雀の羽の挿した靑銅

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の筆立に象嵌の硯箱がある位室内の裝飾は淡白なものだつた。

牧師はなか〳〵歸宅しなかつた。Nは赤い毛糸など出して編物を始めた。Yさんは火鉢に凭れてお茶を呑みながら今頃牧師がどんな心持であの手紙を繰り返して居るだらうなどゝ考へてゐた。

奥さんはくだらない話をしながら、餅など燒いて二人にすゝめた。小犬は賢くておまわりでもちん〳〵でもおあづけでも何でもした。

暫くして牧師は歸宅した。玄關の靴脫でYが來て居る事を知つた。そして例の態度で座敷へ入つて來た。

Yさんは小犬を抱いたなり、粟餅を頰張りかけてお辭儀した。奥さんは良人に、

『近頃はNさんが、すつかりお見限りだと言つてあなたが恨むでいらつしやるつて申してた處なんですよ。』

と笑ひかけたが牧師はすましで返事もしなかつた。

Yさんは態と憑麽ことをする牧師の心持ちを氣の毒にもおかしくも思つた。

『ねえあなたもおかちんを一つ召上れな』と言はれて、

『うゝん、俺はいらないさ、胃にわるいから。』Yさんは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『先生は胃がおよわいんですから、私が代つてどつさり平げますから御心配なく。』と奥さんの方を向いて。

牧師は又何かとYさんに文學談など持ちかけたが、彼女は小供らしく燥いで居てあまり取り合はなかつた。

其處にあつた讀賣新聞など引張り出して廣げたが、そんなものさへ落ちついて讀めなかつた。牧師は「圖書館裡のストリンドベルヒ」が面白いから讀んでごらんなさい』と云つた。

甘つたるい餡の一ぱい入つた餅に、更に外からも餡をつけて甘さうによく食べるYさんを、牧師は呆然睇視めて居て彼女から拒まれた。

『オホヽヽ、そんなに視てらしちや可厭ですよ。先生はもうびつくらしてらつしやるのよ。妾つて隨分よく食べるわね。』

Nさんは用事があるからお暇すると云つた。奥さんは『それぢやYさんだけ御飯でも食べて遊んでらつしやい』と言つた。Yさんは慾張りつ子の様に食べさしの餅を頰張りながら『妾もご一緒に歸りたいから、これをみんな食べちまふまで待つてゝね。』と云つてお道化た風に眼をつぶつて大急ぎで嚥み込んだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『那麼に慌てなくてももつと遊んでいつたつていゝじやありませんか。よし〳〵Yさんはお餅好ですね。晩には搗きたてのを持たしてあげますよ』牧師は笑ひながらこんな事を言つて玄關までおくつた。奥さんは一緒に其邊まで買物に出かけた。

此頃は市の到る處で寒餅搗の音がした、通りから入つた閑所などでは往來に蒸釜や臼などを据えて盛にやつて居た。Nさんのところでは、牧師の家や信者のところから搗きたてのをもつさり貰つた。

此の二三日來、Yさんはそろ〳〵自分の仕事が可厭になり出して居た。斯ういふ仕事には、彼女の性質は實際厭きつぽかつた。

午前にする二時間半ほどのセニオさんのお稽古が、たまらない程永い氣持がして、欠伸を嚙み殺しては何度時計を見るか知れない。

セニオさんの稽古といふのは規定の英文和譯と、和文英譯と、和文の聖書研究――其時は馬太傳だつた――と、習字其外に某氏の日用學校敎授法とだつた。

すばしつこいセニオさんはすぐ筆の骨子を呑み込んで仲々甘いものだつた。自分で重ね丸などつけた。

越えて一日、土曜日の中食の時訪問に出て歸つて來たNさんは、M先生からことづかりましたと云つて封書とエレンケイの『婦人の道德』とコロダイプ版のダンヌンチオの肖像書とをYさんに渡した、確か牧師の家の座敷にもコロム版のダヌンチオが懸つて居た樣だつた。

封書の表に添書して『この本を一度讀んで下さい、婦人の道德として最も至當なものと思はれますから』とあつた。

Yさんはおちついて封筒の下部を鋏で切つて手紙を拔き出したが、行を追ふて讀み行くに從つて彼女の顏面には種々の解き難い表情の雲が過ぎ行くのが見えた。手紙を持つた兩手に、かすかな震へさへ見られた。

彼女は手紙を封筒におさめて何氣なく皆と一緒に食卓に就いたが、食が進まなかつた。皿のものも殘した。極めて快活にするのが自分ながら空虛なわざとらしいものに思はれた。

『Yさん今日は一向召し食らないじやありませんか。どうかなすつたんですか。』

『えゝ、何だか二三日運動しなかつたものですから。御飯の後でお湯にでも浴つて來たら晴々するでせう。』

Yさんは錢湯に行つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

手紙の内容は恁うである。

『承つて見れば貴女も、ほんとにお悼ましいお身の上ですね、けれどもさうした卑屈な沒我的因襲道德の羈絆から脫れて、自己の確信に突進するといふ事は、何と美しいことではありますまいか、私は少なくもあなたのそうした大膽な試を理解し得られると信じて居ります。

私はあなたを買ひ被つてなど居りません、仰せの如く私共は徹底しなくちやなりません、私は私の曖昧な不決斷な過去を葬つて、眞摯な赤裸々な新生涯を開拓したいと思ひます。

けれども多年恩義ある敎會を汚すに忍びません。潔く現職を辭し妻を離別して、他に職を求めあなたを滿足させられないまでも、一定の生活の保證を得て、而して後あなたが御承知下さるならば、あなたを迎へいれるに何の躊躇がありませう、さうした順序をとつても決して遲くはなからうと思ひます。

それとも殘るは次の二方法です。

即このまゝ世間に反抗して、何處までも奮鬪的に二人の世界を開拓して行くか、殘る一つはもつと美しい世界です、純な美の極致のみ行く世界です、即イッポリイタとジオ

ルジオの様に、永遠何の怨もない空漠の世界に沒すること即情死これあるのみです。

私は過去三十二年の生涯をすべてあなたの前に捧げます、私としてあなたを知つた事が何程私の靈に或力を及ぼされたかを知つて居ります。所詮私は恁うなつたのです、恁うならざるを得なかつたのです。

私があなたを知らなかつたら、永久に恁麽眼覺、恁麽苦しい愛着と喜悅の眼覺は來なかつたでせう。否何方道私は悶え死すべく運命づけられたのでせう。マーテルリンクはあゝ言つてゐますけれど、

運命の不可抗力！　思ふだに悚とする。

私は決心しました、私の過去三十二年をあなたの前に提供する、あなたは何れを撰んで呉れますか。

打合せしたき事あり、本日午後一時半迄に蘆の浦街道にお待ちします。

蘆浦道は東行電車を××終點で降り、右方の通りを眞直にずん〳〵歩いて下さい。

繰り返し言ふ、呉れ〴〵も吾人をして結果を急がしむる勿れ。

土曜日　　　　　　M

Y孃

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『先生は隨分勝手な獨斷をなさる方だわ、妾の夢にも知らないことぢやありませんか、さうだわ夢にも考へない事だわ。でもこの調子では先生よつぽど興奮して、どうかなすつてらつしやるらしいから、兎も角會つて氣を落ちつけてあげなくちや。それに什麼顏してるか見たい事も見たしさ。』

彼女は恁うは思ひながら又心の奧の方で今會ひに行くのが却つて、彼の心に灸き付ける事になりはすまいかとも考へた、イッポリイタの樣に蘆の浦へでも引張り込まれちやおしまひだ、と言つた樣な皐肉な不安の口實をも作つて見た。兎も角行かう、行つて見ればわかる。面白い事があるに定つてる。

『三十二、三十二年の過去をあなたの前に捧げるですつて、そんなにお若いのかしら。うそだわ、牧師さんなんかと言へば小父さんか父さんとしか思はれやしないのに。』

Yさんは湯から上つて髮など捲き直して、わざと落着いた態度でNに、

『あんまり好いお天氣だから、蘆の浦へ行つてまゐります、ボイドさんでもお聞きになつたらさう仰有つて下さいまし。』と言ひ置いて、ぷいと家を出た。

時計を見ると一時半を大分廻つて居た。門を出ると可成急な長い坂を、一目散に驅け下りて東行電車に飛び乘つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

沈丁花——五明倭文子

一、

榮は四時がなると暇をつげて吉見の家を出た。

大久保から電車に乘つて牛込で降りた時は、大分黃昏て街には電燈や瓦斯が灯され、緣日商人は神樂坂の兩側にもふ店を並べて居た。夕暮の風は冷たく鬢面を吹いて、忙しない人の行交、車の走る音にも、歲暮らしい氣が漂つて居る。榮は急ぎ足に家に歸つて、茶の間へ這入ると、伯母は長火鉢の前に坐つて、今客に用ゐたらしい茶道具を拭いて居た。

「オヤおかへりなさい、大分ゆつくりでしたね、今迄吉見さんにかえ？」

と。何時になく不機嫌な顏をして恁ふ云つたが、手は其まゝ休めずに、

「今日秀三さんが來なすつたの、丁度一時頃だつたらうか、遂今迄待つてゝしたがねお前のかへりが遲いので——それに今晚五時から何やらあるとかで、ほんの今かへつた許りなの、」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

榮の腦にはふと秀三の顏が浮んだ、そして例のやうにむら〳〵と厭な感が胸に湧いたので、それを打ち消すために只默つて居た。

伯母はやうやく拭き終つた茶道具を脊後の茶簞笥へ丁寧に納つて、長い羅苧の煙管を取上げて煙草をつめた。

「丁度學校も休暇になつたし夕御飯でもたべてと止めたけれども無理にかへつて仕舞ゐなすつたが、いつも變らない淡白したいゝ氣前だね、那麽ものに係らないやうな風でもお前のことなんぞ、なにやかや案じて居るのだから榮さんも余り吾儘を出さないやうにしなきやいけませんよ」

榮はまたかと云つたやうな面をしてそこにかけてある柱暦に眼をそらした。伯母はそんな態度には頓着なく、

「ほんにそれからこのお休みには鄕里へかへるかどうするかつて、云つてゐしたよ」

「自分はかへるつて云つてましたの？」

榮は初めて恁ふ云つて伯母の艶々した額の邊りを視た。

「明後日邊りの夜行でかへり度いと思ふけれども若しお前もかへるのなら一緒に行かうつて、それもきゝに來なすつたのらしい――」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「不　と……」

と。云ひかけて榮は眉根をひそめたが、又伯母に管々しく嗜められるのが厭さに其まゝ默つて仕舞つた。

東京へ出て五年の間榮は此伯母の家に預けられていた。伯母と云ふのは榮の母の姉で、もう五十の坂をこえて居るが、いつも艶々しい丸髷に結つて、娘のやうに厚く塗つた白い頸を、扱衣紋にしている容子などは、未だ四十女の年増盛りとすら見えない程である。伯父にあたる人は二三年前に死んで子供は一人もなかつた。

榮はこの伯母を余り好かなかつた。それは互に氣質の合はなかつた故でもあつたが、更に榮の嫌ひな秀三をいたく可愛つて、なにかと他人にまで其吹聽をするやうなことがあるからでもあつた、がそれでも花見とか芝居見とか云ふ時は恁ふした氣の若い伯母と連れだつて行くことが多かつた。

榮は夕飯を濟ますと、間もなく頭痛がすると云つて臥床に入つた。内も外も森として、隣家の若い細君が今夜も例のやうに琴を復習つている、榮はその遠くから響いて來るやうな覺束ない音をきゝ乍らうと〳〵昏睡に陷つた。

翌朝は庭にある大きな椒の樹に鳥が集つて、騷がしく鳴きたてる頃迄榮は眠つていた。

「お手紙が參りました――」

と、云つた聲におこされて、はつと眼を覺ませば、婢は今、白い大きな洋封の手紙と、二つに折つて帶封をした雜誌とを隅の机の上に乘せて靜かに襖を閉めるところであつた。

榮は膚さわりのいゝ八丈の褞袍を跳ね除け、起上つて机の前へたつた時、拙いペンの上書を見て、すぐに手紙は秀三からのであることを知つた。雜誌の方には差出人の名がなかつたので、これも大方手紙と一所に出たのであろうと想つた。榮は例のやうに寢着の上に羽織を着て、湯殿へ行つて朝の支度をした。今日は前髮を割つてフーワリとした輕い束髮に結んだ。柔かい湯の中に冷え切つた肌を浸すと、急に溫かい血液が身體中に流れ出すやうに感じて、白い小指の尖にも赤い線がほの透いて見られる。磨きぬいた顏に溶水計りをあつさりと塗つて、茶の間へ來て見ると、伯母はもふ他處行ゆきの裝飾をして、例のたて膝に長煙管で忙しなく〱スパ〱やつていた。

「今朝はおさきへ濟ましたよ、私は今日松山さんへお歲暮ながら遊びに行つて來ますからね、留守をお願ひ……」

榮はいつもながら若氣の失せない伯母の姿を今更のやうに視て、

「之から濱まで被入るんですか、そしていつお歸り?」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、云つて長火鉢の前へ伯母と向ひ合ひに坐つた。
「遅くも夕方にはかへつて來るが、榮さんは又お出かけ」
伯母は紫紺鹽瀬の煙草入を帶の間に狹んで起上り乍ら訊いたが、榮の「エー……」と、愍圖付いて居るのにもどかしそうな眼付をして、
「風邪をひゐて居るのだから余り出ないがいゝよ——ではお願ひ、——」
と、云つてさつさと出て行つて了つた。
淋しく冬枯れた植込の梢に凋んで垂れ下つた木の葉を透して、僅かに弱い冬の陽が障子に射すと、餌を漁る樣な小島の影も淡くそこに映つたが、すぐにそれも消えた。榮は奇麗に片付いた部屋の机に倚つて、秀三からの手紙を讀んだ。それは榮にとつてはいつものやうに何んの興味も惹かなかつた。
雜誌は「濤聲」であつた。榮は奇異の念に驅られて、破つた帶封の宛名をよく見ると、思ひがけなくも吉見の手であつた。新年號の婦人雜誌を添えて昨夜出したのである。雜誌を前に擴げたまゝ、緋縮緬の肘突に肘を置いて、ぼんやりと奇麗に透ける中玻璃の蔭から庭を瞰た。
瓢箪形の池には白く氷がはつて、そこにも松葉や桐の葉が黃ばんで落ちて居た。池の廻

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りの灰色に枯れた芝生には、アッセーラの鉢が吊信夫と一所に轉がつて居る。そのわきには毒々しい眞紅の椿の花が今にも落ちそうに一輪咲いていた。抑えつけられるやうな、生温い氣分が部屋をおそつたので、榮は手をのばして障子を一枚あけると、外にはいつの間にか冬らしい細かい雨が降りそゝゐで居た。

榮は初めて盈に逢つた時のことをふと想ひ出した。それは冬の名殘りを思はせるやうな寒い寂しい雨が、校庭の芝生の上にふりそゝいだ三月の末であつた。學校には卒業式から同窓會やら成績品の展覽會で華やかな若ゐ人々が集つては浮々した日が續いた。最後の文藝會の日であつた。榮は案內係りで講堂の入口に居ると、そこへ榮の保證人で父の友人である山下夫婦と一緒に來たのが吉見盈であつた。其時榮は又山下から以前自分の友達であつた女が盈の細君になるのだと、云ふことも聞いたのである。それから二月許り經つた後の或る日、榮が學校からかへつて來ると、奇麗な繪はがきが届いていた、盈は根津の方へ移つて、それを知らして寄越したのであつた。

榮はその次ぎの日曜日に盈を訪ねて見た。池の端から左へ折れて少し坂を昇つて行つた處に盈の下宿はあつた。シモータ家のやうな構えのさつぱりした格子戸の前にたつて、案內を請ふと、年增の內儀らしいのが出て來て丁寧に盈の居る離れを敎しえてくれた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四疊半と二疊の天井の低い茶室向きに出來た離れには、華奢な水障子を嵌めて、床のわきに丸窓を啓けたのも榮は氣に適つて居た。庭は荒れたまゝでわざと手入れをしないように竹や青桐、それから山吹、紫陽花などの咲き亂れて居たのが眼につく、盈は榮の好き相な本を大きな書棚から選り出しては幾冊も見せた、新刊の雜誌や小說、物語のやうなものでも盈のところへゆけば數多く見られると云ふことが榮は何よりも嬉しかつた。折々は「オフエリヤ」〃「チエリエツト」の話をきいている中に陽の暮れて仕舞つたこともある。そう云ふ時、盈は屹度かへりを電車通り邊迄で送つて來た。

月は水の面を照して白く、岸の樹は細長い條をやさしく垂れ下げて暗いかげを見せている涼しい夏の涼であつた。榮は其夜も盈に送られて池の端を歩いた。心地よい風が薄ものゝ袂にも裾にも吹いて、夕化粧した頰の肉に冷たく引き締るやうに覺えた。水に臨んだ家々の灯は明く靜かな池に映つた。榮とは少し離れて俯向きがちに歩いてゆく盈の、硬い暑くるしそうな單衣をきて、足袋も履かずに新らしいパナマの帽子をかぶつたのが、いかにも不調和で滑稽ぢみて居た。切通しの方へ曲る角で榮が別辭をつげると、盈は月光りに榮の顏を透し見るやうにして、

「お郷里へおかへりの前に、も一度是非お遊びに被入い！　屹度お待ちしてますから……」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、云つて、いきなり緊と榮の手を握つたが、何故か其聲は平常になく顫へていた。榮はそれきり郷里へ歸つて了つた。

夏も過ぎて十月の初め、盆は豫定の通り郷里で銚子と結婚して、すぐに今の所へ世帶を持つたのであつたが、榮は遂に其頃まで盆を訪ねなかつた。盆からは銚子の名で再々遊びに來て呉れと云ふ端書や手紙が來た。それからもふ一年余りを暮した今日、恁うして過ぎ去つたことを考へると、榮は盆に對する自分の態度が、初じめは丁度師弟の禮を守つていたやうに賢く、次ぎにはやゝ侮蔑の眼を以つて、銚子が來てからは往復も繁くなつて互に打ちとけて、自然に親しい温情の湧いて來たことを感じた。

裏通りの垣根の向側を煮豆やの鈴がせわしなく通ると靜かな室に午砲が高く響き渡つた。

二、

山下の家には多方面の男女が大勢集つた。それはそれから十日程經つてからである。其中には榮も盆もいたが、如才ない山下は初見の人々を代る〳〵手輕に紹介した。八疊と六疊のつゞゐた座敷は間の襖を取り拂つて、客は床の方から順に並んだ。膳は下婢や手傳ひの若い娘などによつて運ばれ、芳醇な灘の香氣は煙草の烟りと雜つて部屋にたて罩めた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

婦人客は榮の他に四五人居たが、澁い色の友禪お召の重ねに、櫻と雪を淡く散らした伽子色縮緬の羽織を着て、緋の麻の葉が振りや袖口になまめかしい榮の姿は、殊に眼立つて美しかつた。人々の視線は多く榮の廻りに注がれた。俯向き加減に坐つて、余り盃も手にせずに居た盈は、其武骨な面にかけた鐵緣の近眼鏡の中から折々榮を窃視るやうにした。

座は次第に乘勢んで盃は互に獻酬され、高く笑ふ聲や話す聲は深く入り亂れて如何にも春らしい陶陽をした氣分は四邊に漲つた。

榮は飯を濟ますと其まゝ下の八疊へ來た。そこにはもふ盈が先きに來て、厚い銘仙の蒲團をかけた炬燵にあたつて、ぼつねんとしていた。

隅におかれた黒柿の茶簞笥の上の置時計は八時に間もないところを針していた。

「オヤもう八時ですのね、私、お暇致しますわ」

と、榮は獨言ちて起上つた。

「もふおかへり？　ぢやそこいら迄お送りしませう」

と、盈も起つた。

山下や妻君のとめるのを辭して二人は一緒に其門を出た。

外は風もなくて珍らしく暖かな晩であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蒼い空には細い月が冴え返つて、星もあかく輝いていた。二人は暗いそこの四つ角を出ると電車にも乘らずに傳通院の前から安藤坂の方へ歩いた。

未だ宵ながら早や戸を閉した家、飾窓に流行の新柄の女の眼を引く呉服屋も、甘そうな西洋菓子を並べたパンやも、店頭のタングステンに照されて好ましい水菓子やの店も、人足は稀に、正月らしい氣分は靜寂な中にも滿ちていた。

「いゝ月ですね、穩和な晩だ……」

盈はインバの襟をたてゝ、駒下駄を引き摺るやうに緩つくりした歩調で、榮と肩もすれ〴〵に歩いた。

榮はパオンショールの前を搔き合せて、

「銑子さんは今日どうして被入いませんでしたの?」

「少しからだの具合が惡いとか云つてました、」

盈は素氣なく云つて

「安川さんはお年取りになぜ鄕里へ歸らなかつたんです」

と、訊き返した。

「別に理由もありませんの、家へ歸つても以前と異つてつまりませんから……」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

盈はニッコリ笑つて、

「お母さんが待つて被入つたでせうにね」

榮はいつも休暇には屹度郷里へ歸つた。それはたゞ母親を慰めるため許りだつたのである。この冬休暇にも榮は兩親の膝もとで樂しく新年を迎え度いと、思つたのであつたけれども、秀三が先きへ歸つたので、遂郷里へは長い手紙を出したまゝ自分は伯母の許で廿の春を迎えたのであるが、それは矢張り母親に對して最も濟まぬことのやうに思はれてならなかつた。父親と不和な冷たい家庭の中に、只孤り誰に心情の苦痛を打明けると云ふものさへなくて、いつも不安な、あわたゞしい日許りを送つている母親を、榮は云ひやうもなく氣の毒に思つていたのである。盈にかつてそれを語つた時、盈は同情の深い顔色をして、もつと〳〵悲慘な運命の手に虐げられた自分の母親の話をして榮を慰めたこともあつた。榮は妙に今夜はそんなこと迄思ひ合せて、盈が何となく慕はしく、なつかしい人のやうに思ひなされた。

「牌子(さい)を投げられて終つた者は不幸ですのね」

と、榮はしんみりとした調子で云つて、盈の面を視上げた、そして飽まで我意を通す父親の、自分の意に反して秀三を養子に迎えたことを思ひ出した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

盈は榮の顏を見て、少し考へるやうな風をしたが、

「投げられた牌子が不幸な者であつたら、それは拾ひ戻さなくつちやなりませんね」

と、落ち付かないやうな調子で云つた。

「そんなことが出來ませうか、赤とか紫とかつて運命のもふ定つた者が……」

盈はピッタリ榮に寄り添つて其柔かい温かな手を握り乍ら、

「それがお互に幸福になるために、鬪はなければならない義務ちやありませんか」

と、興奮したやうに云つて、紅潮した顏を榮の白い頰に近く寄せた。

赤い灯の一つ寒くにじんで見える江戸川縁を、向ふへ流してゆく新内の音締が哀れに細く後を引いて、二人は云ひ知れぬ哀愁に思を罩めた、薄い隔ての一重の紙をつき破つて、互に相觸れんとする刹那は迫つた。

雲もなく風もなく月の光りは川添ひの寂しい片側町に重なり合つた二つの影を細く長く地上に書いた。

「いつか中もよく送つて戴きましたわね、根津に被入つた時分……」

榮は腕を盈に持たれたまゝ、恁ふ云つて嬌媚を帶びた眼を向けたが、

「あの離れはどうなつたでせう？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「多分、あのまゝにまだあるかも知れませんよ」
「今度は私が借りませうか」
「お好きでしたね、あの離れが……」
「エエ……」
人の來るまゝに相互に少し離れて歩いた。
やがて飯田橋には、電車の響、夕刊賣、辻待ちの車夫のよぶ聲など、物憂い騷音をきゝ乍ら二人は、バーのかゞかゞしい電燈の下を通り拔け、交番のある角を左へ折れて賑やかな神樂坂へ出た。新らしい仕着せをきた、男女や店の若者達が、嬉々としてつく追羽根は道を歩いて居る人々に危くぶつかりそうであつた。
盈はこのまゝ榮と一緒に何處迄も〳〵歩いてみたいやうな氣がした。
「此處でおわかれしませう」
榮は毘沙門の暗い横町を這入り乍ら恁ふ云つて盈の手を握つた。

三、

締め切つた書齋で二の迫つた創作の原稿紙を前におき乍らも、盈は何かしら取りとめもない空想に耽つて居ることが多かつた。そうした時にはよく勝手の方で、ものを吐くやう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な氣配がして、何んとも云へない不快な氣持ちになるのであつた。それでも折々心配しては醫者に診せることを勸めたが銑子は肯かなかつた。

銑子は全く娘時代には想つても見なかつた生活の壓迫が日に〳〵襲つて不如意な經濟の遣繰りには青春の血も肉も全く枯渇して了ふほどに感じた。勝手もとに立つて月末に、米や酒やの驅取りにする辨解は、貧苦に馴れない銑子にとつて堪えられないほど厭であつた。世の進歩とは沒交涉のやうな山國の僻地に生れ、そこの素封の娘として固陋な因襲によつて育てられた身には、なんの生活の道さへ持たないことを泌々と思ふやうになつた。

そして自分が親の意に背いてまでも、未だ見ぬ戀にあこがれて、嫁いで來たのを恨めしくも思つた。

二月程前から身體に萠した變調も自分に丈は大方解つていたが、盈にさへまだそれとは明かさなかつた。

でなくてさへ苦しい中を、この上煩はしい者が一人殖えて、どうしてやつて行かれやう！銑子は悅びよりも先づ悲しみのさきたつ、みじめな今の境遇をつく〴〵考へては、徒らに神經をたかぶらせて、只わけもなく泣きじやくつてみたりした。

家へ歸つても銑子が、いつも重そうな厭な顏許りしていて、はなしかけても錄々返事さ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

へしないので、盈は陽の中は大抵社の方で暮した。

社の方に宛てゝ榮からの手紙は度々届いた。盈からも騒々しい編輯室の人眼のしげい中にも、ペンの走書を榮へ出したが、それは榮から來るのよりも遙かに度數が多かつた。

平日より早く社を退いた盈は市ヶ谷附近に來た。そこで榮と逢ふ約束をしたのである。盈は樂しいいろいろな期待を胸に書きながら、狹い停車場の待合室に這入つて用もない汽車の時間表をしらべたりして待つていたが、榮はなか／＼に來なかつた。

盈はやゝ焦々し初めたので、見附の方へ出てそこの土手に昇つて、古い松の樹の間にある一筋道を歩いた。

土手の芝原にも日當りのいゝ處には、青々さした新芽のいろが萠えていた、濠を隔てゝ平坦な道に往來する電車の響も、樹木の多い市ヶ谷の町々も、そこからは趣深く瞰下されて、西の彼方に沈む陽の影は華やかにかもめ浮く水の面に映ひ、風は冷たくさわ／＼と松の梢に夕暮れの寂しさを傳へた。

榮戀しの念にみち／＼た盈は、再び停車場の構内へ來て四邊を見廻した時、

「オイ、吉見君！」

と、突然、後から肩を輕く叩かれて、盈は振り返つて見ると、末山がニコ／＼して立つて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いた。

「オヽ君か、何處へ？」

「柏木迄ー　君は？」

盈は一寸當惑したやうな面色をしたが、

「來る人があるのでね、先刻から待つてるんだが、來そうもないから歸ろうかと思つてるところだ！」

「ぢやア一緒にかへり給へな」

遂に待ちぼーけを食はされた腹立たしさに、いつそ歸つて了ふと思つた盈も、恁ふして思ひがけない末山に出遇して一緒に歸ろうと云はれてみれば、このまゝ歸つて了ふのも何やら心殘りがしたが、思ひ切つて丁度來合した中野行きの電車に乘つた。

二人は運轉手臺に近い方の椅子へ駢んでかけた。

「どうだね、社の方は近頃？」

「相變らずさ！」

「余り相變らずでもなさそうぢやないか」

「なぜ？」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

盈は眞面目な顔をしてけゞんそうに訊いた。

「なぜもないもんだ、余り脱線しちや困るよ」

末山は大きく笑つて盈の膝を叩いた。ボギー式の車は常になく空いて、車掌臺の方にわずか五六人の乘客が居た許りであつた。

「そら、知らぬは何とかやらつてね、大分評判だよ」

と、云つて、盈の橫顏を覗き、

「併し君、眞實かい？」

盈は苦しそうな笑を口許に浮べて、

「一體君は誰にそんなこと訊いたんだえ？」

「君の社の者からもきいたし、それから……」

と、云ひかけて、ふと默つて了つた、が盈にすゝんできかふともせず、向側の窓から、移りゆく外の景色に眼を抛げて居た。

「固より僕は眞僞は知らんさ、知らんけれども滿更火のない所からは烟もたゝんちやないか、ね若しいくらでも種ありとすりや君もちつとは自覺し給へよ」

「何を自覺するんだい？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、無愛想に云つたが、直ぐに調子を變へて、
「是れでも相當に自覺を持つてる積りなんだがね、何の自覺もないものには出來んことだよ」
「ハ、、、、君は偉いよ、」
末山は笑ひながらポケットから敷島を一本出して火を點け、
「醉へる者はいつか醒めるが、醒めた時の寂しさが思ひやられる」
と、獨言のやうに云つて、紫の煙を吹いた。
電車はいつの間にか代々木に停ると、吳服橋方面から來た乘客がドヤ〳〵這入つて來た。軈がて大久保で末山と別れ、電車を降りた盈はわざと廻り道をして自家へ歸つた。建付けの惡い格子戶を荒々しく啓けて玄關へ立つと、珍らしくも銑子の高く笑ふ顏が聞えた。
「今日は貴方、安川さんが被入つてほんとうに面白かつたんですよ、私もう氣が晴々しましたわ」
銑子は全く近頃にない浮々した調子になつて居た盈は。そこに、やゝ上氣した顏に仇氣ない笑をたゝえて座つている榮を驚きの眼でザロ〳〵視た、榮はそれを避けるやうにしてわざとらしく、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「土曜日でも恁んなにおかへりがお遲いんですの？」
と、銑子に訊いた。
「エヽ、いつでも隨分遲いんですけれども、今日は之でも早い方よ、きつと何だわ、榮さんが被入つたせいかも知れないわね」
銑子は盈をみておもしろさうに笑つた、が盈は不快な顏をして何とも云はなかつた、夕飯の時も盈は多く默つて濟ました、銑子がちよい〳〵勝手へ去つて行つた合間にも、盈は深い堪えがたいやうな眼を榮に向けたが、榮は濟ました面をして居た。
ざつと臺處の後片附を終つた銑子は、羽織を着替えると、盈の外套の衣懐から錢入を出して若干かを赤い自分の銀貨入れに移し乍ら、
「私今、買物にゆきますから……傳手に伯母さんの處へ電話をかけて來ませうね」
「いゝえ、私はお暇するんですわ、貴女外へ被入るなら御一緒にゆきませう」
「あら、先刻のお約束よ、今更そんなこと云つて狡猾だわ」
と、銑子は起つた榮の手を持つて留め乍ら訴えるやうに盈を見た。
盈は何か不安に襲はれるやうな氣がして默つていた。銑子は無理往生に榮を座らせると、
「他家と異つて自家ですもの……ですから私一寸お斷りしておきますわ、いゝえ、私でな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

くつちや駄目よ」

恁う云つて銑子は一人で出て行つた。

榮は茶の間の入口に立つて、銑子の日和下駄の音が小刻みにだん〳〵遠くなつてゆくのを聞いていた。

盈は長火鉢の縁へ頰杖をついて、榮の膝の下から流れる茶と黒と藍との大縞に裏羽色の裾がしつとりと白い足袋の尖を見せて居るのを、焦れ氣味に沈と見て居たが、

「榮さん、今日はどうしたんです說明を訊きませう?」

と、云つて面を上げた。

榮は默つて其顏を盈の方に向けた、そして人を魅せずにはおかないやうな美しい濕いをもつた眼を、クルクルさせて盈の傍へ來て座つた、盈は其肩から首へ手を廻して抱くやうにした、

サラ〳〵した洗髮の鬢が柔かく盈の頰に觸れて、艶めかしい香が漂つた、戀する女にのみもてる眸子の輝き、甘い密のやうな囁きを想はせるポッチリした薄桃色の唇、盈はたゞ戀に解けゆく情緒の亂れを其眼の裏に見せていた。

間もなく銑子は歸つて來たので、榮ははじかれたやうに起ち上つて座敷の書棚の前へ行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて座つた。

盈は疲れたペンを置いて時計を見ると二時を少し過ぎていた。座椅子に倚つて復たざつと原稿に眼を通してから、それをアルバムに挾み大きく欠伸をして起上がつた。机の側には床が敷いてあつた。盈は襯衣を脱いで寢着にきかえると、床の上に立つたまゝ暫く考へていた。

森として靜かな夜半に、時を刻むセコンドの音はたゞ徒に盈の胸を掻き亂して行つた。靜かに勝手へ行つて盈は貧乏德利から冷たい酒を、小さな湯呑に一杯飮んだ、あつさりとした水分の酒は心地よく胸に流れて、重苦しい中にほんのりと醉ひが發した。盈はまた一杯を傾けゝると、其まゝ六疊の居間へ這入つた。そこには銚子と榮が枕を並べてよく眠つていた。

紫地に紅なし友禪の肩當てを取つた夜具の、黑いビロードの襟から、榮は少しのり出して、やゝ肌かつた胸許の緋の長襦袢に映ゆる白い肌の、乳の邊りにふつくりと膨れ上つて居るのが見えていた。

盈は充血した眼を据えて榮の枕許に座つた。烈しい情熱が一ぱいになつて、やがて發作

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

的に苦しい胸をゑぐられて悶えた。躍る心を押し鎮めて、盈は微かに震ふ唇を榮の上に持つて行つたが、スャ〳〵と可愛らしい寢呼吸が聞えて、安らかに眠つている其面には何の閃きさへ認められなかつた。盈はソット夜具に手を懸けてゆすぶつた時、銚子が小さな呻吟をたてゝ寢返りした。

盈は刹那に良心の閃きを感じて、靜かに自分の臥床に入ると、興奮し切つた腦を蒲團の中に埋めて堅く眼を閉ぢた。

四、

唱へば美しい詩となり、書けば歡樂の夢ともなる淨き戀は、若き榮の憧憬である。許嫁の秀三の身も心も野生のまゝなる醜さは、驕れる榮の心を充すところでない。さりとて盈は余り貧弱な、而も妻帶の男である。が常に詩歌の壁を懷に抱いて、人の微妙な感情にふれんとする優しみがあつた。

けれども榮は盈を戀していたのではなかつた。互に手と手と相觸れ、頰と頰と近付いて、ちぎり立つ血潮のやぶれ迸らんとする刹那に到つても榮は巧にそれを避けた。例へば春の野に燃ゆる炎陽を追ふて戯るゝ胡蝶の如く、榮の憧憬は戀の幻影であつた。結合せし怖しい毒蛇の紫の舌に甜められるやうなそれではなかつたのである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

榮は盈の家に宿つてから二三日して復た盈からの手紙を受取つた。それには次ぎの土曜日から日曜日にかけて、江の島邊りの遠出に、のたり〳〵とした春の海を眺め乍ら君と心置ない一日を暮し、或るは其頃月も滿ちて、濱邊を逍遙の白い眞砂に數々の樂しい物語りに一宵を過ごしても見度い、是非〳〵御都合おつけ下すつて御出を願ふ、待合せの時間、場所は君の御指圖にお任せする……」と、云ふのであつた。

榮は之を繰り返して讀んだが、云ひしれぬ不安を感じると共に、盈に對してかつて覺えなかつた嫌厭の情が萠して、遂此頃迄の自分が寧ろ蔑まれるのであつた。

「なぜ那麼ことをしたろう！」

左樣思つて、榮は口惜しさが限りなく胸に湧いた。そして一時間も經つた後、机に向つて、靜かに紙を延べ筆を手にして、

「私はかつて、性を異にする人は淸き交りも續けがたいと云ことをきいて、私はそれを打消した一人でした、そして其友を貴方に依つて求めやうとした私は、誰よりも〳〵愚かな女であつたと、今悟ることが出來ました、併し貴方と私との交情はたゞに沈丁花の床しい香を嗅いだのに過ぎなかつたことを私はせめてもの、幸福と存じます、未だお若ゐお健かな貴方は貴方の奧樣と共に其御光明ある御將來を亨樂なさることを祈つて、私は貴方にお

別れをいたします、」

榮は慥ふかき終ると、又怩と考へ乍らそれを幅の狹い淡紅色の狀袋に入れて、裏には鮮やかに自分の姓名を認めた。そして榮は蒼白い顏をして、わざと平氣を裝ふやうに落付いて部屋を出た。（完）　四月十五日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

水神の祟——岡田ゆき

それは私がたしか十五ばかりの時であつた。私の長唄の師匠の娘が、發狂して、其の里方である師匠の家へ、北海道の嫁入さきから歸つて來た。彼女は名をお貞さんと云つて、年頃は二十を、三つか、四つ位越したかと思はれる。容貌は人並みよりは美しかつた。只温順しく、坐つて居る時には何んとなく、人を魅する力があつた。然し發狂者特有の上瘂つた彼女の目は、毎日稽古に行く、私の心をぴやりと、冷く戦すのが例であつた。

私が今、書かうとしてゐる事は、師匠が目に涙を浮べて、私に話した、お貞さんが發狂した顚末である。

お貞さんは師匠の實の娘ではないのである。師匠の父は江戸幕末の御邸出入の人入家業であつたが、世が公儀に改ると共に、家業を止めてしまつた。師匠は兩親を自分の手で喰べさせねばならない羽目になつたので、幼少から習ひ覺えた藝で、人にも嫁さず、細いながらも、世渡りが出來るやうになつたのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其の後餘程たつてから、世話する者があつて、生れたばかりの、お貞さんを藁の上から、貰ひ受けて、やはり名取の師匠にする心算で育てたのであつた。彼女は由緒ある人の胤だと云ふ事は師匠も聞いたのであるが、我が娘として、育てるからには、なまじ實の親など知らない方が、眞に情がうつつて、好いだらうと云ふので、其の事に就いては、師匠も強いて、聞かなかつたし、世話した者も別に話しもしなかつたのである。

師匠の望み通り、お貞さんは師匠を眞の母親とばかり思ひこんで、何の不足も感じず、日に、月に、育つて行つた。けれども只一つ困つた事には、お貞さんは何より三味線がきらひであつた。師匠がいくら骨を折つて敎へやうとしても、まるで覺えないのであつた。そんなら覺えが惡いのかと思へば、學校の成績はいつも良いのである。

種々してみても、やはり三味線には、親しまないので、師匠もあぐねてしまひ、弟子の中から性質の良い子を跡繼にする心で、お貞さんが十八の暮れに、世話をする人があるを幸ひ、北海道旭川の豪農の一人息子へ嫁にやつたのである。東京で結婚して間もなく、お貞さんは、良人に連れられて、北海道へ渡つたのである。

良人は兩親の家を離れて、村から三里程奧へ入つた土地を、開くため、他の開墾者と共に、お貞さんも、ともども、移住したのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

土地馴れないお貞さんは、果しなく起伏した、山脈と沈默のみ續けてゐる森林に取卷かれた山家に寂しく日を暮しながら、東京の母の事ばかり思ひ浮べて居た。殊に東京を立つ時、停車場迄來て呉れた母が、プラットホームを出て行く汽車を眺めながら、ひきしまつた顔をして、去つて行く娘の影が遠くなる迄立つて居た樣子は、まるでお貞さんの瞼の裏に、刻みつけられた樣に、なか〳〵忘れられないのである。

さうかうしてゐる内に、一年二年は、瞬く間に過ぎて、其の土地へ來てから三年目のある日、それは秋も漸く更けて、お貞さんの家を取り卷いて、落葉が絕間なく音をたてゝ居る時であつた。いつになく、良人は朝飯をしまふと直ぐに、お貞さんには、素氣ない樣子をして、ふらりと馬に乘つて、家を出た。彼女は何事にも、思ひ切つた事の出來ない、内氣な性質であるから、あまり出先きを、聞きたゞす樣な事はしなかつた。その日も多分兩親の處へでも行つた事位に思つて居たが、其夜は終に歸らなかつた。夜中にも、もしや歸りはせぬかしらと、思ふ心が彼女をまんぢりともさせなかつた。

朝早く良人の下に働いてゐる男が、

「お早ふ御座居ます。旦那は未だ御眠みですかな。昨日は御留守の樣だつたが。」

と云ふのを聞いて、お貞さんは、まるで自分が罪でも犯して居るかの樣に、胸がどきりと

したのである。

「旦那は今朝居ないのよ。」

「へえ、昨日から、御歸りがないとみますね。女房さん、昨夜は、たつた、お一人でしたな。もしもの事があつたら大變だに、是れからも、そんな時には誰れか宿りに來させなきや駄目ですよ。』

寢不足と泣き明したので、眞赤になつた、お貞さんの目を見て、同情の念にそゝられながら、其の男は、森の中に入つて行つた。朝の日ざしを背に受けて、木がくれに行く、彼を、お貞さんは何と云ふ事なしに、椽に立つて、いつ迄も見送つて居たのである。

其の日、丁度村から、食料品を、運搬する男が來たので、良人が兩親の家へ行つて居るか、とお貞さんが問ふと。

「暫く來なかつたから、仕事の都合で、二人とも來ては呉れないか、と云ふお母さんの御傳言が、今朝此處へ來る時、あつた位だから、昨日いらつしつた御樣子はありませんね。』と云ふのであつた。

お貞さんは、此の男の答をきいて、谷へ落ちかゝつた人が、しつかと、蔓草につかまると、その草の根が、づるづるとぬけてしまつた樣な思ひがして、思はず吐息をらしたので

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ある。

良人が家をあけた事など、兩親には決して話して呉れるなと、口止めをして、其の男を歸してしまつた、お貞さんは、ペタリと其處に坐つて、物思ひに沈んだのであつた。

「こんな時に、赤兒でも居たら、眞實にどんなによいかしれないのに。」

と思つた時、涙は止めどなく、頰を流れるのであつた。其の夜も良人は歸らなかつた。お貞さんは寂しく獨りで明した。

三日目の夕方、お貞さんは、待ちあぐねて、ぼんやり家を出て、村へ行く街道に立つて、ぢつと向ふを眺めて居る時、茜色の夕陽を全身に浴びて、人通りのない、其の一本道を、ひた走りに馬を走らして來る男があつた、

もしや良人ではないかしら、と思つて、少し近くなるのを待つて、尙もよく見ると、それはたしかに良人で、華美な衣服を著飾つた、若い女を胸の所に抱く樣にして、馬に同乘してゐるのである。お貞さんは、娜婀めかしい女の蹴出が風にひらひらして居るのを見て、ぎよつとした、けれど何喰はぬ顏に涙を呑んで一散に走つて、彼等よりさきに、歸つて來た。

やがて良人も門口へ歸り着いたらしく、人に媚びる樣な滑らかな聲で女が、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ねえ、貴方があんまり早く走らせるから、たまらなかつたわ。四邊の木がね、まるで飛び跳る樣で、目がぐら〳〵してよ。」

と云つてるのが、お貞さんに、聞こえると、彼女は、はぢかれた樣に、つと立つて、上口に行つた。そして、障子を開けると、戶外から入つて來た二人と、ばつたり顏を合した。

女は、默したまゝ、腰をかゞめて會釋した。お貞さんは、ちよつと具合の惡い思ひをしながら、上口に膝をついて、

「お歸りなさい。」

と小さな聲で云つた。良人は、お貞さんには無言で、女に向ひ、

「さあ、此處が僕の家なんだよ。お上り、誰れも居やあしない。」

と云ひながら、手を取らないばかりにして、座敷へ上げたのであつた。

この女はお澄と云つて、此の頃此の土地へ渡つて來た旅藝者である。何處で生れ、何處で生れ何處で育つたかさへ、わからない渡り者で、噓か眞實か知らないが、支那滿州邊迄行つたと云つてゐるのであるが、何しろ顏が美しいばかりに、何處へ行つても相當に暮してゆけるのださうである。

二人が坐つてゐる前に、おど〳〵しながら、下を向いて居るお貞さんを、女は冷笑しな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がら、眺めて居るのである。やがて女は、
「貴方これが女房さんでせう。私はね、お澄と云ふ旅藝者なのよ。浮草や、昨日は東、今日は西、つて云ふなあ、古い言葉ですがね、私にや、しつくり合つてゐるんですよ。まあそんなに固くならないでお話しなさいな。」
と云ひながら、お貞さんの前で、良人にしなだれかゝつた。
下唇を、きつと噛んでゐたがお貞さんは、
「こんな寂しい所へ、ようこそおいで下さいました。」
と辛ふじて答へたのである。
「寂しい所は承知の上なんだな。今夜は宿つて行くんだね。お前と二人で語り明さうか。」
「貴方駄目だわ。女房さんの前で罪ぢやありませんか、ね女房さん、女は女同志が好いんですよ。』
言葉を終を妙に高調子に云ひ切つて、お澄は口元に薄笑ひを浮べた。お貞さんも無理に微笑しながら、
「左樣でございますね。」
と云つて、立ち上り夕飯の仕度をするため、に臺所へ行つた。其の後で、お澄が、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「貴方は眞實に、罪作りだね、溫順い人だのに、可哀想だわ。」

と云ふのが竈の前に立つた、お貞さんの耳に入ると、彼女の胸に、一種、何んとも云へない聳慟がおこつた。良人が、底力のある聲で何か云つて居る樣であるが、お貞さんには、聞こえなかつた。

三日間の不眠と、何時にない心配とで、お貞さんの頭は何んだか、空洞になつた樣な感じがして、立ち働いて居ても、只機械的に手や足を働かしてゐるに過ぎないのである。ぼんやりして居る、お貞さんの目には、手元が暗くなつて、夜が步み初めたのも、氣がつかない程であつた。

「おい〳〵お貞。ランプを持つて來い。」

と座敷から、良人に云はれ、あはてゝ、ランプをつけて持つて行つた。ランプの赤茶けた光に、お澄が橫坐りして、玉の簪で、亂れた銀杏返の根本を、自暴にかいてゐるのが照し出された。良人は、彼女の膝を枕して、目をふさいでゐるのである。

お貞さんは、思はずランプを、持つた手を、ふるはして、ハラ〳〵と淚をこぼした。部屋の眞中の臺にランプを置いて默つて退いた、お貞さんは、それから、手早くお膳だてをして、お燗をつけ樣とした時、酒が少しばかりしか、ないのに氣がついた。有つたけの酒の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

燗をしたのを、着けて膳を座敷に運んで行つて、良人とお澄の間へ置いた。

「何も出來ませんが、どうぞ上つて下さい。お酒が是れだけしかないので御座んす。一寸、私、文三(良人が使つてる男)の處へ行つて、少し貰つてまゐりますから、お澄さん留守をお願ひ致しますよ。」

「どうも女房さん、すまないのね。行つていらつしやいよ。私が御酌してますからさ。」

「ぢやどうぞ。」

二人の話を側で聞いて居ながら、默つて居る良人が、お貞さんには、無性に情けなかつた。彼女は、羽織をひつかけて、徳利を右手に持ち、落葉が深く足元に、うづくまつてゐる戸外へ出た。

秋の夜の空は、澄み渡つて、太い杉の木立の向ふに、冷さうな月が登つて居る。お貞さんは、自分の胸の奥に迄、其の玉虫色の光が流れ込む樣に思はれた。しーんと、靜まりかへつた木立の中を、ひとりぼつちで、歩いて行く彼女の心は、妙に落付きがはびこつて、今こそどんな難事でも考へられる樣に、感じて來た。けれど、何故とも解らない涙が、冷い頰をなまぬるく流れてゐた。

木立を通りぬけた處に文三の家があるのである。獨身者の彼は、一日の勞働に疲れ切つ

た體を、爐邊に投げ出して假寢をして居る樣子である。爐の火は燃え盛つて居ると、みえて、入口の腰障子に薄紅くうつつて居る。

月にそむいて入口に立つたお貞さんは、

「文さん、文さん、今晩は。」

と聲をかけた。

「何んですね。誰れだよな。」

「あの私は貞ですが、一寸用があつて來ました。」

「はあ、女房さんですが。今頃何しに來なすつたんです。」

障子は眠氣な目をした、文三に内から開けられた。

「私が、今日、お酒が無くなつてゐるのに、氣が付かなかつたものだから、良人が歸つて、困つたの。それで文さんには氣の毒とは思つたが、お酒を少し借りに來たのですよ。」

「旦那はお歸りになつたのですな。えゝ酒はありつたけ上げても好いが、散々遊んで來て又ですかい。」

「まあ、文さん。」

「夕方女房さん、お一人ちやな、何かにつけて、いけまひと思つて、近所迄行くと、まあ呆

氣れたもんだ。旦那が何處の馬の骨だかわからねえ女と歸つて御座つた。こんな山の中へ一處に來て居る女房さんに對しても、どうしてあんな眞似が出來るのかしら。」

文三が何の優味もない樣子と聲で、良人の惡口を云ふのを聞いて、お貞さんは胸が一杯になつた。

「文さんがさう云つて吳れるのは、有難いが、まあ、まあ私さへ默つて居ればすむのだから。あゝ遲くなるといけない。お酒を下さいな。」

「それぢや女房さん少しだが、これで有りつたけでさあ。」

お貞さんは文三が爐端から持つて來て吳れた酒を自分の德利にうつして、彼が送り屆けやうと云ふのを、無理にことはつて、其處を出た。月は相變らず冴えてゐる。彼女は四邊の靜寂に吸ひ込まれる樣に木立の中に入つて行つた。

木立の端れ、お貞さんの家に近く、古井戸があつた。井桁も何もなく、落葉がうづ高く、周圍を取卷いて、かなり深いのである。誰れが何時頃こんな處へ井戸を掘つたのかさへ、彼女は知らなかつた。けれど、只獨り家に居る時など、退屈と氣まぐれ心から、ふつと、此の井戸をのぞいて見る事がある。其の時に、すうつと、下の方の動かない水面に暗い線の彼女の顏が、うつると、云ひ樣のない、恐怖におそはれて、覺えず胸がぞつとするので

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ある。

お貞さんは德利を抱く樣に持つて、青い薄紗の樣な月光を浴びて、傳說中の人物の樣に木立の中から現はれた。彼女の頭は妙にかたくなつて、働かないかと思はれる位、何の意識もなく、只足を運んで居るに過ぎない樣にみえる。やがて古井戶の處迄來た時、今迄に何度となく、通り馴れた道だのにする〳〵と、まるで目に見えない力がお貞さんの體を、引つぱつて居るかと思はれる樣に下の方に、ぢつとして居る水面に彼女は落ち込んだのである。

目覺めた樣な、すさまじい水音と、たまぎるお貞さんの悲鳴は、森に、林に、谷に、響いた。

入口の障子に、あはてた樣な、灯影がさして、つと、二つの黑い影が戶外へ飛び出した。それは彼女の良人とお澄である。

「音はこつちに聞こえたな。おいお澄。」

「え、さうよ。きつと女房さんに何かあつたんだわ。」

二人は早口に話しながら、古井戶の處へ來て、中を覗いた。良人の胸は、不安な思ひにとざされた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ちよつ。仕樣がないな。一人ちやどうにもならない。お前、文三を呼んで來て呉れないか。ほら、あの灯が見えるあすこの家だ。」

木立を通して見える、灯影を指して、彼はお澄に云つた。彼女は夢中で走り出した。良人は獨り後に殘つて裏の物置から木挽き用の太い繩などを運んで來て、文三を待つて居た。文三のそゝくさとした足音が近づいた時、彼はほつとしたのである。お澄は我を忘れて、足袋跣足のまゝ、ぼんやり立つて、文三と良人が動くのを、凝視して居る。

文三がしつかと繩で胴をくゝつて、井戸に入つた其繩の一端を側の木に結びつけて、良人はお貞さんを橫抱きにした文三を引き上げにかゝつた。

「おい、女でも何かの足しにならあ。手をお借し。力一杯ひつぱるんだ。」

お澄は默つて繩を握つて力を合した。

髮は亂れて、顏や肩にかゝり、羽織はぬげて、氣絕したお貞さんが引き上げられて、凄い程白い面を月が照した時、良人は何やら恐ろしいものを、見る樣な氣がして、思はず面をそむけたのである。

良人はお貞さんを抱いて、家の中へ入つた。文三は直ぐに馬を走らして、村へ醫者を呼びに行つた。冷い水に冷へた彼女の體を爐端に置いて、良人は盛んに火を燃した。お澄は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さつきの醉もさめた樣な顏をしてゐたけれど、何くれとなくお貞さんを介抱するのであつた。

醫者が文三に連れられて來た頃は、お貞さんは、氣が付いて居たが、まるで樣子が變つてゐた。恐ろしい目をして、お澄を睨むかとみれば、けたゝましい聲をして笑ふのである。良人は驚いて、

「お貞、どうしたんだ。まあお前は餘程變つてるな。お貞、お貞。」

と續けさまに呼んだけれど、お貞さん、は、けろんとして、彼の言葉も耳に入らない樣である。

お貞さんを診察した醫者は、不眠と心勞のところへ突然、驚きに出逢つたので、發狂したのであると云つて、藥を置いて歸つた。

文三の知らせに、舅が走せつけたので、急いで男に賴んでお澄を歸させたのである。取片づける間もなかつたので、座敷は酒や皿小鉢で亂れて居たので、舅は何んと云ふ事なしに、謎が解かれた思ひがしたのである。

「お貞。お前はまあ、とんだ事をしたな。でもまあ怪我がなくてよかつた。どうも餘程變だな。おれがわかるかね。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

幼兒を宥め賺す樣に、お貞さんに言葉をかけて居る舅の目に、キラリと涙が光つた。
「ハヽヽヽ、何んですね。此の人は……、つまらない事云ふのお止しな。私はよい處へ行くのよ。花が咲いてね。ハヽヽヽよい處。」
とりとめもない事を口走る、お貞さんを眺めて、良人も舅もどうする事も出來ないのである。髮をふり亂して、目をいからすかと思へば何かに、そゝられた樣に笑ひ、又、さめ〴〵と泣き出す樣子を、良人は見て、四人が自分の犯した罪の前に、いつも心をおのゝかして居る樣に、ぢつと默して座つて居るのである。
秋の夜は更けて、物凄く靜かである。何の音もない空間を、星が一つ西へ流れた。
お貞さんはそれから函館の腦病院へ入れられたが、思ふ樣に快くならないので、終に良人がついて、東京に歸つた來た。もとより良人は自分が惡いのであるから、師匠に散々詫をして、彼女を託して、再び北海道へ歸つて行つた。
師匠は、
「人の娘をこんなにして、私が惡るかつたと云つたからつて何になるものか。たとへ全快したからつて、あんな男の處へなど、歸しやしない。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云つて早速戸籍をとつてしまつたのである。其の後、お貞さんは自分の身にどんな變化があつたかも解らず、夜となく晝となく狂つてゐるのである。

　それから程たつて、師匠が占にみて貰つたら、

「この御病人は、水神に祟られておいでとみえる。いつか、池に落ちたとか、川に入つて、溺れかゝつたとか、しなすつた事がおありでせうがね。」

「さう云へば古井戸に落ちた事があるさうで御座居ます。」

「はあ、それですな。其の時にもしも、水神に身を捧げて死んでしまひなすつたら、何の事も無かつたんだが、なまじ助つたから、祟られたのです。」

と云つたと云ふので、師匠は、よく雨降りの日など、他の弟子達が居ない時に、行きあはせると、

「可哀想だがこんなゝら、死んでしまつて呉れた方が、ましだつたんですのに。」

と云つて、ほろりとするのが例であつた。

　お貞さんは、いまだに、相變らず、ある時は幼子の樣に笑ひ興じるかと思ふ、と泣き叫びなどして、師匠の厄介娘として日を送つて居る。

　稽古を退つてしまつた、今でも私はあのお貞さんの上痙つた目を思ひ出す事がある。そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

してそれと同時にこの師匠の話も忘れられないものになつてゐるのである。（終り）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

神性と人間性と戀愛と——原田皐月

私は此筆に貧しい頭腦を以て神性に對しての人間性を考察し、猶兩者の距離が生活欲望として不斷の努力を齎し、努力から來る滿足、滿足から來る快感、是等人間にのみ許された幸福を想ひ、引ひて人間味の最も微妙なる現れの戀愛迄出來る事なら考察の歩を進めたいと思ふ。

昔、原人が樂園に禁果を犯してより羞恥を覺えたと云はれる。原人はそれ迄羞恥を知らなかつた。自分の裸體を知らなかつた。饑餓を知らなかつた。快樂を知らなかつた。苦痛を知らなかつた。生存を知らなかつた。死滅を知らなかつた。殆ど知ると云ふ事を知らなかつた。

神は凡てを知つて居る。有りの儘なる裸々たる自己を明光の下に曝らして愧ぢざるものは神である。絶體の生命と絶體の精力と絶體の征服力とを持つものは神である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

原人と神との間に無限の路が横る。

神の罰により知らざる原人より知つて爲さざるべからざるものになされたる人間は、赤裸の醜を皮衣に包んで只一分時の休息もなく前へ〳〵と歩み行く。

哀れなるものよ。汝は醜惡なる肉塊を愧ぢて煩はしき皮衣の自繩自縛に呻きつゝ、猶老病死苦の不滿、出產、愛着、勞働の苦痛を背負ひつゝたど〳〵しい足取りを痛ましくも引きて不斷の旅に休息を知らない。

哀れに悲慘なる人間よ。

山田檳郎氏は帝國文學誌上に人間性に關する思議に付いて云はれた。余りに外國語を多く取扱はれてるので折角の命題も鈍い頭には明確に物を殘さないで了つたが要するに「人間生活の究竟理想は神性に接近するにあるのではあるが、それは遂に究竟理想に止まつて神性問題の如何はも早や思議を絶し言說を絶し、ひたぶるに仰ぎ信ずる外ない」と云ふ樣な事を神の奉仕者として生きる處に生活價値があると說いてる最も人間離れのしたトルストイなどを引用して說かれたものゝ樣である。又氏は「男女の區別を持つ人間に於ては、單に人間性として取扱はれ得べき根本質的の確實性は假想の外にあり樣がない。もし實在

として肯定し得るとせば變調的、奇癖的、色狂的一種の精神病者たる中性的姿態の人間である。吾々男子は男性として夫として或種の職業人としてのみ一層よく「人間らしき」ものである」と云ふ様な説明から最も人間を實際的に思議せんとせられたものであるらしい。

氏が假想として退けられた人間性とは果して疎懶怠慢なる机上の冥想として外考へ得られぬ事柄であらうか。そしてそれの具體表現は必ず氏が病者とする中性的姿態のアブノーマルのものであらうか。さう迄皮想的に考へなければ安心の出來ない氏は別として私は私の考を進めて行きたい。

男女を置いて人間はない。人間は箇々の男と箇々の女であると山田氏は云はれた。又多くの人も云ふ。殊にワイニンガーなどは人體の細胞が既に男と女の別種に分れてゐるので、其二種が入りまぢつて一箇の男子、一箇の女子を成立して居るので、男らしい女とか女らしい男とか云ふ事は其一方の細胞の多寡によると迄解いて居る。

兎に角男性と女性の外に人間のない事は決して逆存のある筈がない。然しワイニンガーに斯う迄根本から兩性に分たれた女性も男性も人間であると云ふ事實を否定し得る理由にはならない。無限の生の力は兩性を同時に、同等に、同樣に壓し進めて行くではないか。

然して男性も女性もこの宏大な生の力を同じ様に取扱ひ、又取扱はれて居るではないか。人間生活の大きな波の中を男性も女性も同様に、同方向に、同體にうねりつゝ進んで居るではないか。山田氏が特に語勢を強めて叫ばれた「吾々男子は男性として夫として或職業人としてのみ一層よく人間らしきものである」と云はれた人間らしきは人間として男女を或處まで共通に認めて人間性を暗に承認して居られる言葉の様に私には響く。男性として、夫として、或種の職業人としてよい男はよい人間であると云ふ斷定の出處は、男女を包括した大きな人間性の肯定である筈である。男としてよいと云ふのは人間としてよい事で、然して男としてよいのである筈である。繪と云ふ偉きな概念的實在——さう云ひ得るならば——の中に三角派は三角派で進み、點描派は點描派を發輝しつゝ然も繪と云ふ拘束、領域の外へ脫しては居ないと同様に、男女は各自性を把持しつゝ猶大きな包括的な人間性の範圍、約束、定規內にあると云ふ事が何故に机上の空論であらうぞ。況んや人間性の具體表現が中性的變體だと云ふに至りては嗤ふべき沙汰である。人間性の範圍外に、約束外に定規外に飛び出してこそ眞實眞正のアブノーマルで、人間は破碎され、男性としても女性として破れ盡した形骸ではあるまひか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然らば人間性とは？

神の怒に觸れて樂園を追はれた人間は神の罰によつて凡てを知り、知り得たる事を爲さざるべからざる身となつた。

實に人間味の尊さ有難さは是あるが爲である。樂園を失つてはじめて人間は樂園を知つたのである。始めて樂園を得らるべきである。不幸があり、不滿足があり、不愉快があり、悲みがあり、苦みがあり、涙があつてこそ始めて幸が生じ、滿足が生じ、愉快が生じ、歡びが生じ、樂みが生じ、笑ひが生ずるのである。凡てを知らなかつた原人に、樂園を追はれない前の人間に何の幸福があるだらう。その幸福さへも知り得なかつた原人に。然して神に。凡て意の如くならざるなき神に。

神の罰として人間は無限の道を無休息に進まねばならぬ。嘗て見し事もなき皮衣——病老死苦の不滿、出產愛着勞働饑餓寒暑の苦痛——に我と我步行を惱しつゝ。とは云へ人間は無限の道の萬々常に樂園を見、不斷の努力は常に神を敎へる。神と人間の距離が人間を遂に神に引上げる所以である。然して其處に神の知らない原人の知らなかつた努力の快味

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がある。

人間は所有罪惡を知り、所有罪惡を犯し得る、神の國、原人の園には嘗て見ない罪惡を獨り人間は持つ。けれども同時に罪惡の美を打ち、枝を切り、根を斷つ努力は又獨り人間の持ち得る誇りである。人間が一の罪惡を征服し、一の不幸に打勝つ事に依つて人間の幸福は生ずるのである。勝利は只人間にのみ許された幸福、神も原人も知り得ない幸福である。

不如意も神が人間になつた罰である。然して神が同時に如意の滿足となつた事を人間は知り且つ歡ぶものである。

自分はつく〴〵人間性の有難さを感ずると同時に、出來る丈け充分に人間味を味索し盡したいと願ふものである。其處に人間の向上も、人間の滿足も、人間の幸福もあるのである。

人間は決して神の奉仕者ではない。人間は遂に人間の主宰者である。人間の主宰者は決

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して神ではない。神たらんと努むる人間である。人間である。

嘗て基督敎に救はれた私の友は私の頑迷を憐んで「人間は決して何時迄も強いものではない。神の宏大無邊の愛は弱い人間を俟つて居る」と說いてくれた。私は其時に「貴方が强ひて云ふ神と云ふものを私は私自身の中に持つて居る。であるから私自身を支配するものは矢張り私自身である」と云つて別れた。

友は私を眞實に憐んで吳れる。然して救はんとして居る。嘗て自身が神に救はれた樣に。然し私をして云はしむれば神に救はれたと云ふ友は自身に救はれた事に氣付かないのである。神を見出したのではなく自分自身を見出したのである。

私は神の爲の個人を考へた事がない。人類の爲の個人を考へた事がない。偶然にも必然にもそれが人類存在を意義あらしむると云ふ事に事實上同意し得るのみである。只此處に斷つて置く事は人間が神に達し得る時人間は人類は滅亡する時である――達し得ると否とは言說の限りでない。山田氏の樣に到底理想たるに止まると匙を投げる際に結果と考へる際に其方へ生きて行く事が急務である――人類が神と原人の距離と半は以上進み得た時、既に滅亡斯く近寄つたのである。不斷の進步が人類を一步々々滅亡期に導く事は、神を、樂園を渴仰し居る人類に又止む得ざる必然の成行きである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ニイチエは「自分の說が全部理解される時は人類の滅亡する時である」と云つたさうだ。

トルストイは男女の愛を解いて、

「正しき意味に於ての結婚は神及び人類の奉仕者たるべき繼承者を儲けんが爲の目的にのみ許される。肉體的たると精神的たるとを問ず單なる自己の快樂の目的の爲めに男女の結合は墮落である。罪惡である」と云つたさうである。

兩者の言を批較して人間味に對する考察を私は面白く思ふのである。

私はまだト翁の說の樣な男女を見た事がない。見ない許りか信ずる事が出來ない。トルストイの樣に人間離れのした、人間味に浴さない、各個人は人類全般の爲に造られたと思惟する人には無理からぬ事ではあるが、本能や直觀の問題を人間の小ざかしい、其上表面的に過剩の思索によつてあれこれ理窟責めに責め付けられることは腹立しい迄に余計なお世話である。私は飽く迄各個人から人類全般に及ぼしたい。神及び人類の奉仕者として繼承者を殘す前に、自分自身の片身たる繼承者を殘したい。然して猶其前に微妙な本能の力の前に男女の結合を承認したい。只々本能の力の前にのみ。おせつかいの神は人類生活の進步を豫則して人間に繼承者を殘す爲に兩性の間に愛を以てしたとは云へ、そは神の任意で人間の與り知る限りではない。個人の主宰者は飽迄も個人である。各個人が各個人の眞

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

要求を滿足に充たさん爲に戀愛し、男女結合し、繼承者を殘すともそは各個人の問題である。人類生存の、神の、意志を誰か先立つて考へ得るものぞ。小ざかしい智の結果から壓したる勝手なる斷定に過ぎない。

私は何處迄も直觀や本能の世界に小ざかしい理智を敷きたくない。理智は傍觀者であつてこそ始めて理智である。溢れ出づる直觀や本能の力を正直に傍から識別し批判することそ理智である。それにのみ理智の價値がある。他の世界に迄食ひ入る事は許し得ぬ事である。この意味に於て禁慾主義などは人間として自分を肯定し得る以上馬鹿らしい沙汰であると思ふ。單に禁慾主義其物が目的ならば。又それを通じて人間味の眞髓を摑得し得ぬ不明の輩の禁慾主義は。

靈肉を合せ持ちたる人間は靈のみの充實も肉のみの充實も完全なる生の充實とは云ひ得ない事に思ふ。肉を承認し靈を承認し、然して靈の充實が肉の充實を呼び、肉の充實が靈の充實を迎へ得る處に人間味の極致は存するのである。其處に充實した人間生活があるのである。

要するに私は人間である事を此上なく喜ぶと同時に人間にのみ與へられた人間味を髓の髓迄味ひ盡したい願ひである事を云ひたかつたのである。四月十七日

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東郷ペン（その二）

——岡田八千代

どんなに尊敬してる人でもその人の鼻の穴の中の穢ないのを見ると厭になつてしまふ。

正裝した紳士や淑女が鼻柱からはな水の垂れさうになつてるのを知らないでゐる程情けないものはない。どれ程その人が無神經かと云ふ事が見透かされるやうな氣がする。

段四郎は能く舞臺で、一寸はなをすゝる癖がある、あながちはなをすゝるのでは無いのかも知れない、けれどもあの癖をやられると如何なる妙技を演じてる時でもすつかり興が醒めてしまふ。（三、一九）

「『波』をありがたうございました。」

「もうお讀みになりましたんですか。」

「えゝもうすつかり拜見いたしました。」

「此『波』の著者の藤森成吉と云ふ方は大學の方ださうですね。」

「おやさうですか、ちつとも存じませんでした。」

「まだあんまり名の無い方のやうですが、出來は如何でした。」

「大變面白うございました。」

「私はこれから讀まうと思うのですが、あなたはどう云ふ處に興味をお持ちになりま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

したか伺つておき度いと思ひます。」

「さよですねえ。此小説の主の舞臺は大島ですが、その大島のかなり細かい紹介に少しも厭味のないのも氣に入りましたし、「永二」と云ふ青年の戀を求めてるやうな心持も可なり好く受けとれました。此永二が始めて大島へ行つた晩の叙景に

永二は起き上つて縁先まで行つて見上げると黒い雲が馬の腹帯のやうに流れて、その縁に黄ろい月がぼんやりと覗いてゐる、蒼黒い夜の巾から、微かに花の甘い香が漂うてゐる。（四三頁―四四頁）

と云う處があります、今これだけに切りはなすと大して面白いとも思ひませんが前後を照應して見ると、大變に南國らしい感じがすると思ひました。」

「その外にはどんな處がお氣に入りました。」

「さうですねえ、永二と云ふ青年のぶつきら棒で大變に生眞面目な處が、男と女との違ひはありますけれど、大變私は自分に似た處があるので引き入れられるやうに思ひました。例へば二二六頁の處でね、永二が他の人と一處に山の「奇人」と云はれてる爺さんの處へ歌を聞きにゆく約束で、これもかねて約束した通りの煎餅袋を下げて、連れてつて呉れる筈のお婆さんの處へゆくと、お婆さんが何處へゆくのか忘れてゐた上に、今日はお盆だから駄目だと云うので、

大變腹を立てゝ、

「ちやア、買つて來た此菓子袋は、どうするんです。」

と叫ぶ處なんぞは、ほんとに自分によく似てると思ひました。その外でも二三〇頁に、

「なぜ自分はかう一徹で執着が深くて固くなり過ぎるのだらう」

と云ふ處や、三〇七頁の、

「此頃なぜ自分が、いろ〳〵自分の心持や考へなどをしきりに口に出しはじめたのか、なぜ自分の考へを人に聞いて貰ひ又説きつけたいかのやうに熱心に突飛に喋べりだすのか、自分にも不思議である――自分はこんな事を云つて人に同意を得たいと思うのか、又は人の意見を聞き度いと思うのか、それから一たいどうしやうと云ふのだらう」

と云ふ處など、ほんとに私は私の事を云はれるやうな氣がしてなりませんでした。」

「さうでございますねえ、そんな處はあなたに限らず私なんかでもよくそんな事を思ひます、それでは早速讀んで見ませう。」

「是非讀んで御覧なさいまし、只ね、私は此小説の結末が少し物足らないと思うのです。」

「どう云ふ風にでございますか。」

「此小説では、此永二と宿屋の女中のお絹との交渉をほんとの戀らしく取り扱つてありますけれども、私はやつぱり此間をも、

只永二がその心持を戀として感じてるだけで、お絹の方はやつぱり今迄幾度か逢つたお客同樣に見さしてしまつた方が自然ではあるまいかと思うのです、世の中にはお絹のやうに青年の心を引くやうな事を云ふ女は幾人もゐるのです、只その中に意識して云ふのと意識せずに云ふのとあるだけですが、その爲めにかなり感情を動かさせられる青年のゐるのも確かであらうと思うのです。そして私は此お絹をもその意識しないで云ふ方の組にして、永二の眞面目なのに驚いてから、始めて自分には何の意もあつたと云ふ處を云はした方が自然ではなからうかと思うのです、其代り永二の男は惡くなりますけれどね。」

「さアその邊は讀んで見てからで無いと分りませんけれども、今あなたのおつしやつた通り、決して女の方には何の氣もなしに云ふことでも、隨分相手によつては眞面目な意味あるやうに取られて困ることがございますねえ。」

「全く無邪氣な青年ほど取り扱いのむつかしいものはありませんし、又、さう云ふ青年をわざとまどはすやうな事を云ふ女ほど憎いものはありませんねえ。オヤ、おはなしが大さう横道へ反れました。」

「いえどういたしまして、どうもいろ〳〵ありがたう存じました。」

「その外にもね、なか〳〵作者が頭のはつきりした方だと云ふ事が分る處はいくらも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ありますよ。やつぱり此永二の知人の根本と云ふ人などはなか／＼愉快な人でね、一々云ふ事が奇抜で才はじけてゐる處がよく顯はれてゐますよ。例へばね、犬の出て來たのを見て、

「おや、觀進撚りの犬のやう犬が出て來たよ」（五五頁）

とか、目白の鳴くのを見て、

「一筆啓上が飛んでゐる」（五五頁）

とか、向ふからお婆さんの來たのを見て、

「Hexe が來たぞ」

とか、

「火なんぞ僕がたくよ、暑い時にはそれが却つて避暑の良法なんだ、あとが涼しくてばかに暮しいゝせ」（六八頁）

と云つたり、又一七〇頁では、子供と、「千鳥だ」「燕」だと爭つたり、一七六頁でやはり同し子と「うみだ」「うそだ」と云ひ合ふ處などは思はずふき出してしまひさうになりますよ。それから一三六頁から一六〇頁に渡るお絹の話なども大變に面白うございました。私は此本をたれから賴まれた譯けでもなんでもありませんでしたけれど、少しの苦もなく、すら／＼と讀めてしまひました。とにかく少しも厭味の無いのが第一でした。」

「それはまアお貸し申しました甲斐がありました、では戴いて參ります。さようなら。」

「さようなら。」

（三、二一）

男でも女でも美しい人の繃帶をしたものは何となく心の引かれるものだ。男は頭に、女は指に、それもこちたからぬほど。

（三、二三）

どんなに美人でも、その足の指の裏と、かゝとの大きいのとを見るとうんざりする。

女は下女でも細君でも退屈さしては不可ない。つまり夫は妻の爲めに、主人は下女の爲めに、その人のゐるのを忘れないやうにして貰ひたい。

太平洋畫會を見に行つた。まだ午前中だつたので入場者も少なく、ゆつくり見られると思つて嬉しかつた。處が這入つて間もなくふと行き逢つた人が私に御じぎをした、どうも覺えがない、見たやうな氣もするが思ひ出せない、それからはそればかりが氣になつてとう／＼繪を上の空で見てしまつた。

（三、二二）

久しぶりに兄上の家へ行く、丁度朝の十時ごろだ。家の中がしんかんとしてゐる。その奥の室で姉上——私の實の姉——が覺束ない手付で着物の綻びを縫つてゐる。此姉は母の在世の頃は母と共に逗子に住んでゐたのだが、母が亡くなつたので兄の所へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

厄介になつてゐるのだ。小さい時、脳を病んだので大變に智恵が遅れてゐる、しかし白痴では無い、自分の着物、自分の持物、脱いだ下駄でさへ人の世話にはならぬ、きちんと自分で片付けて自分で始末する、そして自分に無禮の加へられない以上は非常におとなしい。只欲しいものがある時、又は下女などが馬鹿にした時は大變に怒る、つまりそれ等の心の働きと圓滑に云ふ言葉を知らないからなのだ。——

私は直ぐ側へ行つてその針と糸とを取つて綻びを縫つた、そしてその着物を疊んだ、その銘仙の袷はかねて私が一二度着たのを送つたものだつた、しかし裏を見ると胴に淺黄金巾をつけて袖の振にだけめりんす友禪の帯上げの古らしいのが二ツ割にしてつけてある。私はそれを見たら、俄かに涙がせき上げて來た——私は母の死に對しては大した悲しみも覺えない、しかしその母が此姉につくしてゐた總ての苦しみを見ると、直ぐに悲しくなる、そしてしみ〴〵母を今死なしたのは氣の毒だと思ふ。私は母の死には泣かないが姉の生には泣く事が多い。

（三、二二）

私「なぜA子さんはこつちの下駄を穿かないでわざ〳〵歯のちびた方のを穿いて出るのだい。」

下女「こつちのは鼻緒に油がついて、足袋につくからとおつしやつてゝす。」

私「そんなら、ベンヂンでゝもキハツでゝも拭けばいゝぢやないか、子供や男ぢやあるまいし。」

かう云ひながら私は書室からベンヂンの瓶を持つて來て、切につけてぐい〳〵とその鼻緒を拭いて日向へ干した。そして後で考へた。なぜあの時、「おやさうかい。」と云つたゞけにして默つてさうしてやらなかつたのだらう、下女などの前で同居の人を罵しりなどして何と云ふ愚かな事をしたのだらう。と。

（三、二四）

新富座を勸進帳から、二番目の長庵の切まで見る。（この「勸進帳」と云ふ外題はよくつけてあると思ふ、昔からあるものを今さら云ふのもをかしいが、今つッとさう思つたから書いて置く。）左團次の富樫はます〳〵ひれがついて大變に立派であつた。それに角々の腹があざやかに演出されてゐた。前段の一氣に山伏たるものを通すまいとする腹から、勸進帳の件で不審を立てる處から辨慶の苦忠を見て憐れみの情を起して引込むまで貫目にも表情にも申分ないと思つた。段四郎の辨慶は之も申分は無い。たゞ子供心に覺えてゐる團十郎の辨慶のやうに雅な處のないのがもの足りぬやうに思つた。團十郎のは勸進帳――實は往來の卷物――を讀む處、酒をふるまはれて好い心持になつて舞ひながら皆々を立たせる處に、何となく、相手を馬鹿にしたやうなす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つとぼけた處と、非常にゆたかな處とがあつて、その爲めに、辨慶と云ふ人物が大變賴もしい人に見えたやうに覺えたが、段四郎のは、如何にも堅く、そして正直でたゞ小細具をする辨慶らしく見えた、小細具と、とんちとは大分の違ひで、まづ此關は越しても、先の關がと云ふ不安が其處に出て來る。然し、堅く、正直であるだけに、「とかく三年のほども泣く〳〵」では段四郎の方が充分泣かせた。問答なども、はなをすゝる事さへ止めてくれゝば此上ないと思ふ、羽左衞門のよりも幸四郎のよりも此優のが今の處一番好い辨慶だ、一世一代などと惜しまずにもつと幾度もやつて欲しい。それに福三郎の義經が私は非常に好いと思つた、それはまだ藝の妙味やゆとりは無い、けれ共、住むに處なくさすらふ落武者と云ふ心持がどことなしに見えてゐて、もの憐れなさまが見物の涙を誘ふのに充分であつた。その次ぎに好かつたのが荒次郎と左喜之助の番卒であつた。「一度まみえし女さへ」からの間もよく演つてゐた。壽美藏、又五郎、ぼたん、左升の片岡、伊勢、龜井、常陸坊も謹んでやつてゐたのは好い、しかし花道を出て東を向いた時に一人として大口の眞直ぐにはけてゐる人の無いのは氣になつた。長唄はみんな感服しない、音藏は重味が無いし、幸次郎は上辷りがするし、宗十郎は重つくるしい。三味線は和三郎に重味がつくと好いと思つた。後見の猿之助

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は親切で好い、口上もはつきり出來た。
二番目の左團次の「村井長庵」はかねて此優の演るのを待たれたものだが、上々の出來であつた。序幕の長庵内が出なかつたのは惜しかつたが十兵衞殺しの憎味は充分に利いてゐた、赤羽根橋が廻つて犬を殺してから忠兵衞の見てゐるのに氣がついて兩手を懷中へ入れてグイと中から着物を持ちあげて頭から冠つて逃げる樣子の憎々しさと來たら無かつた。此の場と次の辻番との間に道具幕を冠せて、通りがゝりの人に人殺しの噂さをさせるのは本文通りだが大變に面白いと思つた。辻番の場の長庵は、白々しく衣紋をつくつて白眼で道十郎を見る工合、役人にをもねつて猫撫で聲をする樣子などふて〳〵しくて好い、次の宅の場は湯上りの樣子の油ぎつた處、千太郎に小夜衣の身受のさいそくをされて白を切るあたり、突き出しておいて小窓の處から覗いてゐるづう〳〵しさ。大詰で、「恐れ入りました」とは云つても心に三次を憎んでゐる心持までよく見せてゐた。先代のは見なかつたのださうだがよく出來たと思ふ。羽左衞門あたりの千太郎でもう一度改めて見たい。二役の久八も結構だ。人情のある中に商賣氣質の見える處にある妙味があつた。そして千太郎との情合が實の兄弟であるといふ作意を失はずに何處までも親身に見えるのが嬉しく思はれた。猿之助の三次は氣の利いてるやうな間のぬけてるやうなおち

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つちこちよいの處がよく見えてゐた。殺しも面白かつた、しかしあの引込みはどんなものかしらぬ。あれは始めて人を殺した時の氣分なのださうだが、たゞ可笑し味丈で凄味が無かつた。辻番役人は眞面目で好い、左升の御家定はもちつと顏の苦味走つた人に演つて貰ひたかつた。此役は柄が好くなくては適らないやうに思ふ。壽美藏の道十郎は柄はまづ好いが、少し憐れが利かなかつた。千太郎も柔か味はあつたが少し猫脊で形が惡かつた。長庵宅よりも道行の方が好かつた。松蔦の小夜衣は美しくて好い、又五郎の忠藏はあんまり肩が張つて變な形だつた。然しいつも此優の役に熱心な事は嬉しい、秀調のおりよは内の家でやつれた姿がいつものやうに意氣にならないのは注意だつた。大かた着物の腰の處をふくだめて着たのが野暮に見せたのであらう。大詰も眞面目な女房ぶりであつた。雷藏の道之助は、丈をぬすまうとするので横座りをするのは氣になつたが、憐れも利き人柄も好くて親切な舞臺がどこまでも見物の同情をひく、團右衛門の紙屑屋はおつとりした親切な人物に見えた。段四郎の大館は、行き屆いてゐた。

演伎座に、伊庭、澤田、京子、浦路、歌路、孔雀などの連中の「役者の妻」を見たが、中にはさんだサロメが、どうしても新らしい劇團の人のサロメと思ふ事が出來ずに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

どうも新派のサロメとしか見えなかつたのが不思議であつた。伊庭はたゞ舞臺が嬉しさうである。その爲めに見物も嬉しがる京子は少しも演技にうるほひが無い、諸口は達者になつたゞけだ。歌路がお駒をあの位にやるのは當前のやうな氣がしたが、孔雀が藝者をあれだけにしたのは豪いと思ふ。しかし藝者としての品が無いのはまだ仕方もあるまい、汐路の女房は女優中で一番無難に出來た、陰氣な處が適つたのだらう。澤田はやつぱりうまいものだ、ヨカナアンも帝劇の時より好い、しかしサロメをしりぞける時に、その肌へ手をかけて突くのはヨカナアンとしては可笑しい、そんな筈がありさうも無い、よく白をよんで見て貰ひ度い、それから一度井戸の縁から下りるが、あれも考へものだと思ふ。熊谷づゝみで引込に一寸きまるのは可笑しい。それから仕方もあるまいけれど、序幕で羽織なしの袴で出た處は、少し落語家然としてゐた。京子のサロメはまるで手にも足にも筋金が這入つてゐるやうだつた。然しかう云ふ連中がかう云ふものをやるとき、どう云ふ考へでやるのかしら、わざと安くやるのかしら、それともあゝ安くしか見せられないのかしら。

帝劇の「古城の鐘」と「夢幻的バレー」を見た。歌劇の日本譯が口語體であつたり古語體であつたりするのはどうしても可笑しい

やうだ。然しみんな形は好くなつた、信子の白も大分輕くなつたが、お品ぶらうとするといつも失敗するらしい、いつも熱心な柏木に役のついたのは大變に嬉しい、夢幻的バレーも面白い、よく練習されたと思ふ。その中でも「ものを云ふ人形」が一番好い、高田の箱から出る古人形も磯代の西班牙人形も好い。私は此の優に以前のやうに好い役のつく日の返る事を切にのぞんでゐる。

（三、二八）

一年の中でこの頃の月が一番明るいさうだ、兎に角、この頃の月では繪が描けるさうである、さう云ふ時の月がこんなにも毎晩曇らずに照るのは珍らしいのであらうと思ふ。青いものは青く、黒いものは黒く見える程に晝の光に近く、そして、ぎら／＼とせずしつとりとした明るい水底のやうなこの頃の月を置いて寢るのは、ほんとうにもつたいないやうにさへ思ふ。

（三、三〇）

月があんまり好いのを見たら、二三年前のこんな月夜にごろ棒が這入つたことを思ひだして俄かに恐くてたまらなくなつた。それに七人殺しや四人殺しが一向捕まらないので、もしあんな事をした理由が、たゞ人を殺す興味にそゝられて行はれたのだとすると、いつ何時、金も着物もあんまり持たない我々の處へも來ぬとも限らないと思

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つたら恐くてたまらなくなつた、それでいつか中ごろ棒が毎晩のやうに近處に這入つた時、まさかの時の用心に主人がこしらへた十手のやうな鐵の棒を床の下に入れて寢た、しかし、又その鐵の棒がどろ棒の爲めに使用されはしないかと言ふ事を考へたらます／＼寢るのが恐ろしくなつてしまつた——。

（四、一）

繪を描くものがその繪に、作をするものがその作に、各々「自分」と云ふものがはつきりと顯はれて來るのはいつだか分つたものぢやない、たゞ生れてから今までの「自分」と云ふものは、變つたと云つてもさう變るものぢやないのだと云ふことは分るけれど、その「自分」がほんとの「自分」なのかうその「自分」なのかは、やつぱり、自分が死んでしまつた後でなければきめられるものではないらしいと思ふと、一瞬の間もうつかりとしてゐられないやうな氣がする、だから各々の作に「自分」を見出さうとするのには、今の自分をもう死んだものとして計量にかけて見るより仕方はないのであらう、そして、おぼろ氣になりと其處に「自分」の影らしいものを見出すことが出來たなら、それを出來るだけ大切に、出來るだけ眞面目に、出來るだけ愛して取りあつかつてやり度いと思ふ。

（四、二）

自由劇場の第二回劇場美術展覽會を日比

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

谷美術館へ見にゆく、これだけの寫眞をこれだけに並べて見せる親切を思つて見る人がゐないだらうと思ふと少し心細かつた。

（四、四）

生田花世さんの「懺悔の心より」を讀んで大變お氣の毒になつた、そしてこんなにもみぢめな人があらうかと思つた、よく／＼低い生活をした人だらうと云ふ事が知られる、同時に野枝さんの手紙の親切なのはさぞ花世さんを喜ばしたらうと思つた、私は一日も早く花世さんが野枝さんの處を尋ねる事をいのつてゐる。

（四、五）

中央公論の四月號の「K男爵夫人の遺書」と「今戸橋」と「紅の森」と「雨もよひ」とを讀んだ。野上さんのは如何にもなだらかな書きぶりが羨ましいと思つた。「今戸橋」は久保田氏一流の一人合點の處はあるが藝人の便りない心持がよく見えてゐてうまいものだと思つた。幹彦さんのものを讀むと自分のゴツ／＼した不器用な書きぶりを考へてあぢきなくなる。私はこの「紅の森」をよんでしまつた時、ふと一葉女史の「たけくらべ」を思ひ出した。藤原氏のは、一二〇頁で「肖像のやうに默つた」と云ふ句を見て變に思つたが、なほ讀みすゝんだ時、「……口の筋が草臥れて二人とも默つたまゝ、御鮨を口にして「時間」と一緒に喰べてゐた。と云ふ文句を讀んでなんだか不思議な氣がしたので中止した。いづれゆつくり讀まし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

で頂くことにした。

（四、六）

私が讀み度いと云つたのである人が白樺の三月號を持つて來てくれた、それで直ぐに「その妹」を讀んだ。盲目の生活がよくあれ丈に強く描くことが出來たと思つて感服してしまつた。たゞ一幕毎に前幕の事件を大低くり返して云つてゐるのは上場の場合どんなものであらうかと云ふ事を考へた。脚本は必らず上場するものとして讀まなくてはならないわけではないかもしれないけれど、私はあの脚本の中で盲目の廣次が小間道の手を握つたのをオバさんが見てゐたと妹が話すと、廣次が「さうか仕方がない」と云ふ白をくり返すのが、何とも云へない淋しさを誘つていつまでもいつまでも忘れられなかつた。

（四、七）

ある女からある女へかう云ふ手紙が來た。

「……その後神經衰弱は少しは好いですか、どんな風に暮して入らして？　私の方も今に無職で困つてゐます。――あなた方の處には子供はなし親はなしだからその氣になればどうにでもなるのでせうが、私の方は年よつた兩親、子供四人、そして私には何の生産的の力もなし、これからさき、どうなる世ぞと思ふと惡い方へ〳〵といろ〳〵の事考へてほんとうに心細くてたまらなく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なるのですよ。かういふ時は何う思つたらいゝのでせう、どんな氣でゐたら安心して日が送れる事でせう、ねえ敎へて下さい。

……さう云へばこの間△△さんからの手紙にあなた方が別居して入らつしやると云ふ噂だがほんとかつていふて來ましたがそんな事があつたのですか、あなたの心持はよく分ります、あなたのこの頃の作を見て主人も大變あなたに同情してます、そして御主人にも同情してます、つまり二人とも結婚すべからざる人だつたのに兩方が不幸だなどゝいふてゐました。そして私にお二人が幸福になるやうな事を敎へて上げろつて申します、私だつて中々そんな事お敎する事は出來ません、今さらね。ですけれど、あなたが精神の事を肉體や物質よりも尊いと思つていらつしやるらしい思想を、かんがへなほして靈肉一致と云ふこのごろしきりにとなへられる思想を少し考へて御らんなさいな、私はやつぱり人間は神樣でも獸でもない以上は、靈、肉、とかたよらず、靈肉一致の行動や思想が一ばんほんとうに近いのではなからうかと思ひます、お暇の時御返事下さいね――」

その女からその女にやつた返事。

「御手紙拜見しました。私の家には子供が無いからどうにでもなるだらうと云

ふお言葉をあなたから聞くのは少し恨めしいやうな氣がしますよ。私の家は人數の少ない割に收入が多いのですから。あなたのやうに思召すのも決して無理とは思ひません。あなたがさう思ふ位なのですもの、世間でみんな私をあしざまにいふのは當前な事だと思ひます。けれども一家の生活と云ふものは、家族の多い少ないや、收入の多少で定められるものではないとつくぐ私は此頃思つてゐます、つまり其處の家に余程の余裕の無い以上、其處の細君は出來るだけ、主人のためにも自分の爲めにも、すべての趣味を殺しで朝から晩までその月の豫算外に少しの金も出ぬやうに勤めなくてはならないのだと思ひます。それをふせぐためにはかなり苛酷なとりあつかひを夫にたいしてさへしなければならぬのだらうと思ひます、そこではじめて一家は金について安樂な一月を送る事が出來るのだらうと思ひます。けれども、私のやうに自分の夫が結婚前と結婚後とにおいて趣味のだ落を見ぬやうにしたいと考へたり、長い獨身の生活をした人に、妻をもつてもなほ、その自由な心を續かせたいと考へたり、寢たいだけ寢かし、起きたいだけ起し、働らき度い時だけ働かせ、欲する時には無理な金をもある顏をして持たせ、すべて夫を家族

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の中の一人とせず、家族を蹈まへてる一人として立たして行かうとするやうなものは、どうしても、幾ら收入があらうとも、その金を上手に生かして使ふなどは出來ないのです、それ故に夫は余り金に苦勞はせぬ代り――それは大體においては富有と思ふ丈の安心は得られはしますまいけれど――その陰に妻は人並以上の貧しさを味はなければならぬのです。ですから、決して私は世間からよくは云はれません、それは足す可き義理もたせず、切れる處も切れないし、また拂ふ可き處へも拂へないからなのです、だから私はそれほご盡してゐるに係らず良妻ではないのです、良妻といふものは夫に同情があつてはならぬのです、良妻と云ふものは、一家を保つためには、多少夫を犧牲にはらふ覺悟がなくてはならぬのです。私はある時、あんまり夫に同情するあまりに夫の許を去つて夫に幸福をえさしたいと思ひました。けれども、それは世間から見てはまるで反對な事に見られましたゝめ、私達二人よりは數の多い世間のために私は負けてしまひました。そして、私は又ぐづ〱と下手な家政をあやつつてその日を暮してゐます、その代り、私どもはこれ程貧しい家庭にもかゝはらず、だれもいち〱しないで、大低なはしりものは早

く口へ入れてゐます、たゞその位が自慢です。全く私どもはあなたのおつしやる通り結婚すべき二人ぢやなかつたかもしれません、私はかうやつて下らぬ椽の下の力持で暮してゐますし、夫はまた、何の苦痛をも受けもせぬ私のために、さも惡い妻をもつたゝめに窮迫するらしい取り扱ひを世間からは受けてゐるのですからねえ。

あなたに私どもが別居してるやうに告げた方は新聞でもやつてらつしやるのに似合はぬうかつな方だと思ひます。さう云ふ噂は、あの方がよく調べてそして後あなたに通す可きでは無いでせうか、迷わく千萬な事と思ひます。

あなたの御說の靈肉一致論は大變立派な事と存じます、けれども夫婦と云ふものが必ず靈肉一致されるものなら、何にも苦勞はありますまい、靈肉一致しなければこそ、靈に行き、肉に行き、その力づよい方へ引きつけられるのではありますまいか、然し今の私は「靈、肉」すべてから離れた處に私の生活を置いて見たいと思つてゐるのです、それは無論出來る筈はありますまい、けれども、少しでも夫等よりも高くなつて見たいと思つてるのです、しかし私はこの世において夫のために唯一の同情者には違ひないのですからそれだけをお忘れ下さいますな、そして私は誰

からも同情されては濟まぬ程惡い人間なのだと云ふ事も覺えてゝ下さいまし。

私はまだ本統に身體が直つてないので、時とすると下らぬ事に、自分でも思ひがけぬ程感情の高ぶる事がありますこの手紙にもそんな處がありはしないかと云ふ事を恐れてをります。――」

前號には大分誤植がありました、しかし此處に直すほど重大な記事でもありませんから取り立てゝ直すことは止めます。たゞ八十二頁に「橋本己之助」とあるのは「榎本己之助」の間違ひゆゑこれだけを正しておきます。

女性の直覺（改革家としての婦人）——山田わか譯

（ウォードより）

婦人の直覺と云はずして女性の直覺と題した理由は、勿論此の直覺は重もに婦人によつて現はされて居るのだが、此れは其の根原を人類が未だ人類に至らなかつた時代に有して居たし、又婦人の直覺は、多くの動物の雌性の幼稚な單純な心的特性から直接に發生したものと信ずるからである。兎に角、婦人の直覺と一般の直覺的判斷との間には屬的區別がない事をつけ加へて置く。

近世生物學の見地から、婦人の直覺に付いて注意すべき最も重要な點は、其れは元來母と子の保護を唯一の目的として特に非常な發達をとげた、一ツの能力であると云ふ事である。其れは母の本能の一部分であつて、そして凡ての他の本能と同じく、其の目的が狹ければ狹い程其の鋭敏さと精微の點を増すのである。婦人の即刻な、正確な判斷力——彼女自身或ひは彼女の子が危險に陷つた場合に如何に處すべきかに付いて——は、人類が動物の域をやうやく脱した頃の、人類の歷史中に發達したもので、そして其力は彼女並びに彼

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女の子供に降りかゝる危險を防ぐのが唯一の目的であつた。彼等に降りかゝる危險の度は、人類の智力の增加に從つて、又人類が地球上に散亂して行くに從つて、益々多くなつて行くのであつた。そして此の直覺の力は文明の元來及び進步と共に漸々と複雜になつて來てそしてあらゆる方面からの襲擊、爭鬪、及び凌辱から彼女の家族を防護したのである。文明最高の時代に至つては、其の力が婦德を守るために絕へず働いて居る。男の不忠實を看露はしたり、誘惑や、さまぐの陷坑から靑年子女を保護したり、非道な夫や慘酷な父の虐待を避けたり、男の浪費や放縱を抑制したり、其の他あらゆる方面に婦人の直覺は活動して居る。婦人の頭腦はかやうな問題に對しての判斷力を旣でに蓄へて居る。其れは彼等の腦のうちに、生れながらに發達した適當な神經作用の外皮中樞と共に、無限な過去の組織だつた經驗を遺傳されて居るのである。故にいざと云ふ場合に婦人は思案して居て、後れをとるやうな事はない。彼女或ひは彼女の子に危險が迫つた時、婦人が其等の、のろい智的作用によらなかつたゝめ、後れなかつた例は全歷史を通じて明らかである。彼女は即時、事を、處さねばならぬ。さもないと敗亡に歸する。自然淘汰はかく働き得る婦人を保存する。近代社會に於ても矢張りさうであるが併し其れはアデソンの云つた。

『思索する婦人は敗亡に歸す』

と云ふ言葉よりは、もつと廣い意味に於てゞある。此の婦人の防衛的性質は幾人かの著者によつて照會された。スペンサーは彼の『社會學の研究、三七六頁』に於てこう云つて居る。

『野蠻時代の女は彼女の粗暴な夫の動作、音聲、及び面色によつて彼の心のうちに兆しつゝある怒氣を看破し巧に危險を避ける事が出來た。けれども感情の自然語を讀むに不熟練な女は往々此の危險に遭遇しなければならなかつた。で、女が絶へず此の力を運用して居た事、及び此の力を多量に所有した婦人が生延びたと云ふ事實から、我々は此の力の確定を女性の能力と推知し得るのである。通常此の女性の能力——人の身振りによつて其の人の心の狀態を知る敏捷な働き——が直覺となるのである。歸せらるべき論證はないけれど、此の力が、もし心理解剖の熟練と合する時には、此れはめつたにない事だが、其の結果は他人の心の狀態を解釋する驚くべき能力となるのである。』と

けれども我々は女性の直覺を了解するためには猶もつと遙か前時代へ溯る事が出來る。動物が、他の動物を欺くために、或ひは、殊に、雌を得るための同種族の間に於ての競爭中に得た、雄の直覺的知解力は或る程度迄雌の上に反衝した。ために、此の直覺的知解力は全然、雄の持性となり終せなかつたのである。そこで、雌が幼獸を番守する時、働かせ

る力は此の直覺的知解力の稍々かたちの變つたものである。そして此れが、私は信じる、今、充分發達して居る女性の本能の本當の根元である。そして此の力は重もに彼女の幼兒の上にあつめられる。殊に最も發達した婦人に於てさうである。

此の根本的な女性の特色はいろ〳〵の方面に現れて居るが、常に防禦的であると云ふ事は其の重もなるものである。女性の最大目的は擁護である。そこで彼女の責任なる、未來の種族の安全を計るために彼女は知力を發達させた。そして最少の危險をも知覺して、其れを避けるに油斷がない。彼女は決して危險を冒さないのである。老練な船長は常に安全な進路を選む。二進路があつて、兩方とも全く安全に思へる時にも、猶其の上にも安全の方をと彼は思慮を運らす。此の表面の臆病は不屈な船乘業者の有名な不敵さとは矛盾して居るやうに見ゆるが、併し此れは、海上にあつては常に安全な進路を選むと云ふ動かすべからざる、原則の結果である。女性の心理も亦こう云ふ性質の注意をもつて居る。そして此の注意は、航海に計りでなく又或る特種の危險に對して計りでなく、あらゆる事柄の上に働らいて居る。如何に安全な狀態のもとにあつても、もし其處に二つの道があつて、其二つの間に少しの差でもあるならば、彼女は必ず、より安全な方を見定めて選むのである、が彼女が、かく、見定めて選むだからとて、其れが必ず彼女の安全だとは限らない。其れ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は唯想像の安全である。彼女は常に判斷の基礎を經驗の上に置く。であるから彼女のとる道は、以前に彼女が一度通つて、そして安全であつた其の道である。もし、外に、遙か、其れにも優つた道があるとしても、それが未だ經驗されない道であるならば、彼女は其れをとらないのである。他人の經驗からの、或ひは自然の情勢からの如何なる有力な議論も彼女には滿足でない。此の女性の心的狀態は人生のあらゆる方面に現れて居る。そして其の特性の中心は極端な保守主義である。凡ての革新は、危險の伴ふものと見て居る。現在の生活狀態が、たとへ、價値なきものであつた處が革新を企圖して危險を冒すよりは、ましだと云ふのである。かく、婦人は、發達の堅く固定した狀態を保つ、社會の平衡輪となつた。此處に婦人の直覺は適應するのである。

婦人の此の根本的保守的の性質から、婦人に改革家としての資格のない事が想像出來る。なぜなら、凡ての改革は現在の秩序を改良するのにある。こう云ふと、あの有名な事實――數多の婦人が改革家である事、幾多の改革が婦人に指導されて居る事、又政權獲得に對する婦人の論證は、彼等は男子等の企て能はぬ改革を開始し、のみならず、改革家として は男子の及ばぬ強硬と熱心を持つて居ると云ふ、主張の上にたてられてある事――は余の論旨に矛盾して居るやうに思へる。けれども其れは外見だけがさう見えるので、實は其等

の事實と本當の保守主義とはよく一致して居るのである。或ひは、むしろ、保守主義だけでは、全體としての婦人の性質を説明する事は出來ないとも云へる。もつと正確に云へば、婦人の保守主義は、彼女の周圍の狀態や、制度やに向けられずに、唯、彼女自身と彼女の子の上に聚められたので、彼女の性質のうちに染込んで居る制度の保存ではなく自己保護であるのだ。それ故、彼女の保守主義は自己保護に都合よき制度だけに限られてある。如何程、改良の餘地あるものに對しても、其れがそれだけで役にたつて居る限りは彼女は其れに改良を加へやうとはしない。が、男子は、此れを、絶へず實行して居る。男子は、單に役にたつ、無いよりはましでは滿足しない。彼等は改良出來るものなら改良しやう、最上の點迄改良して行かうとする。此れが眞の改革である。此れに反して、婦人の從事して居る、所謂、改革は決して眞の改革ではなく、言はゞ革命に近いものである。彼等が改革しやうとする制度は彼等が有害と信じて居るものであつて、そして彼等が着手した改革の仕方は其等の制度を廢するにあるのだ。其れは常に自己保護である。不善は危險であると云ふ處から、婦人の改革は、彼等自身並びに子等の安全を計るため、眞の或ひは想像の、惡に對する聖戰であるのだ。であるから、最も根本的な改革は、永い間、はぐゝんで來た、最も完全な保守主義である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

故に女性の直覺は、男性の欲求の目的物を得るに用ゆる直覺とは、大ひに異つて居る。男性の其れは、快樂を求むる心の力の支柱である。そして生存の第一の作用を成就するのである。此れを、女性の消極的、受動的直覺に對して、積極的或ひは他動的直覺と云ひ得る。女性の直覺は他動的に、或る仕事或ひは企圖を求めない。それは必要な場合の活動を用意はして居る。或ひは、企てられたる行動を、もし其れが不利と思へる場合には、喰止めはするのである。一歩進んで兩性の直覺を比較すれば、女性の其れには詐りがない。けれども男性の其れにはその根本の特性として詐欺の元質をそなへて居る。が、或る範圍迄は此の二つの種類の直覺は男性女性兩方にも屬して居る事、又心の一般の性質としての直覺的判斷力は、女性特有の直覺から根本的には區別のない事、又婦人に於ても直覺的理性が往々よく發達して居る事、等は事實である。けれども兩性の心的構造を廣く對比して見ると直覺的理性と云ふ言葉に含まれた其等の性質――敏捷、外交手腕、戰略等――は卓越した男性の特色で、そして其れは社會の他動的、積極的、進歩的要素である。此れに反して直覺的判斷力を構成して居る、受動的、消極的、內氣、疑懼、及び警戒的保守主義の要素等は女性の特色である。

故に、凡てを斟酌した後に、こう云ふても恐らくは云ひ過ぎではあるまい。則ち直覺的

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

能力は男性と女性と、はつきり別に二筋になつて發達して來た。知的能力も亦、男幹と女幹とが實際に存在して居た。で男の方は扶助及び繼續に、換言すれば他動的な增進、發達、或ひは進歩に、女の方はタイプ(型)の永存、不撓、受動的鞏固に適用して來たとして考へられる。そこで男性能力の優勢なる特性は剛勇で、女性の其れは愼重である。此の二つの心理學上の要素は、二つの生物學上の要素、則ち男性の適應と變化性に富む他動性と、女性のタイプを永存し、遺傳を取次ぐに都合のよい受動性とに、並行して居る。此の男性、女性の特色は社會學上の二つの要素、則ち進歩と云ふ常に存在して居る破壞的要素と、此れを抑制する秩序と云ふ保守的要素、とに類似して居る。

一般的女性の直覺及び特種な婦人の直覺に付いての結論を此處で云ひ殘してはならない知力よりは感情が先で、そして其れが一般に要用であつたと云ふ見解から、感情に豐富である婦人は、社會經濟から見て、少なくとも、男子と同等の位置に置かれる筈である。又知力の發達の見解から見ても、婦人は男子と相並んで、歷史前から、社會以前から、否々人類が人類に至る以前から、男の偏頗な、無鐵砲な、氣儘な行動に、必要な補充を與へて來た。婦人の補充がなかつたとしたら、人類は歪曲し、亂れて進歩の方向には行けなかつたかも知れない、男子は此の進歩を、彼單獨の仕事であるとしては居るが。故に知力の範

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

園内に於てゝすら――男子が優勝權を請求して居る處だが――婦人は彼と平等である。婦人は、人類進歩に依附するあらゆる名譽を等分し享有すべきである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

苦痛にむかひて

――生田花世

『私は惡うございました』とかう云つてしみじみと湧き上る熱い涙の心持にぢつと靜かに浸つて、自分自身のために、また相手の人に私は詫びる。私は心ゆく限りわびる。そして流れる涙に指を當てておさへる時の柔かな心持！　本當にそれは得がたい心持である。それは私の胸の扉に日光のやうに觸れて來る心持である。『あれは私があゝだつたから不可なかつたのです。』と私はその懺悔の理由を自分のために、また相手の人に靜かに述べる。もつと自分をよいものにしたいとねがふ心持が私にそれをさせそれが私にある快さをもたらして來る。思ふに、私は生れてからこちら幾度、自分自身にまた第二者にかうした涙と詫びとを告げて來たであらう。私に取つては生きると云ふことは詫びると云ふ事であつた。私に取つては生長するために詫びると云ふ事が本當に必要であつた。詫びねば私は徹底することが出來ないのだ。しかも私はまだまだ本當の懺悔の域に到達してゐるものではない。

姑が、――私があんなに壓迫を感じ苦痛を感じた――今はもうすつかり私の生活の中に住居して、私も安んじ、姑も安んじ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夫も亦安じてゐる喜び、この喜びは私が姑を姑としての意識ではなく、單に寄邊なき一個の人間としてあはれむ意識から育つて來た。そしてその喜びが、今や二人の愛の裏書きとなつて來た。二人は姑が時々無理解なことを云ふとき眼を見あはせて思はずほほゑむ。そのほほゑみはあはれみのほほゑみである。幼兒を恕していつくしむやうな感情である。二人は二人きりになるとさう話した。『ねえ年を老るとだんだん子供と同じではありませんか。此頃はしきりに好きなやうにさせてあげたくつてならないのよ』

　然しまたぶつつかり合ふ時、私は心の中をすつかり披瀝して詫びた。この時詫びたのはもつと私の懐の中に姑を抱き締めるために、私の胸を廣げるためであつた。まづ人を得るため自分を低く地面に投げ出すその苦しい努力であつた。

　あの男に身をまかしたのは私を襲つてゐた性慾のためであつた。さうしてパンのためではなかつた。精神がその男を愛せず私の肉體が精神に裏切つてその男を愛してゐた。そして私がそれを少しも知らなかつたのにすぎない。何故あの男の前を去ることが出來なかつたか？　この疑問は殆ど四年の間私をなやまし苦しめてゐた。それで考へに考へたあげく立去ることの出來なかつたのは自分の生活を破壞されることを怖れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た爲に相違ないと私は思つた。それでパンのために自分は處女を棄てたときめてゐた。しかし此の頃『戀の道程』を百枚ばかり書き終つた、そして私は驚きの眼を見張らずにはゐられなかつた。私の生活を支配する猛獸のやうな生慾を見出したからである。この猛獸のやうな生慾の力が私の純潔を奪つたのである、所謂『官能が靈を裏切らず、靈が官能を裏切らぬ時』を私にゆるさなかつた程强い力を『生慾』が持つてゐた。かうして靈が官能に裏切られた生活が私の生活の眞相であつた。パンのために童貞を棄てたと云ふ事がまだ輕い羞恥を以て考へられた。しかし生慾のために童貞を棄てたとは恥かしくて考へられなかつたそれ程私は生慾を口にするのが恥ぢられたのである。それで私はその眞實に顏をおほふて了つた。羞恥の情が私を盲目にしたのである。私は羞恥の情のためにかくして不誠實にものを云ひ、虛僞におちていつた自分を見出した。

『戀の道程』を閱讀んでくれた人はかう云つた。『もつと大膽に、もつと自分に鋭利なメスをあてるやうに』と。しかし私の激しい羞恥の情がともすると描寫の前に目を閉ぢさせる。自己を批判し解剖して書くことはそれは必竟羞恥の情をおしのけてからでなくては出來ぬ時、私は苦しいヂレンマに立つてゐる。

女性として本能的に激しくもつてゐる羞

恥の情が、私を盲目にする。この羞恥の情が私からまつたく去つて、私が本當の自己を完全に見出だし得る日は果していつの日であらう。そしてそれはどんなに苦しいことであらう。

しかしその苦しい事を私はしたいのだ。

私は其の日まで大學のあの赤門を這入つて大學の裏の道を根津の方に拔けてゆく事が出來るとは少しも知らなかつた。

朝は綺麗な太陽がのぼつたけれども晝頃からはきまつて四月の頃に吹くあの砂をふくんだばさばさする風が出た。庭の片隅の笹の葉が惱ましさうにもまれてゐた。新しく造つた植木棚の上のアラセイトウの紅い花が寂しげに見えるし、白い椿の花もくろずんでゐた。

私はこの日起きるともう佗しい氣持に堪へなかつた。それは男がこの十四五日來憂鬱になつて、日毎に妙に蒼ざめて衰へて濁つて疲れてゆくからであつた。そしてそれが何の故とも知れなかつたからであつた。

男は髮刈らず浴せず、もの云はず、笑はず、動かず、沼のやうによどんで、私が傍に近寄るのを厭ふやうな素振さへもした。

『ねえ、何故あなたはそんなに不可なくなるのでせうね。今日は理由を云つて下さい』と私は男の顏を下からのぞいて强よく訊ねた。

『あなたは私を憎みはじめたの?』

その時男は丁度云はうとしてさう訊かれるのを待ち望んでゐたやうに歯の間から云つた。しかもしひて冷淡さをよそほひながら。『驚かないで聞いてくれ。二人は別れよう。別れねばならないのだ……』

『別れるのですつて？　二人が？　何故だから？『貞操問題』で私が非難されたからつてわけ？　いや、そんな筈のあなたではない。そんなあなたではない』

『さうだそんな事ではないのだ』

『では何でせう。私が外に誰か愛してゐようつて疑つてゐらつしやる？』

『そんな事はない』

『ぢや、私の愛が足りない』

『お前は愛してくれた』

『では倦きた？』

『倦いてゐない』

『まあ、何と云ふ事でせう』私はだんだんに感情が張り、心がいら立つた。私は男ののどを締め付けてやりたいやうな氣持になつた。

『では何でせう。はつきり云つて下さい。そしてその離別のわけが分つたら別れますもの別れねばならぬわけを云つて下さい。さうすれば別れますもの……

『何と云ふ悲しい事でせうね』と私は思はず涙をうかべて叫んだ。『長く苦しめないで、一思ひに云つて下さい。そして私の考へも云ひたい』

『あゝ云はう……』と男は云つた、しかし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それはむづかしい事であつた。彼はとうとうもの云はずに紙のはしに文字を書いた。しかし平假名で一字づゝ上に書いて書き消すので、何であるかが分らない。

『何故私をぢらすの?』私は思はず男の膝に自分を突きつけて云つた。ふとこの刹那に男を刺して同じそのナイフで自分の胸をも刺したいやうな生醒い氣持になつてどきどきとした。と、男はとうとう決心をしたやうに『ではこれを見てくれ』と云つた。子供のやうなはにかみをして。

男の足は雪のやうに白かつた。しかし今その股のところに毒々しい紫色にぎらぎらした腫物が惡魔の眼のやうに盛り上つて光つてゐた。これを見てくれと云つた男の顔色には、私の心を讀むやうなおびえるやうな感情があつた。私はぢつとその盛り上つて光つてゐる腫物を見つめてゐた。『これが何だと云ふの?』私は男の蒼くやつれた頤に手をかけて思はずほゝゑんで云つた。

『おできが出來たからつて別れなくつてもいいでせう?』

『あなたは神經過敏だからもうこのおでき一つで私と別れねばならぬ空想が出來上つたのでせうけども、なほしてあげるわ、なぜ隱してゐたの、惡い病氣でもない癖に』

『いや、惡いのかも知れない』と男は眞劍に、信じねばならないやうに云つた。『だからお前がかわいさうだから別れようと思つた』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『惡い病氣ならこんなものではない』

『お前に分るのか』と男は云つた。『分らないのだ？』と云ひつづけた。

『分るにしろ分らないにしろ……』と私は怒つて云つた。『あなたは私を信じてくれないのですか。もしかあなたがさうだつたら一層私があなたを愛するつてことが、一層私が親切になり、一層あなたを私のものにして、あなたのゆくところまでどこまでもどこまでも私がついてゆくつてことが、それを信ずることがあなたに出來ない？　あなたはそんな筈の人ではなかつた。決してそんな筈の人ではなかつた……』私は男を叱らずには居られなかつた。

二人はそれきり何も云はず靜かに笑つて手を握つた。男の顏色は朝紅のやうに晴れたふたりで出てゆかうね。本郷へ』

『ええ』さうして二人は家を出た。

大學裏の煉瓦の長い長い道を二人は並んで歩いた。男は跛をひきながら。二人の前には二つの暗い小さい貧しげな影が落ちてゐた。化學教室や、地震學教室の前を通つて、ずんずんと行つた。町に出てしばらくした頃ある門構への家を指さして男は云つた。『露西亞から來てゐたエリセエフの居た家は此處だつたのだ……』

その日の夕方醫者は腫物を見て笑つて云つた。『ちつとも心配なおできではありませんよ。口が立てば直ぐなほりますとも……』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は母親のやうな心持でその繃帶を巻きながら云つた。『困つた神經やさん。自分が人殺しをやつたのではないかと思ふと思ひ付いたら、もう人を殺したにちがひないやうな風に考へてその當事者らしくなりすまして了ふあなたはそんな人ね……。

そして私は笑つて彼の手にせつぷんした。

氣にかけるなと或人は云つてくれた。私もさう思ふ、しかし飽迄も氣にかけて苦しみ扳いた上句にさうなるより外はない。それは私の性格から來てゐるのだ。そこで私の性格に從へば犧牲を拂つてそれに到達するより外はない。人に氣を兼ねすぎるのは惡いと他のある人が云つてくれた。私もさう思ふ、しかし飽迄も人に氣を兼ねて苦しみ扳いた上句それらの人を抱擁して後の超越した心持のそれになるより外はない。私はもつと物事を氣にし、もつと他人に氣を兼ねねばならないのである。それはもつと自分の性格にしたがふ爲めの努力である。それはもつと自分の愛を他人に廣げるための精進である。

未婚の時、私は自分はかうしたい、自分はかうなりたいと日夜思つてそれの爲に努めた。今私はあの人をかうしたい、あの人をかうさせたいと日夜思つてそれの爲に心を碎いてゐる。いつの間にか單に自分のことを思ふことがなくなつて了つた。這へば

立て、立てば歩めと心をあせる母親のやうな心持で私は自分の男のよくなることを努めてゐる。男をよくすることによつて自分がよくならうと思つてゐる。もし男がよくならなかつたらそれは私の罪なのである。しかもこの慾望は一つとして苦痛に向つてゐないものがない。愛することは苦しむことだと云ふことが今更におもはれる。だが苦しみを怖れてはならない。そしてただ自分を——自分である男を——よりよくすることの爲にのみ苦しむのが意義があるのだ。私は躊躇せずまた逃げずに苦痛に向いていとなみをつづけて行かう。

——四月十二日——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

噓言と云ふことに就いての追想

野枝

噓言を吐くと云ふことは惡いことだと私達はずつと小さい時から敎へられて來ました。これは恐らく一番いけないことに違ひはありません。けれど私たちが今迄過ごして來たいろ〳〵なことについてふり返つて考へて見ますとき、私は何れの場合に於ても私の眞實は恐らく――それが復雜であればある程、また心理的に傾く程、――一つも受け入れては貰へなかつたにもかゝはらず、私の虛僞は深ければ深い程都合よく受けられました。それは本當に僞りのない、眞實な心として。

私の單純な幼い心は、たゞ一途に年長者たちに受け入れられると云ふことですべては打ち消されて何の不安も罪惡も感じませんでした。けれども刻々に變化してゆく私の心はだん〳〵にそれ等のことに向つて目をみはつて來ました。私がぢつと自分の噓を用ゐることについて見てゐて一番に見つけ出したことは、具體的な事柄について噓を吐いたときにはそして、それが惡氣のない一時のごまかしであればある程最も多くの叱責をうけました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しかしそれにしても、だん／＼にずるくなつて來て嘘に技巧を用ゐるやうになれば大方はそれが現はれないですんで仕舞ひます。まして氣持の上の僞はりとか何とかになりますと殆んど何の問題にもならず他人の目にもふれずにすんでしまひます。もしそれを強ひて正直に人に說明しやうとでもするが最後それは全く飛んでもない誤解をうけて思ひがけない結果をもたらします。

「正直でなくてはならない。」と口癖に云つてゐる人々が不思議に正直でばかりはゐませんでした。私が大人と云ふもののつまらない叱責や何かを受けたくない爲めに嘘をこしらへて云ふのには自分ながら本當にわるいと云ふことを自覺してゐました。しかし、大人の嘘を見出す爲め「手段の爲め」の嘘は許さるべきものだと段々深く思ひ込むやうになりました。けれども他の嘘はめつたに吐いたことはありませんでした。大人の嘘をわるいともきたないとも思つたことはありませんでした。けれどもそれは私がたしか、十四の時だと思ひます。私にとつては恐らく一生涯忘れることの出來ない事がありました。大人の汚い心をまざ／＼と見せつけられました。私の小さい心は怒りと驚きにふるへました。私はそのとき大人の醜い僞りと疑ひを知りました。私は十四になる迄にはかなり他の人たちの少女時代よりも複雑な境遇を經て來ました。けれども私は隨分單純でした。私たちの尊敬す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る學校の先生たちが勿論私たちにいろんなことをおさとしになる程何處も彼處もとゝのつた人だとは信じはしませんけれどもまさかに、そんなにも度はづれな疑ひやあとかたもないうそをついて生徒をいぢめるなどとは全く思ひもよらないことでした。

私が故郷の高等小學校の四年のときでした。私は、四年の十一月に長崎の學校から轉じて來ましたので其處の田舍の學校の質素な所謂校風にはまだまるきりなれてゐませんでした。それにそれ迄ゐた長崎の學校の受持敎師のYと云ふ敎師は非常に生徒を自由にさしてゐられたのです。少しも干渉らしいことをしたり云つたりされないのでした。それで私たちはずいぶん腕白でした。田舍にかへつて來てからも私は矢張り同じやうに無邪氣に飛んだりはねたりしてゐました。校長室や職員室に恐れ氣もなくづか〱はいつてゆけるのも私位のものでした。私のさういつた態度は始終、もう四年を最高級として、もう一人前の女として取り扱はうとしてゐる女の先生からは、つゝしみのないおてんばな娘として惡くまれてゐました。けれど私がさうした事を氣づく筈がありません。大部分の先生達は、私の快活を可愛がつて下さいました。私はそれによつてます〱增長したと云つた調子でした。

受持の先生は、Tと云ふやさしい女の先生でした。ほんとに、「やさしい」と云ふこと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ばで完全にその人のすべてを云ひつくせる人でした。その人は私を本當の妹のやうに可愛がつて下さいました。寂しいその先生はいつも私のおしやべりや歌やそれからお轉婆な動作を見ては含み笑ひをしてゐました。私ばかりではなく私たちの級の人たちは皆この氣の弱い先生をなつかしがつて大切にしてゐました。

私が長崎にゆく前丁度筑後からかへつて來て、少しの間矢張りこの學校にゐましたときこの學校にゐたHと云ふ先生が私が長崎からかへつたときには波多江と云ふ處の小學校の校長になつて私の通つてゐる學校から半里ばかり先きの川縁の學校にゐました。その學校は私が尋常の一年に一寸敎はつたことのある方で私の家の直ぐ傍のKと云ふ女の先生も矢張り出てゐました。H先生もK先生も非常に私を可愛がつてくれました。私は始終學校の歸りを其處により道をしては遊びくらしてK先生と一緒にかへつて來ました。其處ではよくテニスをして遊びました。私の行つてゐる學校ではテニスの道具はありましたけれどそれは先生方の道具で先生丈けしかそれではあそぶことが出來ませんでした。私は波多江に行つてテニスが出來たりオルガンを彈ひたりすることが出來るのがうれしいので一週に一度や二度は屹度あそびにゆきました。

或る日、矢張り私は、前から約束しておきましたので其處へ出かけてゆきました。しばらくあそんでゐるうちに急に天氣がわるくなつて大變なあらしになつて仕舞ひました。私は困つて仕舞ひました。外は、二三間先きも見えない程ひどい雨が降つて、おまけに風がピユー〳〵うなつて來るのです。止むか〳〵と思つて待つてゐるうちに夜になつて仕舞ひました。私は途方に暮れてゐましたがとても今日はこれではこれから二里以上の道を歩いてはかへれないからとK先生が明日私の家にはよく譯けをはなして詫びることになつて一緒にとまる事になりました。そして私たちはK先生もH先生も知つてゐるYと云ふ學校の直ぐそばの家に泊りました。H先生も學校の宿直室に泊ることになつたのです。

その翌日は幸ひにも雨はあがつてゐました。私は朝はやくおきて一たん家へかへつてそれから學校にゆかうと思つたのですか私の寢坊は學校の前を通りこして家へかへつてまた出直す程の時間の余裕をもてる程はやくは起きませんでしたので仕方なしにそのまゝ學校にゆきました。

私の一つ困つた事はその日圖書があるのにその用意をしてゐなかつたことです。殊にその圖書の先生は私を一番惡がつてゐたSと云ふ先生だつたのです。それに、その先生はこの學校の規則と云ふことを非常にやかましくいふ人だつたのです。「道亡」と云ふ言葉も

非常に主張してゐたのです。それはわすれものをした人につける名で監督日記の或る處にちやんとそう云ふ欄がもうけてあつて、針一本の忘れ物でも嚴重に其處につけられて罰せられるのでした。私は其處に幾度かつけられました。私はありとあらゆるものに向つて一時に注意を向けることの出來ない性質でした。今でもさうですが一つの事を考へてゐれば屹度他のことは忘れて仕舞ひました。それでおとし物や物忘れは私にとつては珍らしいことではありませんでした。それで一度や二度罰せられた位では何の効もないのでした。S先生はそれを私の横着として見てゐました。私はS先生の目からは仕方のない横着者なのでした。私はさうしてS先生から睨まれてゐながらやつぱりぼんやりしてはS先生の氣にさはるやうな事ばかり意地わるく仕出來かしてゐました。後になつて、あれはS先生の御機嫌をわるくする事だつたと氣づきますけれどもやつてゐるときには一向そんなことには氣がつきませんから平氣なのです。そんな風で私はS先生からは一方ならぬ奴だとされてゐたのでした。私は圖書の用意をしてゐないことが一寸いやな氣がしましたけれども學校に行つて先生の顏を見るなり直ぐに斷はりました。

「先生、昨夜他へとまりましたので圖書の用意をして來ることが出來ませんでした。」

先生は意地の惡いかほをして笑ひながら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「そんなことを云つて誤魔化さうとするのでせう？　本當は忘れて來たのでせう」
「いゝえ、本當に泊つたのです」
「そんなら何故昨日その用意をしておかなかつたのです。」
「でも先生、昨日は泊るつもりではなかつたのです。」
「一體何處に泊つたのです」
「波多江に」
「波多江？　波多江の何處です。」
「私はよく知りませんがYとか云ふ家です。」
「Y？　フフン、H先生の處へ行つたんですね」
「えゝ」
「H先生と一緒に泊つたのですか」
「いゝえ、H先生は學校に、K先生と私丈けがYに」
先生は意地惡く私の顏を見ながらそのまゝ默つて向ふの方へ行かれました。私は子供ながらも無禮なS先生の問ひ方や態度に激しい憤りを覺えながらもS先生に斷つたと云ふ安神でその時間が來る迄は圖書のことなどはけろりと忘れてゐました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

時間前になつて皆が机の上に筆洗や繪の具皿などを並べて用意にかゝつたときに私は、すつかり消氣て仕舞ひました。S先生ははいつて來るなり、私の方に冷たい視線を投げて知らぬ顔をしたなりに、外の方達の繪の具の混せ方や何かに注意を與へてゐました。私は何をしていゝかわらなくて呆然としてゐました。S先生が直ぐ傍を通りかゝつたときに私は何をしたらいゝか聞いて見ました。すると、

「何でも御勝手に、」とツンとしてあちらへ行つておしまひになりました。

私は仕方なしに、鉛筆をもつていろ〱な物の輪廓をとつて見たりなんかしてゐましたけれどもそれにもちつとも興味が續きませんのでボンヤリ隣席の人の彩色するのなんか眺めてゐました。そうしてやつと一時間が濟んでほつとしました。S先生にはずゐぶん腹がたちましたけれどつまらない一つことにながく怒つてゐられない私は何時の間にか次の時間には忘れるともなく忘れて一生懸命に理科の説明をきいてゐました。

五時間の授業がすみまして私が歸りかけたときにT先生が少し用があるから殘つてゐらつしやいと他の級の生徒にことづけてよこされました。私は何の用なのかと思つてお當番の加勢をしたりして何時迄まつても何の沙汰もないので私はもしか先生が忘れてお出になるのかもしれないと思つて聞きにゆかうとする頃やうやく先生はむかうからお出になつて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こちらへゐらつしやいと、廊下の角に私をまたせて一たん職員室にはいつて御自分の傍の火鉢をかゝえて出て來て、一緒に二階の講堂にゆきました。講堂はがらんとした廣い〳〵室でした。おちつき處もないやう その冷たい室にはいるなり私は泣き出したくなりました。何故今迄もまたしておいて先生はこんな處に私をお連れ込みになるのだらうと思ひますとT先生に、腹がたつて來るのでした。先生は其處に澤山ならんでゐる。小さな木の腰掛の上に抱へて來た火鉢をおいて默つて立つてゐる私に手まねぎをなさいました。私はだまつてその傍にゆきました。暫らく兩方でだまつてゐました。

「あなたは、昨夜何處かへ泊つたんですつてね」

すこしたつてT先生は尋ねました。

「え〻、波多江のYと云ふ家に泊りました。」

「其處はお料理家ださうですね」

「さうですか、私は何にも知りませんけれど夜になつてK先生と一緒に泊りにゆきました、そんなことはすこしも知りません」

「さうでせうね、ですけれどS先生は大變いけないつて云つてゐらつしやいますよ。それはお家のお許しもなかつたのでせう?」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「えゝ、だつてK先生と一緒にかへる筈でしたけれどあのあらしでかへれませんでしたから仕方なしに泊りました。今日うちにはK先生がよくわけを話して下さることになつてゐます。」

「さうですか、けれどもS先生はおうちのおゆるしもないのにそんな家に泊つたと云ふことは大變いけないと云つてらつしやいます。それにあすこが料理屋だと云ふことを知らない筈はないからきつと知らないなどゝうそをつくだらうと云つてゐらつしやいますよ。」

「先生、私はあの近所は學校以外に何處も知りません。そしてYと云ふ家は生徒の家ださうです。私はうそは云ひません。もしうそだとお思ひになりますならばK先生にお聞き下さればおわかりになります。昨日のあらしに、どうして私一人で暗くなつてから歸れませう。本當に仕方なしに泊つたのです。」私は、それ丈け云ひますと涙がこみ上げて來て唇がふるえて口がきけなくなりました。私はたゞH先生とK先生との處へあそびに行つた。そしてかへる時間にひどいあらしになつて夜になつてもやまない。乘物も何にもないのにあんなさびしい道を二里以上も私がかへれないと云ふことを誰が不思議に思はう、止むを得ずすゝめられるまゝに不安ながらどうすることも出來ないで泊つた。其れがどうしていけないことなのか私にはどうしてもこうしてさむい處に日暮近くまで待たされて叱かられ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る理由を見出しかねました。私は理由もなしに虐待されるのだと思つたときにS先生の惡々しい朝からの容子を思ひ出さずにはゐられませんでした。それにまたT先生までがこの理由もないことに一緒になつてお叱りになると思つたとき私は悲しさと腹立たしさが一ぱいになつたのです。膝の上においた私の手の甲に涙がボタボタ落ちました。私はだまつて泣いてゐました。暫くして涙を拭いて火鉢の赤火を見るともなく見てゐますとその灰の中に先生の涙がボトリボトリ續けさまに落ちてゐます。ハツとして先生の顔を見ますとT先生は泣いてお出になりました。先生が何か云はうとなすつたとき階段に足音がしてたれかゞ來るけはいがしました。直ぐ入口に校長の姿が見えました。私はだまつて校長の顔を見ました。先生は丁寧に頭をお下げになりました。私も一緒に頭を下げました。校長はだまつてそこの高いプラトフオームにたちました。そして其處の大きな卓子の前の椅子に腰をかけました。瞬間に私は校長からも叱られるのだと思ひました。此度は私はもう泣きませんでした。私の小さな體は激昂に炎えてゐました。私はぢつと校長の顔を睨みました。校長も白い目をして私を見つめました。何時までも私は校長をにらんで校長も私をにらみながらだまつてゐました。

「校長先生のお前にゐらつしやい」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

消え入るやうな聲でT先生が仰云ひました。

私は體中を反抗の血で一杯にしてわく〳〵させながら校長の前に立ちました。たつて私がまつすぐ目をやりますと校長の膝のあたりにしか私の頭はとゞきませんでした。私は校長の顏を見やうとすればイヤと云ふ程仰向かねばなりませんでした。校長はしばらくして咳ばらひをしながら、丁度今一寸前にT先生が私に尋ねたと同じ順序で同じ事を尋ねました。私は同じことを答へました。最後に校長は云ひました。

「あなたの云ふのはうそではないかもしれないけれども父母の許もうけずに他へ泊るなどといふことは大變わるいことです。お父さんやお母さんがどんなに御心配なさるかもしれません。第一さういふ遠い處に學校のかへりにあそびにゆくと云ふのがまちがひです。」

「でも先生、何時でも行くんです。そしてK先生と一所に何時でもかへりますから家ではよく承知してゐるのです。昨日もあすこに行つたことは家でも知つてゐますから、あんなあらしになつてとてもかへれなかつたと云ふことは家の人にもわかつてゐますし、K先生もおかへりになつてはゐませんから。――」

「まあお待ちなさい。あなたは一體つゝしみをしらない。私がまだ話して了はないうちに何を云ふのです、私はあなたの先生ですぞ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

校長先生はまつ青になつて怒りました。

「女はもう少し女らしくするものです。第一もうあなた位の年になれば遊ぶことよりも少しでも家の手傳ひでもすることを考へなくてはならない。昨日のことは仕方がなかつたとしてももしもあなたがもつと女らしい、心がけのいゝ人ならあんな處に遊びに出かけることもないだらうしそうすればあんな間違ひはおこらない。第一不意にさうして心配をかけることもないし學科にさしさはりの出來るやうなこともないし、常々うちの手傳ひでもしてゐれば家の爲めにもどの位なるかしれない。それにあなたは何だつてHさんの學校へなどあそびにゆくのです。あなたはあすこの學校へ何の關係があります。關係もない處に遊びに行つて泊るなどゝ實にけしからん事です。あなたはどんなに惡い事をしたのか分つてゐますか?」

「私は何にも惡いことは一つもしません、惡いことなんか一つもしません」

私はせき込んで漸くそれ丈け出來るかぎりの力をこめて叫びました。實際私は何にも惡いことはしませんでした。惡いことをしたといふ意識は何處を叩いてもありませんでした。そうして私は何一つかくさずにありのまゝを云ひました。私の小さな頭をしぼりつくしていくら惡い理由をこしらへやうとしても出來ませんでした。私はわるいことなんか一つも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した覺えはない！　もう一度自分の心の中でさう叫びながら私は眞青になりました。立つてゐる足が體をさゝえきれない程に震へるのでした。

「それ、そんな傲慢なことをまた云ふ。これがどうして悪いことでないと云へます。あなたは少しも物の道理をしらない、長上を尊敬することをしらない。いくら、學科が出來やうと何しようと愼しみのない女は人の上にたつ資格はありません。以後再びこんなことがあれば決して、許しておけませんからそのつもりで――」

おしまへに力を入れてそれ丈け云ふともう小暗くなつた廣い室の中をおちつきもなく睨みまはしてそゝくさと降りてお出になりました。實際はまだ隨分いろ／＼と頑迷な理窟をならべたのですけれどももう五六年も前のことで一々ハツキリとは覺えて居ません。校長が出てゆくと私の頭の中は一時に眞暗になつてガン／＼鳴り出しました。私はT先生の其處にゐることなどは忘れてしまつて見むきもしないで下にかけおりるなり眞暗な教室に荷物をとりにはいりました。私はしばらくそこに腰をかけて机の上につつ伏してゐました。涙はあとから／＼と湧き出て來るのです。二十分位もさうやつてゐてふと日が暮れたことに氣がつきますと私は、いそいで、包みをひろげて包み殘りのものをすつかり机の中から出して机の中はきれいな反古紙で拭いて何にも殘さないやうに包みました。私はこの不條

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

理な叱責を公平な父につげて明日からは學校にゆかない決心をしたのでした。外に出ると日はもうすつかり暮れてしまつて寒さは強いし、道はこねかへしたやうに、悪くてひくい下駄では滿足には歩けませんでした。そんな暗い悪い、人通りもない道を一里以上も泣きながらかへつてゆきました。

K先生は約束のとほりに家にわけを話して下さいました。勿論家のものもあのあらしではさ少しも氣にかけてはゐませんでした。そして却つて私の今日のかへりのおそいことに氣をもんでゐました、私はかへるなり袴もとらずに明るいランプの下で近所の人と世間話をしてゐた父の前に座つて今日の不法な先生の態度や叱責を委しくはなして明日からはもうあの學校には行かないと結びました。父は一ことも返事らしいことも何にも云ひませんで默つてゐました。

翌日もその翌日も友達が誘ひに來ても斷はつて學校へはゆかずに終日古い本箱のふたをあけたり、犬をいぢつたりして祖母のそばで暮しました。二日目の夕方私が夕御飯前を犬にからかひながら松原へあそびに出たるすにT先生がうちに來られて父としばらく話をしてそれから私をたづねて松原へ出てお出になりました。そして、出會ふといきなり先生は私の手をしつかり握つてごもり／＼私におわびを仰云るのでした。それは自分がよはいた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

めに職員室で大勢の方たちの前で私のわるいことをいろ〳〵ならべたてゝあんな子供を訓戒も何にもあたへずに放つておくといふ法はないと云ふことをしきりにT先生にS先生があてこすつたのを、見かねたやうな顔をしてMと云ふ先生があなたが云ひにくければ校長にたのんで訓して貰つた方がいゝではないか、校長には自分がたのんでやると仰云つたのでつい心よはさからM先生がS先生と同じ腹の人だと云ふことをしりながらいやだとも云へないで「自分がゆき屆かないのだからいゝやうになすつて下さい」と云ふよりしかたがなかつた。自分は何と云ふふがひないものだらう。とT先生は私に涙と一緒に其處にしやがんで話されるのでした。さうして何卒自分を許して明日から學校に出てくれ、たのむと先生は手をつかないばかりに仰言ひますので私も出る氣になりましたけれどもう學校は決して樂しい處ではなくなりました。私は二度と再び職員室になんかはいるものかと思ひました。

其の次に私がH先生に會ひましたときに先生は意外にも、

「此の間の日曜にSさんに會つたら、Yさんが波多江のYに野枝さんがあなたと一緒にとまつたと云ふことについて大變怒つて、本當に、野枝さんが可愛さうなやうでした。おまけに、校長に迄訓戒をさせるんですもの何にも別にわるいことはないぢやありませんか、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

野枝さんは、K先生と泊つたと云つてゐるのにH先生と泊つたのでうそをついてゐるのだとさういつてらつしやるのですよと云ふので、私はそれはちがひます、僕はあの晩はC君一と緒に學校にとまりました。Kさんと野枝さんがYにとまつたのです。と云つたら、さうでせうね私は吃度さうなんだと云ひますのにね、きかないんですものMさんと相談して校長の處にそんなつまらないことを持ち込んでゆくのですもの本當に可愛さうぢやありませんか、それ丁度とまつた翌日は私の圖書があることになつてゐましたのにね野枝さんは用意してゐなかつたので私に大變すまないから放つておいてくれなんてTさんは云ふのですよ、あんな優しさうな顏してゐながら本當にえらい事を仰云ひます。可愛さうに野枝さんは二日ばかり學校に來なかつたんですよ、あんまりTさんは下らないことに迄干渉しすぎますなんてしきりにT先生の惡口を云つてゐたよ、私は別に何とも云はなかつたけれど先生ひとりで怒つてゐた。何つて云つて叱かられたの」

「噓！　噓つきね、S先生は！」

私は驚ろいてにはかには云ふことも失つてしまふ程でした。私のあたまがどんなに子供の頭でもそれが立派なこしらへた噓だといふことは分りますのに、先生がまあそんな醜いうそをついて迄自分を保たうとしてその爲めに善良なT先生迄も貶すと云ふことがどれ程

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私にとつて驚くべきことであつたか分りませんでした。私の頭はひつくりかへるやうなさはぎでした。もう一二年もたつてからの私ならばその位のうそに驚きはしませんけれど、私の考てゐた大人の嘘とはあんまりにちがつてゐました。自分の惡いことをそのまゝ他人になすりつけて自分丈けがいゝ子になると云ふことがどの位わるいたくらみに見えたかしれませんその日は全く私はろくに口もきかずにかへりました。そして私はT先生に一晩中かゝつて永い手紙を書きました。今日H先生にきいたことは一句もらさず書きました。そうしてS先生は何といふ恐ろしい方でせうと書きました。やがてT先生から御返事が來ました。それにはS先生としてはあの位のことが何でもないことであることやもつと大人と云ふものは穢い心を澤山もつてゐることや自分でも心の中にはずつとそれよりも汚い惡いことを考へてゐるかもしれないと云ふこと等がならべてありました。そうして自分のそんな事を考へてゐると先生などはとても出來る資格のないことを思ふ。と云ふやうなことがながく／＼分りやすい言葉で書いてありました。

私が此處に何の爲めにこんな叙事を長くつゞけたかおわかりにならない方があるかもしれません。私は「嘘」と云ふ言葉を思ひ出すと何時もこのことを考へ出さずにはゐられな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い程強くこの事は私の頭の中に印象を殘したのです。こんなことはざらに其處らに轉がつてゐます。けれどそれはまだほんの子供の小さな頭でうそと云ふものは本當のことを云つて叱られると云ふやうな場合ひにたゞその叱責をのがれる爲めに吐くといふ——しかもそれは子供にとつてはしかられるやうな事を仕出來かしてもその仕出來かした動機は自分でも正しいと得心が出來る事なのでそれを叱られないやうに嘘をつくと云ふことが別に惡いことではないと無意識に思ひ込んでしまふのだ。（その罪は實際は大人にある）——位な考へしか持つてゐないのにいきなりそんな醜いうそを見せられたのです。本當におどろかずにはゐられません。

　けれども私が學校を卒業してだん／＼時がたつにつれてその嘘は何でもなくなりましたけれどそのかはり此度は私が校長に何の爲に叱られたかゞ分らなくなりました。私は或る時ふつと思ひついてS先生も校長もH先生もT先生もよく知つてゐる人にそのことを話ました。するとその人は突然皮肉な聲で哄笑しながら

「あゝSですか、なに、あの女の例ものやきもちからさ、あなたはまだ小さくてわからなかつたらうがいゝ迷惑さね、あなたがあの女には大人並に見えた迄さハヽヽハヽいゝ目に會ひましたね」

嘲けるやうな目付きをその人はしました。それを聞いてから私の不快な印象は更に深みをましました。そうしてS先生の嘘がまたよみ返つて來て多くの意味を持つて考へられるやうになりました。

私にとつてはこの印象は一日も今迄わすれられないものゝ一つです。これ程すべてに淡泊すぎる程忘れることのはげしい怠けもの(?)の頭に深くきざみつけられてゐるのです。一生どり返すことの出來ない屈辱が時々あたまをもたげます。けれども私のこの苦い印象は私に、いろ／＼なことを敎へてくれました。嘘といへば直ぐこのことを思ひ出すことが出來る程の印象を私がもつてゐることは私自身の嘘を警戒するばかりでなく私は私の子供の爲めにも一つの幸ひであることを思ひますと、私は本當に尊いものを一つ持つてゐることを感じます。私は私のこの追想がこれを讀んで下さる方に何かの影をおとす丈けでも滿足に思ひます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

□今月號は大變後れてしまひました。以後はこんなことのないやうに氣をつけます、勿論これはあながち私が怠けた爲でなく大部分は印刷所の都合に由るのです。

□毎號不着のハガキがきつと一二枚づゝは來ますがなるべくならば十日以前におしらせが願ひたいのです。月半後は往々品切になることがあつてお送りが出來ませんから。

□らいてう氏はしばらく胃腸病でやすんでゐらつしやいましたが此の頃は餘程いゝやうです。毎週日曜日午前が面會日です。

□此度の總選擧に婦人の運動者が多かつたと云つて首相や内相が英國の女權運動の如き運動の導火線になると困るとか何とか云つて禁止の意を仄めかせられたと云ふことについて新聞が大變なことのやうに擧つて報導した。併し日本の官權の頑迷は今はじまつた事ではない。それは如何にも彼等の考へさうなことである。その彼等の心情は憫笑に價するけれども私は世間の人が氣にする程戸別訪問の價値も認めないし、それが禁止されたとて何も大したことはあるまいと思ふ。また眞にその禁止に向つて抵抗の出來る力をもつた婦人が幾人あるかと考へると私は到底禁止を防害することなんか思ひもよらないとだと思ふ。もし眞に必要にせまられた、根底のある、權威のある運動ならばどうしたつて官權の禁止位は何でもなく抵抗が出來る筈だ。またそんなことを氣にもしてはゐないだらう。併し日本の婦人の社會的な運動がそれ程までの力をもつて現はれる日がそんなにも近い日であるとは私には思へない。その頃にはもう少しは若い人たちの權威の時代であるかもしれない。

□私の卒業した女學校に此の頃或る轉機が來て頻りに動搖してゐる。私は學校を出てから四年の間一度もよりつかなかつたやうな冷淡な卒業生であつた。學校側でも同窓會があらうと音樂會があらうと、バザーがあらうと、一片の通知もよこさなかつた。私は全く異端視されてゐた。卒業生仲間でもさうだつた。私は學校に對しては何のつながりも感じはしなかつた。けれども學校の中心になつてゐる二先生丈けはどうしても學校と同一視しては仕舞へないでゐた。此度その先生お二人が辭職なすつたと云ふさはぎ私は突然に再三同窓會の大會に出席することをすゝめられた。初めて學校を出てから、同窓會の出席の勸誘をうけたのだ。私は多くの人の勝手に呆れながらも先生への愛感に引きづられて、出席した。けれども私は、反感と侮蔑と失望でかへつて來た。私の愛する先生はあまりに理想家で單純

でした。そうして衰えさかる自分の激情の爲めにかなりおちつきを失つてゐるらしく思はれました。先生の爲めに、東奔西走した人たちは皆先生のその激情にまきこまれて昂奮してすべての存在を無視してたゞ先生をのみ立てやうとしてゐるらしく私には見えました。私はその心持ちに深い同感をもつことが出來る。けれども考へのない彼女等の昂奮は先生をます〱盲目にするらしく思はれました。ともすれば先生の正しい道をにごしさうになりました。私の同窓生はみんな單純な理想家でした。現實を無視してゐました。彼女等は母校と校長にもゆるやうな反感を持つてゐた。けれども彼女等は自分たちの大切な相談の上にはその對象を無視して平氣でゐられるのであつた。私は不思議に思はずにはゐられませんでした。そうして大多數の人はみんなをとなしく口をつぐみ手をつかれて何でも賛成してゐさへすればいゝと云ふ態度だ。私は少しの間にすつかり退屈してしまつた。そうして今更ながらあまりにひどい思想の懸隔が氣味わるくも思はれるのであつた。そして先生の十年の努力の結果がこれ丈けのものにしか現はれなかつたと云ふことを考へて私はかなしくなつた。私自身が或る愛を深く自覺しながら單純に先生を信頼し尊敬することの出來ないことを不思議だとも矛盾だとも思へなくなつて仕舞つたのだ。私はあらゆる「關係」と云ふものが意義あることに思へたりまた一方ではもつとも煩はしい、呪はしい事に思はれてならない。

□自分の歩いてゆく道をぢつと見てゐるとおもしろい。この頃私は自分の目前に展開して來る事象について多く考へるやうになつた。それ丈けでもよほど自分の歩いてゐる道が以前から見るとちがつて來たことが自覺される。ましていろいろな細かいことを考へてゐたら隨分さういふ實證はあげられるだらうと思ふ。自分にその歩いてゆく道の變化が見える間は大丈夫だとひそかに思つてゐる。それがわからなくなつたときは、墓をさがす時だ。何時までも進んでゆきたい。(野枝)

病床より　皐月

理想家と云ふ言葉をよく聞く。けれど今迄特にそれに付いて考へた事はなかつた。只理論として理想を考へる丈けで、それに達せんとする即ち現實と理想との隔りを接近せしめんとする努力を當然の、而して止むを得ざる不可能事としてあきらめたり、又は天から考へなかつたりして居る人達をさして理想家と云つて居るのだらう位に定めて居た。

然しそれは私一箇の考で、世の中の理想家と云ふのはどれ位の處なのかまだ知らない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よくそれは理想家の言で實行出來ないとか、そんな事は要するに理想に過ぎない。到底なし得る事でない。など〻達觀したらしい口吻を往々聞く。そして若い人より中年以上の人に多く聞く。さう云ふ時私には顔を對手より一寸そらして半ば上向きに眼をふし閉ぢた妙に濟ました顔が頭の中に生きる。

こんな言動を見たり聞いたりする度に今度は理想の意義が謎になつて來る。

然し生きてるのも私、考へてるのも私、實行して行くのも私なんだから、私は私の生きる事、考へる事、やつて行く事を正直に云へばいゝのである。

生命の進歩の可能性を肯定してこそ理想の意義は成立す。

現實味を味索し得てこそはじめて理想に對しての眞欲求の意義は生ず。

爲し能ふが故に理想である。爲すべき物なるが故に理想である。

「要するに理想に過ぎない」なら理想も有難くはないものだ。さう達觀して了ふ位なら。

然し「過ぎなく」するものは何人なのだらう。人間は理想を考へてそれに向うてぐん／＼歩けばいゝのだ。進めばいゝのだ。達し得るか否かは理想と現實の間にスペースを持つ神ならぬ人間の、おこがましく考へる處ではない。人間は理想が理想として是か非か、眞か僞かを充分愼重に考へれば澤山だ。そしてそれが一番大切で又至難だ。どうも中年以上、換言すれば現實に多く打突かつて人間の弱さを多く經驗した人達に雜作なく事をきめ込んで納り返つて居る人が多い様だ。

「自分にさへ漸々此處まで來たのにフンお前にや骨が折れようさ。第一骨の折り様も知らない」と云ふ工合に腕ぐみをして山の中腹に憩ひ乍ら下から來るものを蔑視して居る形だ。其處迄納り返へらないにしても自分の通つて來た路の荊棘を斷ち切る時の自分の刄物の剪れなかつた事を、それ許りを人の上にも考へる。決して後の人がなまくら刄物を燒いては打ち、打つては研ぎする努力に打勝つかもしれない事を考へない。人間の努力は當然打勝ち得るものださ云ふ信念が經驗と云ふ利口物の蔭に隱されて居る事などはきれいに忘れて居る。そして利口な經驗は只何時迄經つてもなまくらで剪れ味の出ないうちに、荊棘がぐん／＼手足を取卷いて二進も三進も行かれなくなる時の事を心配して居る。年長者のみ持ち得る親

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

切と心得て居る。決して いばらに刺され乍らも勝鬨を揚げてる事に氣が付かない。

人間は神でない。理想と現實が 目の前で握手しないのは當然だ。否其處に 人間の努力が生き、 生活が生れ、 而して人間の價値が 生ずるのではないか。

私は神でなかつた事を 此上なく歡ぶと同時に、 肯定した理想に勇猛に、 然も單純に 突進し得る人間のみに與へられた壯快を此上なく喜ぶものである。

理想家と云つても い ゝ。云はなくともい ゝ。實行家と云つてもい ゝ。云はなくさもい ゝ。只夫れがい ゝ事と自分の心に極りが 付いたら其方に自分を押進めて行くだけである。其間の幾多の困難と 苦痛とは人間の涙を要求して止まないだらう。 涙の後に愍痴の潜む時 それは弱者である。涙の後に勇氣の動く時 それは强者である。

理想は空想ではない。爲し能ふが故にこそ理想 である不斷の努力を惜しまないものに 到達し得らるべきである。 努力に吝なるものには 理想も遂に理想ではない。

「妥協に關する斷片的考察」（反響三月號生田長江氏）の中に

「それが一歩づゝでも 現實から理想へ引上げて來る時は所謂妥協の生活であつても 非難に値すべきものでない。それが半歩づゝでも理想から現實へ引下ろして 行く時は、 始めて嚴密に妥協の生活であり、 非難に値 すべき妥協の生活であるさ思ふ」 と云はれた。然して又

「一切の妥協を 容れざる生活とは詩人らしき詩人の空想である」 と斷定された。

餘りに廣義に「妥協」を用ひられた樣に私には思へる。餘りに妥協が廣義の爲に「一切の妥協を 容れざる生活云々」 の妥協の領分が不明瞭なので、 從つて折角の斷定も私には 力弱く感ぜられる。何故ならば如何なる詩人と雖も現實から理想へ一歩づゝても 引上げ來る生活を受け入れない筈はない。 又非難に價する 妥協なら詩人でなくとも眞人でなくとも受け入れないのに不思議はない。

「終局の目的を達する 上に便利の方法である時、 必要止むを得ざる方法である時、 唯一無二の 方法である時、 それは所謂妥協であつても 嚴密に妥協でない。 もしくは是認し得らるべき妥協である」 とある。

字句に拘泥する譯ではないが それが終局の目的を達する上に 常に唯一無二の方法である時、 決して嚴密に云は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なくとも妥協ではない様に思ふ。而してそれが便利の、必要止むを得ざる、方法であつても必ず唯一無二の方法の時にのみである。何故なれば一途を選んだ以上それが其時の其人の懸け換へのない唯一無二の途であらればならぬから。

故に妥協らしく見ゆるものと、妥協との區別は全々明瞭である。現實から理想に引上げる生活は現實に妥協したのではなく現實を征服したので、理想から現實に引下げる生活は理想が現實に妥協したのである。

要するに勇者は征服し、弱者は妥協し、中ぶらりんの人は征服と妥協の波の中に漂つて中途半端に浮いてゐるのである。

征服する丈けの勇氣と忍耐はなし、かと云つて妥協する程正直に臆病にもなれないで小さな城廓に閉ぢ籠つてゐるものは弱者を通り越して卑怯者である。

中年以上の經驗が産んだ達觀の中に丁度こんな形のお小休みが物知り顔に長者振つて居るのではなからうか。

私も最早や中年である。

（四月十三日）

寄贈書籍

街上不平	土岐哀果著	定價八十錢	東雲堂發行
メリメエ傑作集	厨川白村 一宮榮 譯	定價七十五錢	大日本圖書株式會社
惡魔主義の思想と文藝	岩野泡鳴著	定價五十錢	天弦堂發行
未來派及立體派の藝術	木村莊八著	定價五十錢	天弦堂發行
個人主義思潮	相馬御風著	定價五十錢	天弦堂發行
硝子戸の中	夏目漱石著	定價六十錢	岩波書店發行
原始へ	村田光烈著	定價壹圓	東雲堂發行
善惡の觀念（イエーツ）	山宮允譯	定價壹圓二十錢	東雲堂發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■每月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）
■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓
■振替貯金口座は（東京二二一一六青鞜社）に拂込まれたし。
■郵券代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと）。
■編輯事務、圖書雜誌、補助團會費拂込、廣告申込、交換廣告は青鞜社へ。
■雜誌購讀に關する一切の事務は青鞜社へ。
■原稿〆切期日は每月十日限とす。

大正四年四月三十日印刷納本
大正四年五月一日發行

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
青鞜社內
編輯兼發行人　伊藤野枝

東京市神田區西小川町二丁目六番地
印刷人　篠田玉三

東京市神田區西小川町二丁目六番地
印刷所　大精社

禁轉載

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町九十二　青鞜社
振替東京二二一一六番

發賣所　神田表神保町三番地　東京堂
電話本局四五六一番
振替東京二七〇番

特價金四十錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昭和44年9月30日発行　【第6回配本】

青鞜第5巻　5月号

編著者	平塚らいてう
発行者	藤原正人
発行所	(株)明治文献
印刷	江明印刷
製本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
QL
456
B45
v.5
no.5

University of Colorado at Bould[redacted]
[redacted]04 6746521

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER